









Red seal impression, likely a collector's or publisher's mark, located in the bottom right corner of the left page.

運
命

國木田獨步作

□新潮社出版□

解 題

『運命』は、明治三十九年三月、『獨歩集』出で、後八ヶ月にして世に公にされたものである。『獨歩集』によりて漸く知らるゝに至つた彼の名聲を文壇に定めたものは、即ち此の一卷である。殊に、我が自然主義文學の勃興にしるし標したる名著なる事は知らぬ人はあるまい。作者が天才の輝きは此集出づるに及んで始めて世を射た。而して、新しい文藝の曙がそこから開けたのである。收むるところ九篇、いづれも當時文壇の驚異たりしもの。「運命論者」「酒中日記」「空知川の岸邊」等殊に世評の高かつたものである。

運命目次

運命論者……………一
 巡査……………三
 酒中日記……………四
 馬上の友……………八
 悪魔……………一〇五
 畫の悲み……………一四三
 空知川の岸邊……………一五二
 非凡なる凡人……………一六九
 日の出……………一八三

運命

國木田獨步

運命論者

秋の半過、冬近くなると何れの海濱を問はず、大方は淋れて来る、鎌倉も其通りで、自分のやうに年中住んで居る者の外は、濱へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網の男、或は濱づたひに往通ふ行商を見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。

或日自分は例ものやうに滑川の邊まで散歩して、さて砂山に登ると、思の外、北風が身に沁むので直ぐ麓に下りて其處ら日あたりの可い所、身體を伸して樂に書の讀めさうな所と四邊を見廻はしたが、思ふやうなところがないので、彼方此方と探し歩いた、すると一個所、面白い場所を發見した。

砂山が急に崩れて草の根で僅にこれを支へ、其下が雌のやうになつて居る、其根方に坐つて兩足を投げ出すと、脊は後の砂山に靠れ、右の臂は傍らの小高いところに懸り、恰度ソハに倚つたやうで、眞に心持の佳い場處である。

自分は持つて來た小説を懐から出して、心長閑に讀んで居ると、日は暖かに照り、空は高く晴れ、此處よりは海も見えず、人聲も聞えず、汀に轉がる波音の穩かに重々しく聞える外は四圍寂然として居るので、何時しか心を全然書籍に取られて了つた。

然るにふと物音の爲たやうであるから何心なく頭を上げると、自分から四五間離れた處に人が立つて居たのである。何時此處へ來て、何處から現はれたのか少しも氣がつかなくつたので、恰も地の底から湧出たかのやうに思はれ、自分は驚いて能く見ると、年輩は三十ばかり、面長の鼻の高い男、脊はすりとした瘦形、衣装といひ品といひ、一見して別荘に來て居る人か、それとも旅宿を取つて滯留して居る紳士と知れた。

彼は其處につつ立つて自分の方を凝と視て居る其眼つきを見て、自分は更に驚き且つ怪しんだ。敵を見る怒の眼か、それにしては力薄し。人を疑ふ猜忌の眼か、それにしては光鈍し。たゞ何心なく他を眺むる眼にしては甚だ凄味を帯ぶ。

妙な奴だと自分も見返して居ること暫し、彼は忽ち眼を砂の上に轉じて、一步々々、靜かに歩きだした。されども此窪地の外に出ようとは爲ないで、たゞ其處らをブラ／＼歩いて居る、そして時々凄い眼で自分の方を見る。一たいの様子が尋常でないで、自分は心持が悪くなり、場所を變へる積りで其處を起ち、砂山の上まで來て、後を顧みると、如何だらう怪の男は早くも自分の坐つて居た場處に身體を投げて居た！そして自分を見送つて居る管が、さうでなく立てた膝の上に腕組をして突伏して顔の腕の間に埋めて居た。

運命論者

餘りの不思議さに自分は様子を見てやる氣になつて、兎ある小蔭に枯草を敷いて這ひつくばひ、書を見ながら、折々頭を擧げて彼の男を覗つて居た。

彼はやゝ暫く顔を上げなかつた。けれども十分とは自分を待さなかつた、彼の起あがるや病人の如く、何となく力なげであつたが、起つたと思ふと其儘くると後向になつて、砂山の岨に面と向き、右の手で其麓を掘りはじめた。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を拂ひ、更に小さな洋盃様のものを出し、て、罎の栓を抜くや、一杯々々、三四杯續けさまに飲んだが、罎を静かに下に置き、手に杯を持つたまま、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。

そして又一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ轉じたと思ふと、洋杯を手にしたまゝ、自分の方へ大股で歩いて来る、其歩武の氣力ある様は以前の様子と全然違つて居た。

自分は驚いて逃げ出さうかと思つた。然し直ぐ思ひ返して其まゝ横になつて居ると、彼は間もなく自分の傍まで来て、怪げな笑味を浮べながら、

「貴様は僕が今何を爲たか見て居たてせう？」

と言つた聲は少し暖れて居た。

「見て居ました。」と自分は判然答へた。

「貴様は他人の秘密を覗うて可いと思ひますか。」と彼は益々怪げな笑味を深くする。

「可いとは思ひません。」

「それなら何故僕の秘密を覗ひました。」

「僕は此處で書籍を読むの自由を持つて居ます。」

「それは別問題です。」と彼は一寸眼を自分の書籍の上に注いだ。

「別問題ではありません。貴様が何にを爲ようと僕が何を爲ようと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴様に秘密があるなら自ら先づ秘密に爲たら可いでせう。」

彼は急にそはくして左の手で頭の毛を撈るやうに搔きながら、

「さうです、さうです。けれども彼れが僕の做し得るかぎりの秘密なんです。」と言つて暫らく言葉を途切し、氣を塞めて居たが、

「僕が貴様を責めたのは悪う御座いました、けれども何卒今御覽になつたことを秘密に爲て下さいませんか、お願いですが。」

「お頼とあれば秘密にします。別に僕の關したことはありませんから。」

「難有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ眞に失禮しました、匆卒貴様を詰めて……」

と彼は人を壓つけようとする最初の氣勢とは打つて變り、如何にも力なげに詫びたのを見て、自分も氣の毒になり、

「何もさう謝るには及びません、僕も實は貴様が先刻僕の前に佇立つて、僕ばかり見て居た時の風が何となく怪しかつたから、それで此處へ来て貴様の爲ることを覗うて居たのです。矢張貴様を覗つたのです。けれども彼の事が貴様の秘密とあれば、堅く僕は其秘密を守りますから御安心なさい。」

彼は黙つて自分の顔を見て居たが、

『貴様は必定守つて下さる方です。』と聲をふるはし、

『如何でせう、一つ僕の杯を受けて下さいませんか。』

『酒ですか、酒なら僕は飲まないはうが可いのです。』

『飲まないはうが！ 飲まないはうが！ 無論さうです。もう飲まないで済むことなら僕とても飲まないはうが可いのです。けれども僕は飲むのです。それが僕の秘密なんです。如何でせう、僕と貴様と斯うやつて話をするのも何かの運命です、怪しい運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の秘密の杯を受けして下さいませんか、え、如何でせう、受けて下さいませんか。』といふ言葉の節々、其聲音、其眼元、其顔色は實に大いなる秘密、痛ましい秘密を包んで居るやうに思はれた。

『よろしう御座います、それでは一つ戴きませう。』と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立つて元の場處へと引返へすので、自分も其後に従つた。

二

『これは上等のブランドーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時、銀座の龜屋へ行つて最上のを呉れろと内證で三本買つて来て此處へ匿して置いたのです、一本は最早たひらげて空罎は滑川に投げ込みました。これが二本目です、未だ一本この砂の中に埋めてあります、無くなれば又た買つて來ます。』

自分は彼の差した杯を受け、少しづつ啜りながら彼の言ふ處を聞いて居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益々高まるを禁じ得なかつた。けれども決して彼の秘密に立入らうとは思はなかつた。

『それで先刻僕が此處へ来て見ると、意外にも貴様が既に此場處を占領して居たのです、驚きましたね、怪しからん人もあるものだ、僕の酒庫を犯し、僕の酒宴の筵を奪ひながら平氣で書籍を讀んで居るなんと、僕はそれで貴様を見つめながら此處を去らなかつたのです。』と彼は微笑して言つた。其眼元には心の底に潜んで居る彼の優しい、正直な人柄の光さへ髣髴いて、自分には更に其が惨しげに見えた、其處で自分も笑を含み、

『さうでせう、それでなければあんな眼つきで僕を御覽になる譯は御座いません。さも恨めしさうでした。』

『イヤ恨めしくは御座いません、情なかつたのです。オヤ／＼乃公は隠して置いた酒さへも何時か他人の尻の下に敷れて了ふのか、と自分の運命を咄つたのです。咄ふと言へば凄く聞えますが、實は僕にはそんな凄い見も亦た氣力ありません。運命が僕を咄うて居るのです——貴様は運命といふことを信じますか？ え、運命といふことを。如何です、も一つ』と彼は鱧を上げたので、

『イヤ僕は最早戴きますまい。』と杯を彼に返し『僕は運命論者ではありません。』

彼は手酌で飲み、酒氣を吐いて、

『それでは偶然論者ですか。』

『原因結果の理法を信するばかりです。』

『けれども其原因は人間の力より發し、そして其結果が人間の頭上に落ち来るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が澤山ある。その時、貴様は運命といふ人間の力以上の者を感ぜませんか。』

『感じます、けれども其は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神祕らしい名目を其力に加へることは出来ません。』

『さうですか、さうですか、解りました。それでは貴様は宇宙に神祕なしと言ふお考なのです、要之、貴様には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明瞭なので、貴様の頭は二々が四で、一切が間に合ふのです。貴様の宇宙は立體でなく平面です。無窮無限といふ事實も貴様には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す當面の大いなる事實ではなく、數の連續を以てインフイニター(無限)を式で示さうとする

數學者のお仲間であらう。』と言つて苦しうな嘆息を洩し、冷かな、嘲るやうな語氣で、
『けれども、實は其方が幸福なのです。僕の言葉で言へば貴様は運命に祝福されて居る方、貴様の言葉で言へば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です。』

『それでは此で失禮します。』と自分は起上がった。すると彼は狼狽て自分を引止め、
『ま、ま、貴様怒つたのですか。若し僕の言つた事がお氣に觸つたら御勘辨を願ひます。つい其の自分で勝手に苦しんで勝手に色々なことを、馬鹿な役にも立たん事を考へて居るもんですから、つい見境も

なく饒舌のです。否、誰にも斯んなことを言つた事はないのです。けれども何んだか貴様には言つて見たら感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、貴様には笑はれるかも知れませんが。僕にはやはり怪しの運命が僕と貴様を引着けたやうに感ぜられるのです。不幸な男と思つて、もすこしお話し下さいませんか、もすこし……』

『けれども別にお話しするやうなことも僕には有りませんが……』

『さう言はないで何卒もすこし此處に居て下さいな、もすこし……。噫！如何して斯う僕は無理ばかり言ふのでせう！酔つたのでせうか。運命です、運命です、可う御座います、貴様にお話がないならば僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聽いて下さい、僕の不幸な運命を！』

此苦痛の叫びを聞いて何人か心を動かさざらん。自分は其儘止つて、

『聞きませうとも。僕が聽いてお差支へがなければ何事でも承はりませう。』

『聽いて下さいませうか。それならお話しませう、けれども僕は運命の怪しき力に惑うて居る者ですから、其積りで聽いて下さい。若し原因結果の理法と貴様が言ふなら、それでも可う御座います。たゞ其原因結果の發展が餘りに人意の外に出て居て、其爲に一人の若い男が無限の苦惱に沈んで居る事實を貴様が知りましたなら、それを僕が怪しき運命の力と思ふのも無理の無いことだけは承知下さるだらうと思ひます。で貴様に聞きますが、此處に一人の男があつて、其男が何心なく途を歩いて居ると、何處からとも知れず一の石が飛んで来て其男の頭に命中り、即死する、そのために其男の妻子は餓に沈み、其爲め

に母と子は争ひ、其爲に親子は血を流す程の慘劇を演ずるといふ事實が、此世に有り得ること、あなた貴様は信ずるでせうか。』

『實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ることゝは信じます、それは。』

『さうでせう、それなら貴様は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲慘が動もすれば、人の頭上に落ちてくるといふ事實を認むるのです。僕の身の上の如き、全く其れなので、殆んど信ず可らざる怪しい運命が僕を弄んで居るのです。僕は運命と言ひます。僕には其の外には信じられんですから。』と言つて彼は吻と嘆息を吐き、

『けれども貴様聽いて呉れますか。』

『聴きますとも！ 何卒かお話しなさい。』

『それなら先づ手近な酒のことから話させう。貴様は定めし不思議なことゝ思つて居るでせうが、實は世間に有りふれたことで、苦惱を忘れたさの魔酔劑に用ゐて居るのです。砂の中に隠して置くのは隠くして飲まなければならぬ宅の事情があるからなので、その上、此場所は如何にも静で且つ快潤で、如何な毒々しい運命の魔も身を隠して人を覗ふ暗い蔭のないのが僕の氣に入つたからです。此處へ身を横へて酒精の力に身を託し高い大空を仰いで居る間は、僕の心が幾何か自由を得る時です。その中には此激烈な酒精が左なきだに弱り果てた僕の心臓を次第に破つて、遂には首尾よく僕も自滅するだらうと思つて居ます。』

『そんなら貴様は、自殺を願うて居るのですか。』と自分は驚いて問うた。

『自殺ぢやアない、自滅です。運命は僕の自殺すら許さないので。貴様、運命の鬼が最も巧に使ふ道具の一作は「惑」ですよ。「惑」は悲しみを苦しみに變へます。苦惱を更に自乗させます。自殺は決心です。始終惑のために苦しんで居る者に、如何して此決心が起りませう。だから「惑」といふ鈍い、重々しい苦惱から脱れるには矢張、自滅といふ遅鈍な方法しか策がないのです。』

と沁々言ふ彼の顔には明かに絶望の影が動いて居た。

『如何いふ理由があるのか知りませんが、僕は他人の自殺を知つて之を傍観する譯には行きません。自滅といふも自殺に違ひないので。』と自分が言ふや、

『けれども自殺は人々の自由でせう。』と彼は笑味を含んで言つた。

『さうかも知れませんが。然し之を止め得るならば、止めるのが又人々の自由なり義務です。』

『可う御座います。僕も決して自滅したくは有りませんが、若し貴様が僕の物語を悉皆聽いて、其上で僕を救ふの策を立て、下さるのなら僕は此上もない幸福です。』

斯う聞いては自分も黙つて居られない、

『可しい！ 何卒か悉皆聽かして貰ひませう。今度は僕の方からお願ひします。』

三

『僕は高橋信造といふ姓名ですが、高橋の姓は養家のを冒したので、僕の元の姓は大塚といふです。』

大塚信造と言つた時のことから話しますが、父は大塚剛藏と言つて御存知でも御座いますか、東京控訴院の判事としては一寸世間でも名の知れた男で、剛藏の名の示す如く剛直一遍の人物。随分僕を教育する上には苦心したやうでした。けれども如何いふものか僕は小兒の時分から學問が嫌ひで、たゞ物陰に一人引込んで、何を考へることもなく茫然して居ることが何より好きでした。十二歳の時分と覺えて居ます、頃は春の末といふことは庭の櫻が殆んど散り盡して、色褪せた花瓣の未だ梢に残つて居たのが、若葉の隙からホロ／＼と一片三片落つる様を今も判然と想ひだすことが出来るので知れます。僕は土蔵の石段に腰かけて例の如く茫然と庭の面を眺めて居ますと、夕日が斜に庭の木の間に射し込んで、さなきだに静かな庭が、一層肅然として、凝然として、眺めて居ると少年心にも哀しいやうな楽しいやうな、所謂春愁でせう、そんな心地になりました。

人の心の不思議を知つて居るものは、兒童の胸にも春の静な夕を感じることの、實際有り得ることを否まぬだらうと思ひます。

兎も角も僕はさういふ少年でした。父の剛造はこのことを大變苦にして、僕のことを坊主臭い子だと數々小言を言ひ、僧侶なら寺へ與つて了ふなど怒鳴つたこともあります。それに引きかへ僕の弟の秀輔は腕白小僧で、僕より二ツ年齢が下でしたが、骨格も父に肖て逞しく、氣象もまるで僕とは違つて居たのです。

父が僕を叱る時、母と弟とは何時も笑つて傍で見て居たものです。母といふはお豊といひ、言葉の少

ない、柔和らしく見えて確固した氣象の女でしたが、僕を叱つたこともなく、さりとして甘やかす程に可愛がりもせず、言はず寄らず觸らずにして居たやうです。

それで僕の氣象が性來今言つたやうなのであるか、或はさうでなく、僕は小兒の時、早く不自然な境に置かれて、我知らずの孤獨な生活を送つた故かも知れないのです。

成程父は僕のことを苦にしました。けれども其心配はたゞ普通の親が其子の上を憂ふのとは異つて居たのです、それで父が「折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のやうな男は育て甲斐がない」と愚痴めいた小言を言ふ、其言葉の中にも僕の怪しい運命の穂先が見えて居たのですが、少年の僕には未だ氣が着きませんでした。

言ふことを忘れて居ましたが、其頃は父が岡山地方裁判所長の役で、大塚の一家は岡山の市中に住んで居たので、一家が東京に移つたのは未だ餘程後のことです。

或日のことでした、僕が平時のやうに庭へ出て松の根に腰をかけ茫然して居ると、何時の間にか父が傍に来て、

「お前は何を考へて居るのだ。持つて生れた氣象なら致方もないが、乃父はお前のやうな氣象は大嫌ひだ、最少し確乎しろ。」と眞面目の顔で言ひますから、僕は顔も上げ得ないで黙つて居ました。すると父は僕の傍に腰を下して、

「オイ信造」と言つて急に聲を潜め「お前は誰かに何か聞きは爲なかつたか。」

僕には何のことか全然解らないから、驚いて父の顔を仰ぎましたが、不思議にも我知らず涙含みました。それを見て父の顔色は俄に變り、益々聲を潜めて、

「匿すには及ばんぞ、聞いたら聞いたと言ふが可え。そんなら乃父には考案があるから。サア匿さずに言ふが可え。何か聞いたらう？」

此時の父の様子は餘程狼狽して居るやうでした。それで聲さへ平時と變り、僕は可怕くなりました。か
ら、しくしく泣き出すと、父は益々狼狽へ、

「サア言へ！ 聞いたら聞いたと言へ！ 匿すかお前は」と僕の顔を睨みつけましたから、僕も益々可
怕なり、

「御免なさい、御免なさい」とたゞ謝罪りました。

「謝罪れと言ふんぢやない。若し何かお前が妙なことを聞いて、それで茫然考へて居るぢやないかと思
ふから、それで訊くのだ、何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言へ！」と今度は眞實に怒つて言
ひますから、僕は何のことか解らず、たゞ非常な悪いことでも爲たのかと、おろろく聲で、

「御免なさい、御免なさい。」

「馬鹿！ 大馬鹿者！ 誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く。」

怒鳴られたので僕は喫驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは黙つて熱と僕の顔を見て居
ましたが、急に涙含んで、

「泣かんでも可え、最早乃父も問はんから、サア奥へ歸るが可え。」と優しく言つた其言葉は少ないが、
戀愛に満ちて居たのです。

其後でした、父が僕のことを餘り言はなくなつたのは。けれども又其後でした僕の心の底に一片の雲
影の沈んだのは。運命の怪しき鬼が其爪を僕の心に打込んだのは實に此時です。

僕は父の言葉が氣になつて堪りませんでした。これも普通の子供なら間もなく忘れて了つたやうと思
ひますが、僕は忘れる處か、間がな隙がな、何故父は彼のやうな事を問うたのか、父が斯くまでに狼
狽した處を見ると、餘程の大事であらうと、少年心に色々考へて、そして其大事は僕の身の上に關す
ることだと信ずるやうになりました。

何故でせう。僕は今でも不思議に思つて居るのです。何故父の問うたことが僕の身の上のこと、自分
で信ずるに至つたでせう。

暗黒に住みなれたものは、能く暗黒に物を見ると同じ事で、不自然なる境に置かれたる少年は何時し
か其暗き不自然の底に潜んで居る黒點を認めることが出来たのだらうと思ひます。

けれども僕の其黒點の眞相を捉へ得たのはずつと後のことです。僕は氣にかゝりながらも、これを父
に問ひ返すことは出来ず、又母には猶更ら出来ず、小さな心を痛めながらも月日を送つて居ました。そ
して十五の歳に中學校の寄宿舎に入れられました。其前に一ツお話しして置く事があるのです。

大塚の隣屋敷に廣い桑畑があつて其横に板葺の小さな家がある、それに老人夫婦と其ころ十六七にな

る娘が住んで居ました。以前は立派な士族で、桑園は則ち其屋敷跡ださうです。此老人が僕の仲善でしたが、或日僕に圍碁の遊戯を教へて呉れました。二三日経つて夜食の時、このことを父母に話しました。何時も遊戯のことは餘り氣にしない父が眼に角を立て、叱り、母すら驚いた眼を張つて僕の顔を見つめました。そして父母が顔を見合はした時の様子の尋常でなかつたので、僕は甚だ妙に感じました。何故僕が圍碁を敵としなければならぬか、それも後に解りましたが、其が解つた時こそ、僕が全く運命の鬼に壓倒せられ、僕が今の苦惱を嘗め盡す初めて御座いました。

四

僕の十六の時、父は東京に轉任したので大塚一家は父と共に移轉しましたが、僕だけは岡山中學校の寄宿舎に残されました。

僕は其後三年間の生活を想ふと、僕の此世に於ける眞の生活は唯だ彼の學校時代だけであつたのを知ります。

學生は皆な僕に親切でした。僕は心の自由を恢復し、惡運の手より脱れ、身の上の疑惑を懐くこと次第に薄くなり、沈鬱の氣象までが何時しか雪の融ける如く消えて、快濶な青年の氣を帯びて來ました。然るに十八の秋、突然東京の父から手紙が來て僕に上京を命じたのです。穩な僕の心は急に擾亂され、僕は殆んど父の眞意を知るに苦しみ、返書を出して切めて今一年、卒業の日まで此儘に爲て置いて貰はうかと思ひましたが、思ひ返して直ぐ上京しました。麴町の宅に着くや、父は一室に僕を喚んで、『早速

だがお前と能く相談したいことが有るのだ。お前これから法律を學ぶ氣はないかね。』

思ひもかけぬ言葉です。僕は驚いて父の顔を見つめたきり容易に口を開くことが出來ない。

『實は手紙で詳しく言つてやらうかとも思つたが、廻りくどいから喚んだのだ。お前も卒業までと思つたらうし、又大學までとも志して居たらうけれど、人は一日も早く獨立の生活を營む方が可いことはお前も知つて居るだらう。それでお前これから直ぐ私立の法律學校に入るのぢや。三年で卒業する。辯護士の試験を受ける。そして曉は私と懇意な辯護士の事務所世話してやるから、其處で四五年も實地の勉強をするのぢや。其内に獨立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も三十にならん内、堂堂たる紳士となることが出来る。如何ぢやな、其方が近道ぢやぞ。』といふ父の言葉を聽いて居る、僕の心の全く顛動したのも無理はないでせう。

これ實に他人の言葉です。他人の親切です。居候の書生に主人の先生が示す恩愛です。

大塚剛藏は何時しか其自然に返つて居たのです。知らず識らず其自然を暴露すに至つたのです。僕を外に置くこと三年、其實子なる秀輔のみを傍に愛撫すること三年、人間が其天真に歸るべき門、墳墓に近づくこと三年、此三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。けれども彼は未だ其自然を自認することが出來ず、何處までも自分を以前の父の如く、僕を以前の子の如く見ようとして居るのです。

其處で僕は最早進んで僕の希望を述べるところではありません、たゞこれ命これ從ふだけのことを手短かに答へて父の部屋を出てしまひました。

父ばかりでなく母の様子も一變して居たのです。日の經つに從うて僕は僕の身の上に一大秘密のあることを益々信ずるやうになり、父母の舉動に氣をつければつけるほど疑惑の増すばかりなのです。

一度は僕も自分の僻見だらうかと思ひましたが、生憎と想起すは十二の時、庭で父から問ひつめられた事で、彼を想ひ、これを思へば、最早自分の身の秘密を疑ふことは出来ないのです。

懊惱の中に神田の法律學校に通つて三月も経ちましたらうか。僕は今日こそ父に向ひ、斷然此方から言ひ出して秘密の有無を訊さうと決心し、學校から日の暮方に歸つて夜食を濟すや、父の居間にゆきました。父はランプの下で手紙を認めて居ましたが、僕を見て、『何ぞ用か』と問ひ、やはり筆を執つて居ます。僕は父の脇の火鉢の傍に坐つて暫く黙つて居ましたが、此時降りかけて居た空が愈々時雨で來たと見え、廂を打つ雲の音がバラ／＼聞えました。父は筆を擱いて徐ら此方に向き、

『何ぞ用でもあるか。』と優しく問ひました。

『少し訊ねたいことが有りますので、』と僅に口を切るや、父は早くも様子を見て取つたか、

『何ぢや。』と嚴かに膝を進めました。

『父様、私は眞實に父様の兒なのでせうか。』と豫て思ひ定めて置いた通り、單刀直入に問ひました。

『何ぢやと』と父の一言、其眼光の鋭さ！ けれども直ぐ父は顔を柔けて、

『何故お前はそんなことを私に聞くのぢや、何か私共がお前に親らしくないことでもして、それでさういふのか。』

『さういふ譯では御座いませんが、私には昔から如何いふ者か此疑ひがあるので、始終胸を痛めて居るので御座います、知らして益のない秘密だから父上も黙つてお居でになるのでせうけれど、私は是非それが知りたいので御座います。』と僕は靜かに、決然と言ひ放ちました。

父は暫時腕組をして考へて居ましたが、徐ろに顔を上げて、

『お前が疑つて居ることも私は知つて居たのぢや。私の方から言うた方がと思つたことも此頃ある。それで最早お前から聞かれて見ると猶ほ言うて了ふが可えから言ふことに爲よう。』とそれから父は長々と物語りました。

けれども父の知らして呉れた事實はこれだけなのです。周防山口の地方裁判所に父が奉職して居た時分馬場金之助といふ碁客が居て、父と非常に懇親を結び、常に兄弟の如く往來して居たさうです。その馬場といふ人物は一種非凡な處があつて、碁以外に父は其人物を尊敬して居たといふことです。その一子が則ち僕であつたのです。

父は其頃三十八、母は三十四で最早子は出来ないものと諦めて居ると、馬場が病で歿し、其妻も間もなく夫の後を追うて此世を去り、残つたのは二歳になる男の子、これ幸と父が引取つて自分の兒とし養つたので、父からいふと半分は孤兒を救ふ義侠でしたらう。

僕の生の父母は未だ年が若く、父は三十二、母は二十五であつたさうです。けれども母の籍が未だ馬場の籍に入らん内に僕が生れ、其爲でせう、僕の出生届が未だ爲てなかつたので、大塚の父は僕を引取

るや直に自分の兒として届けたのださうです。

以上の事を話して大塚の父のいふには、

『其後私は間もなく山口を去つたから、お前の私を實子でないと知るものは多くないのぢや。私達夫婦は飽くまで實子の積りでこれまで育てゝ来たのぢや。この先も同じことだからお前も決して僻見根性を起さず、何處までも私達を父母と思つて老先を見届けて呉れ。秀輔は實子ぢやがお前のことは決して知らさんから、お前も眞實の兒となつて生涯彼れの力ともなつて呉れ。』と、老の眼に涙を見るより先には最早泣いて居たのです。

其處で養父と僕とは此等の祕密を飽くまで人に洩らさぬ約束をし、又た僕が此先何かの用事で山口にゆくとも、たゞ他所ながら父母の墓に詣で、決して公にはせぬといふことを僕は養父に約しました。

其後の月日は以前よりも却つて穩かに過ぎたのです。養父も祕密を明けて却つて安心した様子、僕も養父母の高恩を思ふにつけて、心を傾けて敬愛するやうになり、勉學をも勵むやうになりました。

そして一日も早く獨立の生活を營み得るやうになり、自分は大塚の家から別れ、義弟の秀輔に家督を譲りたいものと深く心に決する處があつたのです。

三年の月日は忽ち逝き、僕は首尾よく學校を卒業しましたが、猶ほ養父の言葉に従ひ、一年間更に勉強して、さて辯護士の試験を受けました處、意外の上首尾、養父も大よろこびで早速其友なる井上博士の法律事務所に周旋して呉れました。

兎も角も一人前の辯護士となつて日々京橋區なる事務所に通うて居ましたが、若し彼のまゝで今日になつたら、養父も其目的通りに僕を始末し、僕も平穩な月日を送つて、益々前途の幸福を樂んで居たてせう。

けれども、僕は如何しても惡運の兒であつたのです。殆んど何人も想像することの出来ない陥穽が僕の前に出來て居て、惡運の鬼は慘酷にも僕を突き落しました。

五

井上博士は横濱にも一ヶ所事務所を持つて居ましたが、僕は二十五の春、此事務所に詰めることゝなり、名は井上の部下であつても其實は僕が獨立でやるのと同じことでした。年齢の割合には早い立身と云つても可いだらうと思ひます。

處が横濱に高橋といふ雜貨商があつて、随分盛大にやつて居ましたが、其主人は女で名は梅、所天は二三年前に亡なつて一人娘の里子といふを對手に、先づ贅澤な暮を爲て居たのです。

訴訟用から僕は此家に入ることゝなり、僕と里子は戀仲になりました。手短かに言ひますが、半年経たぬうちに二人は離れることの出來ないほど、逆せ上げたのです。

そして其結果は井上博士が媒妁となり、遂に僕は大塚の家を隠居し高橋の養子となりました。

僕の口から言ふも變ですが、里子は美人といふほどでなくとも随分人目を引く程の容色で、丸顔の愛嬌のある女です。そして遠慮なくいひますが全く僕を愛して呉れます、けれども此愛は却つて今では僕

を苦しめる一大要素になつて居るので、若し里子が斯くまでに僕を愛し、僕が又た斯うまで里子を愛しないならば、僕はこれほどまでに苦しみは爲ないのです。

養母の梅は今五十歳ですが、見た處、四十位にし見えず、小柄の女で美人の相を具へ、なか／＼立派な婦人です。そして情の烈しい正直な人柄といへば、智慧の方はやゝ薄いといふことは直ぐ解るでせう。快活で能く笑ひ能く語りますが、如何かすると恐しい程沈鬱な顔をして、半日何人とも口を交へないことがあります。僕は養子とならぬ以前から此人柄に氣をつけて居ましたが、里子と結婚して高橋の家に寝起することゝなりて間もなく、妙なことを發見したのです。

それは夜の九時頃になると、養母は其居間に籠つて了ひ、不動明王を一心不亂に拜むことで、口にごとか念じつゝ床の間にかけた火炎の像の前に禮拜して十時となり十一時となり、時には夜半過に及ぶのです。晝間の中、沈鬱いで居た晩は殊にこれが激しいやうでした。

僕も初めは黙つて居ましたが、餘り妙なので或日このことを里子に訊ねると、里子は手を掉つて聲を潜め、『黙つて居らつしやいよ。あれは二年前から初めたので、あのことを母に話すと母は大變機嫌を悪くしますから、成るべく知らん顔をして居たはうが可いんですよ。御覽なさい全然狂氣でせう。』と別に氣にもかけぬ様なので、僕も強ひては問ひもしなかつたのです。

けれども其後一月もして或日、僕は事務所から歸り、夜食を終へて雑談して居ると、養母は突然、『怨靈といふものは何年経つても消えないものだらうか。』と問ひました。すると里子は平氣で、

『怨靈なんて有るもんぢやないわ。』と一言で打消さうとすると、母は向になつて、『生意氣を言ひなさんな。お前見たことはあるまい。だからそんなことを言ふのだ。』

『そんなら母上は見えて?』

『オヤさう、如何な顔をして居て? 私も見たいものだ。』と里子は何處までも冷かしてかゝつた。すると母は凄いほど顔色を變へて、

『お前怨靈が見たいの、怨靈が見たいの。眞實に生意氣なことをいふよ此人は!』と言ひ放ち、つツと起つて自分の部屋に引込んで了つた。僕は思はず、

『母上如何か爲て居なさるよ、氣を附けんと……』

里子は不安な顔をして、

『私眞實に氣味が悪いわ。母上は必定何にか妙なことを思つて居るのですよ。』

『ちつと神経を痛めて居なさるやうだね。』と僕も言ひましたが、さて翌日になると別に變つたことはないので。變つて居るのは唯だ何時もの通り夜になると不動様を拜むことだけで、僕等もこれは最早慣れて居るから強ひて氣にもかゝりませんでした。

處が今歳の五月です、僕は例よりか二時間も早く事務所を退いて家へ歸りますと、其日は曇つて居たので家の中は薄暗い中にも母の室は殊に暗いのです。母に少し用事があつたので別に案内もせず襖を開

けて中に入ると、母は火鉢の傍にぼつねんと坐つて居ましたが、僕の顔を見るや、
 『ア、ア、アツ、アツ!』と叫んで突起つたかと思ふと、又尻餅を舂いて熱と僕を見た時の顔色! 僕
 は母が氣絶したのかと喫驚して傍に駈寄りました。

『如何しました、如何しました』と叫んだ僕の聲を聞いて、母は僅に坐り直し、

『お前だつたか、私は、私は……』と胸を撫つて居ましたが、其間も不思議さうに僕の顔を見て居たのです。僕は驚いて、

『母上如何なさいました。』と聞くと、

『お前が出抜に入つて来たので、私は誰かと思つた。お、喫驚した。』と直ぐ床を敷して休んで了ひました。

此事の有つた後は母の神経に益々異常を起し、不動明王を拜むばかりでなく、僕などは名も知らぬ神符を幾枚となく何處からか貰つて来て、自分の居間の所々に貼つけたものです。そして更に妙なのは、これまで自分だけで、勝手に信じて居たのが、僕を見て驚いた後は、僕に向つても不動を信じるといふので、僕が何故信じなければならぬかと聞くと、

『たゞ黙つて信じてお呉れ。それでないと私が心細い。』

『母上の氣が安まるのなら信仰も爲ませうが、それなら私よりもお里の方が可いでせう。』

『お里では不可せん。彼には關係のないことだから。』

『それでは私には關係があるのですか。』

『まあそんなことを言はないで信仰してお呉れ、後生だから。』といふ母の言葉を里子も傍で聞いて居ましたが、呆れて、

『妙ねえ母上、不動様が如何して母上と信造さんとは關係があつて、私には無いのでせう。』

『だから私が頼むのぢやありませんか、理由が言はれる位なら頼みはしません。』

『だつて無理だわ、信造さんに不動様を信仰しろなんて、今時の人にそんなことを勧めたつて……』

『そんなら頼みません!』と母は怒つて了つたので、僕は言葉を柔げ、

『イヤ私だつて不動様を信じないとは限りません。だから母上も其理由を話して下さいな。如何なとか知りませんが、親子の間だから少しも明されないやうなことは無いでせう。』と求めました。これは母の言ふ處に由つて迷信を壓へ神経を静める方法もあらうかと思つたからです。すると母は暫く考へて居ましたが、吐息をして聲を潜め、

『これ限りの話だよ、誰にも知らしてはなりませんよ。私が未だ若い時分、お里の父上に縁づかない前に或男に言ひ寄られて執着追ひ廻されたのだよ。けれども私は如何しても其男の心に従はなかつたの。さうすると其男が病氣になつて死ぬ間際に大變私を怨んで色々なことを言つたさうです。それで私も可い心持は爲なかつたが、此處へ縁づいてからは別に氣にもせんで暮して居ました。ところが所天が死くなつてからといふものは、其男の怨靈が如何かすると現はれて、可怖い顔をして私を睨み、今にも私を

取殺さうとするのです。それで私が不動様を一心に念ずると其怨靈かだんく消えて無くなります。それにね、と、母は一層聲を潜め、『この頃は其怨靈が信造に取ついたらしいよ。』

『まあ嫌な！』里子は眉を擡めました。

『だつてね、如何かすると信造の顔が私には怨靈そつくりに見えるのよ。』

それで僕に不動様を信じろと勧めるのです。けれども僕にはそんな眞似は出来ないから、里子と共に色々と怨靈などいふものゝ有るべきでないことを説いたけれど無益でした。母は堅く信じて疑はないので、僕等も持餘し、此鎌倉へでも来て居て精神を静めたらと、無理に勧めて遂に此處の別荘に入れたのは今年の五月のことです。』

六

高橋信造は此處まで話して来て忽ち頭をあげ、西に傾く日影を愁然と見送つて苦惱に堪へぬ様であつたが、手早く杯をあげて一杯飲み干し、

『この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事實を露骨に手短かに話しますから、其以上は貴様の推察を願ふだけです。』

高橋梅、則ち僕の養母は僕の眞實の母、生の母であつたのです。妻の里子は父を異にした僕の妹であつたのです。如何です、これが奇しい運命でなくて何としませう。斯の如きをも原因結果の理法といへばそれまでです。けれども、かゝる理法の下に知らず識らず此身を置かれた僕から言へば、此天地間にか

かる惨刻なる理法すら行はるゝを恨みます。

先づ如何して此等の事實が僕に知れたか、其手續を簡単に言へば、母が鎌倉に来てから一月後、僕は訴訟用で長崎にゆくこととなり、其途中山口、廣島などへ立寄る心組で居ましたから、見舞かたぐ鎌倉へ来て母に此事を話しますと、母は眼の色を變へて、山口などへ寄るなど言ひます。けれども僕の心には生の父母の墓に參る積りがありますから、母には可い加減に言つて置いて、遂に山口に寄つたのです。

豫て大塚の父から聞いて居たから寺は直ぐ分りました。けれども僕は馬場金之助の墓のみ見出して、死んだと聞いた母の墓を見ないので、不審に思つて老僧に遇ひ、右の事を訊ねました。尤も唯だ所縁のものとのみ、僕の身の上は打明けないのです。

すると老僧は馬場金之助の妻お信の墓のあるべき筈はない。彼の女は金之助の病中に、暮の弟子で、町の豪商某の弟と怪しい仲になり、金之助の病氣は其爲め更に重くなつたのを氣の毒とも思はず、遂に飲乳兒を置去りにして駈落して了つたのだと話しました。

老僧は猶も父が病中母を罵つたこと、死際に大塚剛藏に其一子を託したことまで語りました。其お信が高橋梅であるといふことは、誰も知らないのです。僕も證據は持つて居ません。けれども老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が則ちそれであることを確信したのです。僕は山口で直ぐ死んで了はうかと思ひました。彼の時、實に彼の時、僕が思ひ切つて自殺して了つた

ら寧ろ僕は幸ひであつたのです。

けれども僕は歸つて來ました。一つは何とかして確な證據を得たため、一は里子に引寄せられたのです。里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹として里子を考へることは如何しても出來ないので。

人の心ほど不思議なものはありません。不倫といふ言葉は愛といふ事實には勝てないのです。僕と里子の愛が却つて僕を苦しめると先程言つたのは此事です。

僕は里子を擁して泣きました。幾度も泣きました。僕も亦た母と同じく物狂しくなりました、憐れなるは里子です。總ての事が里子には怪しき謎で、彼はたゞ惑ひに惑ふばかり、遂には母と同じく怨靈を信ずるやうになり、今も横濱の宅で母と共に不動明王に祈念を凝して居るのです。里子は怨靈の本體を知らず、たゞ母も僕も此怨靈に苦しめられて居るものと信じ、祈念の誠を以て母と所天を救はうとして居るのです。

僕は成るべく母を見ないようにして居ます。母も僕に遇ふことを好みません。母の眼には成程僕が怨靈の顔と同じく見えるでせうよ。僕は怨靈の兒ですもの！

僕には母を母として愛さなければならん筈です、然し僕は母が僕の父を瀕死の際に捨て、僕を瀕死の父の病床に捨て、密夫と走つたことを思ふと、言ふべからざる怨恨の情が起るのです。僕の耳には亡父の怒罵の聲が聞えるのです。僕の眼には疲れ果てた身體を起して、何も知らない無心の子を擁き、男

泣きに泣き給うた様が見えるのです。そして此聲を聞き此様を見る僕には、實に怨靈の氣が乗移るので

す。夕暮の空ほの暗い時に、柱に靠れて居た僕が突然、眼を張り呼吸を凝らして天の一方を睨む様を見た者は母でなくとも逃げ出すでせう。母ならば氣絶するでせう。

けれども僕は里子のことを思ふと、恨も怒も消えて、たゞ限りなき悲哀に沈み、この悲哀の底には愛と絶望が戦うて居るのです。

處が此九月でした、僕は餘りの苦惱に平常殆んど酒杯を手にしぬ僕が、里子の止めるのも肯かず飲めるだけ飲み、居間の中央に大の字になつて居ると、何と思つたか、母が突然鎌倉から歸つて來て里子だけを其居間に呼びつけました。そして僕は酔つて居ながらも直ぐ其理由の尋常でないことを悟つたので

す。一時間ばかり經つと里子は眼を泣き膨らして僕の居間に歸つて來ましたから、

『如何したのだ。』と聞くと、里子は僕の傍に突伏して泣きだしました。

『母上が僕を離婚すると云つたのだらう。』と僕は思はず怒鳴りました。すると里子は狼狽て、『だからね、母が何と言つても所天決して氣にしないで下さいな。狂氣だと思つて投擲つて置いて下さいな、ね、後生ですから。』と泣聲を振はして言ひますから、『さういふことなら投擲つて置く譯に行かない。』と僕はいきなり母の居間に突入しました。里子は止める間もなかつたので、僕に續いて部屋に入つ

たのです。僕は母の前に坐るや、

『貴女は私を離婚すると里子に言つたさうですが、其理由を聞きませう。離婚するなら爲ても私は平氣です。或は寧ろ私の望む處で御座います。けれども理由を被仰い、是非其の理由を聞きませう。』と醉に任せて詰寄りました。すると母は僕の劍幕の餘り鋭いので喫驚して僕の顔を見て居るばかり、一言も發しません。

『サア理由を聞きませう。怨靈が私に乗移つて居るから氣味が悪いといふのでせう。それは氣味が悪いでせうよ。私は怨靈の兒ですもの。』と言ひ放ちました。見る／＼母の顔色は變り、物をも言はず部屋の外へ駆け出て了ひました。

僕は其まゝ母の居間に寢て了つたのです。眼が覺めるや酒の酔も醒め、頭の上には里子が心配さうに僕の顔を見て坐つて居ました。母は直ぐ鎌倉に引返したのでした。

其後僕と母とは會はないのです。僕は母に代つて此方に来て、母は今、横濱の宅に居ますが、里子は兩方を交る／＼介抱して、二人の不幸をば一人で正直に解釋し、たゞ／＼怨靈の業とのみ信じて、二人の胸の中の眞の苦惱を全然知らないのです。

僕は酒を飲むことを里子からも醫師からも禁じられて居ます。けれども如何でせう。此のやうな目に遇つて居る僕がブランデーの隱飲みをやるのは、果して無理でせうか。

今や僕の力は全く惡運の鬼に挫がれて了ひました。自殺の力もなく、自滅を待つほどの意久地のない

ものと成り果てゝ居るのです。

如何でせう、以上ザツと話しました僕の今日までの生涯の經過を考へて見て、僕の心持になつて貰ひたいものです。これが唯だ原因結果の理法に過ぎないと數學の式に對するやうな冷かな心持で居られるものでせうか。生の母は父の仇です、最愛の妻は兄妹です。これが冷かなる事實です。そして僕の運命です。

若し此運命から僕を救ひ得る人があるなら、僕は謹んで教へを奉じます。其人は僕の救主です。

七

自分は一言を交へないで以上の物語を聞いた。聞き終つて暫くは一言も發し得なかつた。成程悲惨なる境遇に陥つた人であるトツク／＼氣の毒に思つたのである。けれども止むなくんばと、

『斷然離婚なさつたら如何です。』

『それは新しき事實を作るばかりです。既に在る事實は其爲めに消えませぬ。』

『けれども其は止むを得ないでせう。』

『だから運命です。離婚した處で生の母が父の仇である事實は消えませぬ。離婚した處で妹を妻として愛する僕の愛は變りませぬ。人の力を以て過去の事實を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱るゝことは出来ないでせう。』

自分は握手して、黙禮して、此不幸なる青年紳士と別れた、日に既に落ちて餘光華かに夕の雲を染め、

願みれば我運命論者は淋しき砂山の頂に立つて沖を遙に眺めて居た。
其後自分は此男に遇はないのである。

巡 査

この頃ふとした事から自分は一人の巡査、山田銚太郎といふのに懇意になつた。年齢は三十四五でもあらうか、骨格の逞しい、脊の高い堂々たる偉丈夫である。

自分は人相のことはよく知らぬが、圓い顔の、口髭頬髭ともに眞黒で、鼻も眼も大きな、見た處は柔和の相貌とは言へないが、さて實際はなかく好人物なのが世間には随分ある、この巡査も其種類に屬するらしい。

若し其人が沈黙であつたなら、斯ういふのは餘り受の可い人相ではない。處が能く語り能く笑ふ、笑ふ時は其眼元に一種の愛嬌がこぼれる、語る時は對手の迷惑もなにも無頓着で、のべつに行る。そこで思ひもつかぬ比喩など用ゐて、それを得意で二度も三度も繰返す、如何だらう、斯ういふ人物は他の憎悪を受けるだらうか。

或日、明日は非番で宅に居ますから、是非入來しやいと頻りに促がされたから、午後一時ごろ自分は山田巡査を訪ねて見た。

「ね、是非入來しやい、何にもないが寒いから……これをやつて饒舌りませう。」とグイ飲の手眞似をして見せた。

指物屋の二階の一室が先生の住居である。仕事場の横から急な狭い梯子段を上ると、直ぐ當面に炭俵が置いてある、靴が墓のやうに一隅に眠つて居る、太い棒が其傍に突立つて番をして居る、多分ステツキといふのだらう。別の一室には書生でも居るか、微吟の聲が洩れて居たが、其前の薄暗い板間を通ると突當の部屋が山田巡查の宅。

「ヤツ、よく入来しやいました。サア此方へ、サア」と言ひながら急に起つて押入から座蒲團を一枚、長火鉢の向へ投出した。

先生一杯やりはじめて、やゝ酔の廻つて居る時分であつた。

「獨身者の生活は斯んなものでしてナ。御覽の通りで狭いも狭いし、世帯道具一切がこの一室にあるのだから、まア何のことはない豚小屋ですな、豚小屋で……」と其處らをきよろしく、何か探して居るやうであつたが、急に前の杯をグイと呑干して、

「まア一ツ！ 御飯が済んだのなら酒だけ一ツ、この酒は決して頭へ來るやうな酒ぢやア御座いませんから。」

自分は受けてちやぶ臺に置いた。成程狭いが、狭いなりに一室がきちんと整理して居る。作出しの押入が一間、室内にはみ出して其唐紙は補修だらけ、壁はきたなく落書がしてある、疊は黒い、障子は煤けて居る、成程むさくるしい部屋であるが、これ又何處となく掃除が届いてサツパリして居る。どうして、豚小屋どころか！

窓の下に机、机の右に書籍箱、横に長火鉢、火鉢に並んでちやぶ臺、右手の壁に沿うて箆筒、鼠入らず、其上に違棚、總てが古いが、總てが清潔である。煙草盆、菓子器、茶入、蓋物、帙入の書籍、總てが其處を得て、行儀よく並んで居る。書籍箱の上には盆栽の小鉢が三ツ四ツ置いてある。

自分は杯を返しながら、

「流石警官だけに貴様は大變清潔すぎですね。」

「ハ、、、イヤ清潔すぎていふ程のこともないが、これが私の性分ですナ、どうも悪い性分ですナ、他人のすることは氣に入らないうんだから困つて了ひます。殊に食器ですナア、茶碗でもなんでも他人に爲て貰うと如何も心持が悪い、それで悉皆自分でやりますがね……。」

「ぢやアいよく、獨身者眺向といふ性分ですね、ハ、、、。」

「全くさうです、だから國に女房もありますが決して呼びません、一人で不自由を感じないんですから。」
「夫人がお有リンなるんですか、さうですか、それぢやア何にも獨身者の佗住居を好んでするにやア當らないでせう、そしてお兒さんは？」

「小兒もあります、五歳になる男の兒が一人あります、がです、矢張一人のはうが氣樂ですナア」と手酌で飲みながら、「尤も私の妻を呼ばないのは他にも理由がありますかね。」

「どんな理由がありますか知りませんが、兎も角妻子があれば一家團樂の樂みを享けないのは嘘でせう？ 貴様さびしく思ひませんか。」

『イヤ全く孤獨しく感じないこともないですがナ、ナニ私も時々歸るし、妻もちよい／＼やつて來ますよ。汽車で日往復が出來ますからナニ便利な世の中ですよ、御心配には及びません、夜具も二人前備へてあります、ハツハツ、、、』

『ハ、、、先づさう諦めて居れば仔細はありませんナ』

『サア何か食つて下さい、ろくなものは御座いませんがね、どうです豆は、蜜柑でも。』

ちやぶ臺には煮豆、數子、蜜柑、酢魚といふ風なものが雜然と並べてある。柱にかけた花挿には印ばかりの松ケ枝、冬の日脚は傾いて西の窓をまともに射し、主人の顔は赤く眼はとろりとして矢張正月は正月らしい。

主人は專賣特許の厨爐にかけた鐵瓶から徳利を出しながら、

『全く一人のはうが氣樂ですよ。サア熱いところを一ツ、それに私は敢へて好んで妻を持つたわけぢやアないんですからナ。ふとした處から養子に貰はれたので、若しそれで無かつたら今でも獨身でサア、第一巡查をして妻子を養つて樂みをしようなんて、ちつと出來にくい藝ですナ、蛇の綱渡よりか困難しいことです、エ、貴様は蛇の綱渡を見たことがありますか、私は一ツ見ました。姓名は言はれませんが、私どもの仲間にも妻と子供の三人と母親とを養つて、それで小ザツパリと暮して居るものがある、感心なものでせう、尤も酒は呑みません、煙草もやりません。こんな男は例外です。私どもには到底出來ない藝です。』

『然し田舎に細君を置いてた處で費るものは費るから同じ事とせう、文句を言はないで一緒におんななさい、細君が可哀さうだ。』

『ハ、、、ツ貴様は大に細君孝行だ、イヤ私だつてね、まんざら女房を可愛がらないわけではないんだが、田舎には多少の資産があるんです、それに未だ父母も居ますから却つて妻は先方に居たほうが双方の便利なんです。まア私なんざア全く道樂で斯んな職をやつて居るんでサア、イヤになれば直ぐ止めて田舎へ引込んだつて食ふに困るやうなことはないんですからナア。』

『氣樂ですねエ。』

『全く氣樂です！ だから酒は石崎から斯うやつて樽で取つてグイ／＼飲むのですが、澤之鶴も可いが私どもにやア少し甘味が勝つて居るやうで却つてキ印の方が口に合ひます、どうも料理屋の混成酒だけは閉口しますナア。』

と先生頻りに酒の品評をはじめ、混成酒の攻撃をやつて居たが、酔は益々發して來たらしい。

『どうです、一ツ隱藝をお出しなさい、エ、僕ですか、僕は全く無藝、たゞ飲めば則ち眠る、直ぐ寝て了ひます！』

成程さも眠むさうな、とろんこな眼をして居る。

『僕でも貴様方のやうにナア、文章が書けるなら随分書いて見たい事があるんだが、だめだ！』
と暫く眼を閉ぢて黙つて居たが、急につこり笑つて、

『ウンさうだー、一ツ見て貰ふものがある。』

と机の抽斗ひきたしから草稿らしい者を五六枚出して、其一枚を自分の前へ突出した。見ると漢文で、『題警察法』といふ一篇である。

『夫れ警察の法たる事無きを以て至れりと爲す』

と一種の口調で體軀からだをゆりながら漢文を朗讀しだした。

『事を治とむる之に次ぐ、エ、どうです。』

『賛成々々。』

『功無きを以て盡すと爲す、功を立つる之に次ぐ、故に、どうです、故に日夜奔走して而して事を治とめ、千辛萬苦して而して功を立つる者は上の上なる者に非ざる也。』

『だから臥ねて居るてんですか。』

『ハ、、、ツまア先を聞いて下さい。最上の法は事を治とむるに非ず、功を立つるに非ず、常に無形に見、無形に聴き、以て其機先せきを制す、故に事有るなくして而して自ら治とり、功爲す無くして而して自ら成る、是れ所謂る爲し易きに爲し、而して治め易きに治とむる者也。どうです名論でせう！ 是この故に善く警察の道を盡す者は功名無く、治跡無く、神機妙道只だ其人に存す焉、愚者解す可からざる也、夫子曰く人飲食せざる莫なき也、能く味あじひを知る鮮あまなき也！ 文章は拙ちいが主意はどうです。』

『文章も面白い、主意は大賛成です！』

『神機妙道只だ其人に存す、愚者解すべからざるなりか、ハ、、、ツ』と頗る得意である。

『先づ酒でも飲んで十分精神を養つて其機先せきを制すと行くのです、エ、どうです熱あつい處ところを。』

『もう僕は澤山！ 何か外に面白いものはありませんか、詩のやうな者は。』

『詩ですか、あります、有りますもすさまじいが幼學便覽で出来といふのが、二三ダースあります。』と罫紙に清書したのを四五枚出して見せたが、

『イヤ讀まれちゃア困ります、一ツ二ツ僕が吟じます、さてと、どれもまづいなア、春夜偶成かナ、朦朧烟月の下、一醉花に對して眠る、風冷ひややかに夢驚さむき覺れば、飛紅枕邊を埋むはどうです、エ、これは下田歌子さんの歌に何とかいふのが有りましたねエ、そら何と言ひましたなア、今ちよつと忘れましたが、それを翻譯したのですが、まるで比較になりませんア、あの婆さん、と言つちやア失禮しつれいだが全く歌はうまいもんですなア』と左右に身軀からだを揺動ゆぶりながら、今一度春夜偶成を繰返した。『それから此處に一ツちよつと異ちがうのが有ります、權門所見と題して、權門昏夜哀を乞ふ頻しばしばりなり、朝あしたに見る揚々として意氣新なるを、妻妾は知らず人の罵倒するを、醜郎滿面髯塵を帶ぶはどうです、エ。』

『痛快ですなア。』

『これは或大臣の警衛けいゑいをして居た時の作です、醜郎の滿面、髯塵を帶ぶ——かね。』

『も一ツ。』

『さうですなア』と草稿を繰返して居たが、突如として、『故山の好景久しく相違ふ、斗米官遊未だ非を

運

命

悟らず、杜宇^{とら}呼び醒す名利の夢、聲々復た不如歸を喚^よぶ。ハツハツ、、、。到頭^{ほんね}本音を吐^はいちゃツた！』

『ハツハツ、、、。到頭^{ほんね}本音が出ましたね。』

『ハツ、、、。』と笑つたが山田巡査は眼を閉ぢたまゝ何を考へるともなく、うつら／＼として居る様子であつた、半分居眠つて居るのである。突然、

『イヤ矢張この方が氣樂だ！』と叫んで、眼を見開き、自分を見て莞爾^{ちんりやわ}笑つたが、直ぐ又居眠を始めた。

自分は暫時^{ちと}凝然^{じやうぜん}として居たが、起すのも氣の毒と、そつと起つて室^{むろ}を出た。

指物屋^{さしものや}の店から四五十間下ると四辻がある、自分は此處に來た時、後^{あと}を振り向くと、指物屋の二階の

窓から山田巡査の髭^{ひげ}髯^{ひげ}だらけの顔が出て居た。頻りと點頭^{おびき}をして居た。

自分は全然^{すつかり}この巡査が氣に入つて了つた。

酒中日記

五〇〇〇。五月三日(明治三十×年)

『あの男は如何^{どう}なつたか知ら』との噂、よく有ること、四五人集つて以前の話が出ると、消えて去^なくなつた者の身の上に、ツイ話が移るものである。

この大河今藏、恐らく今時分やはり同じやうに噎せられて居るかも知れない。『時に大河は如何^{どう}したらう。』升屋の老人口をきる。

『最早^{もつ}死んだかも知れない。』と誰か氣の無い返事を爲^する。『全くあの男ほど氣の毒な人はないよ。』と老人は例の哀^{あは}れっぽい聲。

氣の毒がつて下さる段は難有い。然し幸か不幸か、大河といふ男今以て生^いきて居る、而も頗る達者、此先何十年此世に呼吸^{いそ}の音を續けますことやら。憚りながら未^まだ三十二で御座る。

まさか此小^ちぼけな島、馬島といふ島、人口百二十三の一人^{ひとり}となつて、二十人あるなしの子供を對^{あひま}手にやはり例の教員、然し今度は私塾なり、アイウエオを教へて居るといふ事は御存知あるまい。無いのが當然で、斯く申す自分すら、自分の身が流れ流れて思ひもかけぬ此島で斯んな暮^{くらし}を爲^するとは夢にも思はなかつたこと。

酒中日記

喉をすれば影とやらで、ひよつくり自分が現はれたなら、升屋の老人喫驚りして開いた口がふさがらぬかも知れない。『いつたい君は如何したといふんだ』と漸とのこととで聲を出す。それから話して一時間も経つと又喫驚、今度は腹の中で、『いつたい此男は如何したのだらう、五年見ない間に全然氣象まで變つて了つた。』

驚き給ふな原因がある。第一、日記といふ者書いたことのない自分が斯うやつて、こまめに筆を走らして、如何でもよい自分のやうな男の身の上の有つたことや、有ることを、今日からポツ／＼書いて見ようといふ氣になつたのからして、自分は五年前の大河では御座らぬ。

あゝ今は氣樂である。此島や島人はすっかり自分の氣に入つて了つた。瀬戸内にこんな島があつて、自分のやうな男を、兎も角も呑氣に過さして呉れるかと思ふと、正にこれ夢物語の一章一節、と言ひたくなる。

酒を呑んで書くと、少々手がふるへて困る、然し酒を呑まないで書くと心がふるへるかも知れない。

『あゝ氣の弱い男！』何處に自分が變つて居る、やはりこれが自分の本音だらう。

可愛い／＼お露が遊びに來たから、今日はこれで筆を投げる。

五月四日

自分が升屋の老人から百圓受取つて机の抽斗に納つたのは忘れもせぬ十月二十五日事の初が此の日で、其後自分は此日に逢ふごとに頸を縮めて眼をつぶる。なるべく此日の事を思ひ出さないようにして

居たが、今では平氣なもの。

一件があり／＼と眼の先に浮んで來る。

あの頃の自分は眞面目なもので、酒は飲めても飲まぬやうに、謹嚴正直、いやはや四角張つた男であつた。

老人連、全然惚ん込れてしまつた。一にも大河、二にも大河。公立八雲小學校の事は大河でなければ竹箒一本買ふことも決定るわけにゆかぬ次第。校長になつてから二年目の升屋の老人、遂に女房の世話まで焼いて、お政を自分の妻にした。子が出來た。お政も子供も病身、健康なは自分ばかり。それでも一家無事に平和に、これぞといふ面白いこともない代り、又これぞといふ心配もなく日を送つて居た。

處が日清戦争、連戦連勝、軍隊萬歳、軍人でなければ夜も日も明けぬお目出度いことゝなつて、そして自分の母と妹とが墮落した。

母と妹とは自分達夫婦と同棲するのが窮屈で、赤坂區新町に下宿屋を開業。それも表向ではなく、例の素人下宿。いやに氣位を高くして、家が廣いから、それにどうせ遊んで居る身體、若いものを世話してやるだけのこと、もつとも性の知れぬお方は御免被るとの觸込み。

自體拙者は氣に入らないので、頻りと止めて見たが、もつ／＼強情我慢な母親、妹は我儘者、母に甘やかされて育てられ、三絃まで仕込まれて自墮落者に首尾よく成りおほせた女。お前たちの厄介にさへならなければ可からうとの挨拶で、頭から自分の注意は取あげない。

これぞといふ間違もなく半年経ち、日清戦争となつて、兵隊が下宿する。初は一人の下士。これが導火線、類を以て集り、終には酒、歌、軍歌、日本帝國萬々歳！そして母と妹との墮落。『國家の干城たる軍人』が悪いのか、母と妹とが悪いのか、今更いふべき問題でもないが、たゞ一の動かすべからざる事實あり曰く、娘を持ちし親々は、それが華族でも、富豪でも、官吏でも、商人でも、皆な悉く軍人を尊に持ちたいといふ熱望を以て居たのである。

娘は娘で軍人を情夫に持つことは、寧ろ誇るべきことである、とまで思つて居たらしい。軍人は軍人で、殊に下士以下は人の娘は勿論、後家は勿論、或は人の妻をすら翫弄して、それが當然の權利であり、國民の義務であるとまで濟まして居たらしい。

三圓貸せ、五圓貸せ、母はそろ／＼自分を攻め初めた。自分は出来るだけ其の望に應じて、苦しい中を何とか工夫して出してやつた。

月給十五圓。それで親子三人が食つてゆくのである。なんて餘裕があらう。小學校の教員はすべからく燒鹽か何かで三度のめしを食ひ、以て教場に於ては國家の干城たる軍人を崇拜すべく、七歳より十三四歳までの兒童に教訓せよと時代は命令して居るのである。

唯々として自分は此命令を奉じて居た。

然し母と妹との節操を軍人閣下に献上し、更に又、此十五圓の中から五圓三圓と割いて、母と妹とが淫酒の料に捧げなければならぬかを思ひ、流石お人好の自分も頗る當惑したのである。

酒が醒めかけて来た！今日はこゝで止める。

五月六日

昨日は若い者が三四人押かけて来て、夜の十二時過ぎまで飲み、だみ聲を張上げて歌つたので疲れて了ひ、何時寝たのか知らぬ間に夜が明けて今日。それで昨日の日記がお休み。

さても氣樂な教員。酒を飲まうが歌はうが、お露を可愛がつて抱いて寝ようが、それで先生の資格なしとやかましく言ふ者は此島に一人もない。

特別に自分を尊敬も爲ない代りに、魚あれば魚、野菜あれば野菜、誰が持つて来たとも知れず臺所に投りこんである。一升徳利をぶらさげて先生、憚りながら地酒では御座らぬ、お露の酌で飲んで見させと縁先へ置いて去く老人もある。

あゝ氣樂だ、自由だ。母もいらぬ、妹もいらぬ、妻子もいらぬ。慾もなければ得もない。それで居てお露が無暗に可愛いのは不思議ぢやないか。

何が不思議。可愛いから可愛いので、お露とならば何時でも死ぬる。

十日前のこと、自分は縁先に出て月を眺め、臆に霞んで湖水のやうな海を見おろしながら、お露の酌で飲んで居ると、ふと死んだ妻子のこと、東京の母や妹のことを思ひだし、又此身の流轉を思つて、我知らず涙を落すと、お露は見て居たが、其鈴のやうな眼に涙を一ぱい含ませた。その以前、自分はお露に涙を見せたことなく、お露も亦た自分に涙を見せたことはないのである。さても可愛い此娘、此大河

なる團栗眼の猿のやうな面をして居る男にも何處か異な處が有るかして、朝夕暮ひ寄り、少女心の限りを盡して親切にして呉れる不慳さ。

自然生の三吉が文句ぢやないが、今となりては、外に望は何にもない、光榮ある歴史もなければ國家の干城たる軍人も居ない此島。此島に生れて此島に死し、死しては彼の、そら今風が鳴つて居る山陰の静かな墓場に眠る人々の仲間入りして、此島の土になりたいばかり。

お露を妻に持つて島の者にならつせ、お前さん一人、遊んで居ても島の者が一生養つて上げまき、と六兵衛が言つて呉れた時、嬉しいやら情けないやらで泣きたかつた。

そして見ると、自分の周囲には何處かに悲惨の影が取巻いて居て、人の憐愍を自然に惹くのかも知れない。自分の性質には何處かに人なつこいところがあつて、自と人の親愛を受けるのかも知れない。何れにせよ、自分の性質には思ひ切つて人に逆らうことの出来る、ピンとした處はないので、心では思つても行に出すことの出来ない場合が幾多もある。

あゝ哀れ氣の毒千萬なる男よ！ 母の爲め妹の爲めに可くないと思つた下宿の件も遂には止め終せなかつたも當然。母と妹の淺ましい墮落を知りつゝも思ひ切つて言ひだし得ず、言ひだしても争ふことの出来なかつたも當然。苦しい中を算段して、いや／＼ながらも母と妹とに姪酒の料をさ／＼上げたもこれ又當然。

二十四日の晩であつた、母から手紙が来て、明二十五日の午後まかり出るから金五圓至急に調達せよ

と申込んで来た時、自分は思はず吐息をついて長火鉢の前に坐つたまゝ拱手をして首を垂れた。

『如何なさいました？』と病身な妻は驚いて問うた。

『これを御覽』と自分は手紙を妻に渡した。妻は見て居たが、これも黙つて吐息したまゝ手紙を下に置く。

『何故こんな無理ばかり言つて来るだらう。』

『さうですね……』

『最早一文なしだらう？』

『一圓ばかり有ります。』

『有つたつて其を渡したら家で困つて了ふ。可いよ、明日母上が来たら私がきつぱりお謝絶するから。』

さう／＼は私達だつて困らアね。それも今日母上や妹の露命をつなぐ爲めとか何とか別に立派な費ひ途でも有るのなら、借金してだつて、衣類を質草に爲たつて五圓や三圓位なら私の力にても出来して上げるけれど、兵隊に貢ぐのやら譯もわからない金だもの。可いよ、明日こそ私が思ひきり言ふから、それで聴かないなら如何にでも勝手になさいと言つてやるから。』

『言ふのはお止しなさいよ。』

『何故や、言ふよ、明日こそ言ふよ。』

『だつてね母上のことだから又大きな聲をして必定お怒鳴になるから、近處へ聞えても外聞が悪いし、それにね、貴所が思ひ切つたことを被仰ると直ぐ私が恨まれますから。それでなくても私が氣に喰はん

から一緒に居たくても爲方なしに別居して嫌な下宿屋までして居るんだつて言ひふらしてお居てになる
んですから。」とお政は最早泣き聲になつて居る。

「然し實際明日母上が見えたつて渡す金が無いぢやアないか。」

「私が明日のお晝までに如何にか致します。」

「如何にかつて、お前に出来る位なら私にだつて何とか爲りさうなものだが、實際始末にいけないのぢ
やないか。」

「今度だけ私にまかせて下さい、何とか致しますから。」と言はれて自分は強ひて争はず、めいり込んだ

氣を引きたて、改築事務を少しばかり執つて床に就いた。

五月七日

〇〇〇〇

一寝入したかと思ふと、フト眼が覺めた、眼が覺めたのではなく可怕しい力が闇の底から手を伸して

揺り起したのである。

其頃學校改築のことで自分は其委員長。自分の外に六名の委員が居ても多くは有名無實で、本氣で世

話を焼くものは自分の外に升屋の老人ばかり。豫算から寄附金のことまで自分が先に立つて苦勞する、

敷地の買上、其代價の交渉、請負師との掛引、割當てた寄附金の取立、現金の始末まで自分に爲せられ

るので、自然と算盤が机の上に置かれ通し。持前の性分、間に合はして置くことが出来ず、朝から寝る

まで心配の絶えない處へ、母と妹とが墮落の件。殊に又ぞろ母からの無理な申込みで頭を痛めた故か、

其夜は寝ぐるしく、怪しい夢ばかり見て我ながら眠つて居るのか、覺めて居るのか判然ぬ位であつた。

何か物音が爲たと思ふと眼が覺めた。さては盜賊と半ば身體を起してきよろ／＼と四邊を見廻したが、

森として其様子もない。夢であつたか現であつたか、頭が錯亂して居るので判然しない。

言ふに言はれぬ恐怖しさが身内に漲つて、如何しても其儘眠ることが出来ないの、思ひ切つて起上

がつた。

次の八疊の間の間の襖は故意と一枚開けてあるが、豆洋燈の火は其入口までも達かず、中は眞闇。自

分の寢て居る六疊の間すら煤けた天井の影暗く被ひ、露霧でもかゝつたやうに思はれた。

妻のお政はすや／＼と寝入り、其傍に二歳になる助が其顔を小枕に押着けて愛らしい手を母の腮の下

に遠慮なく突込んで居る。お政の顔色の悪さ。さなきだに蒼ざめて血色悪しき顔に夜目には死人かと思

しまれるばかり。剩へ髪は亂れて頬にかゝり、頬の肉やゝ落ちて、身體の健かならぬと心に苦勞多きと

を示して居る。自分は音を立てぬように其枕元を歩いて、長火鉢の上なる豆洋燈を取上げた。

暫時聴耳を聳て何を聞くともなく突立つて居たのは、猶ほ八疊の間を見分する必要の有るかと思つて

居るので。しかし確に箆筒を開ける音がした、障子をす／＼と開ける音を聞いて、夢か現か兎も角と

八疊の間に忍足で入つて見たが、別に異變はない。縁端から、臺所に出て眞闇の中をそつと覗くと、臭

氣のある冷たい空氣が氣味悪く顔を掠めた。敷居に立つて豆洋燈を高くかゝげて眞暗の隅々を熟と見て

居たが、櫛の横にかくれて黒い風呂敷包が半分出て居るのに目が着いた。不審に思ひ、中を開けて見る

と現はれたのが一筋の女帯。
驚くまいことか、これお政が外出の唯た一本の帯、升屋の老人が特に祝つて呉れた品である。何故これが此所に隠してあるのだらう。

自分の寢靜まるのを待つて、お政はひそかに箆笥から此帯を引出し、明朝早くこれを質屋に持込んで母への金を作る積りと思ひ當つた時、自分は我知らず涙が頬を流れるのを拭き得なかつた。

自分は其まゝ帯を風呂敷に包んで元の所に置き、寢間に還つて長火鉢の前に坐り、烟草を吹かしながら物思に沈んだ。自分は果して彼の母の實子だらうかといふやうな怪しい怪ましい考へが起つて来る。現に自分の氣性と母及び妹の氣象とは全然異つて居る。然し父には十の年に別れたのであるから、父の氣象に自分が似て生れたといふことも自分には解らない。かすかに覺えて居る所では父は柔和い方で、荒々しく母や自分などを叱つたことはなかつた。母に叱られて柱に縛りつけられたのを父が解いて呉れたことを覺えて居る。其時母が父にも怒を移して怪食に口をきいたことをも思ひ出し、父のこと母のこと、それから其へと思を聯ね、果は親子の愛、兄弟の愛、夫婦の愛などいふことにまご考へ込んで、これまでに知らない深い人情の祕密に觸れたやうな氣にもなつた。

お政は痛ましく助は可愛く、父上は戀しく、懐かしく、母と妹は憎くもあり、痛ましくもあり、子供の時など思ひ起しては戀しくもあり、突然寄附金の事を思ひだしては心配で堪らず、運動場に敷く小砂利のことまで考へだし、頭はぐらぐらして氣は遠くなり、それで居て神経は何處に焦々した氣味がある

嗚呼！ 何故彼の時自分は酒を呑まなかつたらう。今は舌打して飲む酒、呑めば酔ひ、酔へば楽しい此酒を何故飲まなかつたらう。

五月八日

明くれば十月二十五日、自分に取つて大厄日。

自分は朝起きて、日曜日のことゆゑ朝食も急がず、小兒を抱いて庭に出て、其處らをぶらぶら散歩しながら考へた、帯の事を自分から言ひ出して止めようかと。

然し止めて見た處で別に金の工面の出来るでもなし、さりとて斷然母に謝絶することは妻の斷て止める處でもあるし。つまり自分は知らぬ顔をして居て妻の爲すがまゝに任すことに思ひ定めた。

朝食を終るや直ぐ机に向つて改築事務を執つて居ると、升屋の老人、生垣の外から聲をかけた。

『お早う御座い。』と言ひつゝ、縁先に廻つて、『朝ばらから御勉強だね。』

『折角の日曜も此頃はつぶれて御座います。』

『ハハハハッ何に今に遊ばれるよ、學校でも立派に出来あがつた處で、しんみりと戦ひたいものだ、私は今からそれを樂みに爲て居る。』

座に着いて老人は烟管を取出した。此老人と自分、外に村の者、町の者、出張所の代診、派出所の巡查など五六名の者は筑碁の仲間、殊に自分と升屋とは暇さへあれば氣永な勝負を争つて樂んで居たの

が、改築の騒から此方、外の者は兎も角、自分は殆んど何より嗜好、唯一の道樂である碁すら打ち得なかつたのである。

『來月一ばいは打てさうもありません。』

『その代り冬休といふ奴が直ぐ前に控へて居ますからな。左右に火鉢、甘い茶を飲みながら打つ樂みは又別だ。』といひつゝ老人は懷中から新聞を一枚出して、急に眞顔になり、

『ちよつと是を御覽。』

披げて二面の電報欄を指した。見ると或地方で小學校新築落成式を舉げし當日、廊下の欄倒れて四五十人の兒童庭に顛落し重傷者二名、輕傷者三十名との珍事の報道である。

『大變ですね。どうしたと言ふんでせう？』

『だから私が言はんことぢやアない。其通りだ、安普請をするると其通りだ。原などは餘り經費がかゝり過ぎるなんて理窟を並べたが、斯ういふ實例が上つて見ると文句はあるまい。全體大切な兒童を幾百人と集るのだもの、丈夫な上にも丈夫に建てるのが當然だ。今日一つ原に會つて此新聞を見せてやらなければならん。』

『無闇な事も出来ませんが、今度の設計なら決して高い豫算ぢや御座いませんよ、何にしるあの建坪ですもの、八千圓なら安い位なものです。』

『いや其安價のが私や氣に喰はんのだが、先づ御互の議論が通つて彼の豫算で行くのだから、さう安ほ

い直ぐ欄の倒れるやうな險呑なものは出来上らんと思ふがね。』と言つて氣を更へ、『其處で寄附金ぢやが

未だ大きな口が二三残つては居ないかね？』

『未だ三口ほど残つて居ます。』

『それぢやア私がこれから廻つて見よう。』

『さうですか、それでは大井様を願ひます。今日渡すから人をよこして呉れると云つて來ましたから。』

『百圓だつたね？』と老人は念を推した。

『さうです。』

其處で老人は程遠からぬ華族大井家の方へ廻るとして出行きたるに引きちがへてお政は外から歸つて來た。老人と自分が話して居る間に質屋に行つて來たのである。

『金は出来たらうか。』と自分は何處までも知らぬ顔で聞いた。妻は、

『出來ました。』と言ひつゝ小兒を脊から下して膝に乗せた。

『如何して出來たのだ。』と自分は問はざるを得なくなつた。

『如何してでも可いぢやアありませんか、私が……』と言ひかけて淋しげな笑を洩した。

『さうさ、お前に任したのだから……處で母上さんが見えたら最早下宿屋は止して一緒に下さいと言つて見ようぢやないか。』

『言つた處で無益で御座いますよ。』

『無益といふこともあるまい。熱心に説けば……』

『無益ですよ、却つて氣を悪くなさるばかりですよ。』

『それは多少か氣を悪くなさるだらうけれど、言はないで置けばこの後どんなことに成りゆくかも知れないよ。』

『さうですねえ……然し兵隊さんと如何とかいふやうなことは被仰んはうが可う御座いますよ。』

『まさか其んなことまでも言はれも爲まいけれど。』

一時間立たぬうちに升屋の老人は歸つて来て、

『甘く行つたよ。』と座に着いた。

『どうも御苦勞様でした。』

『ハイ確かに百圓。渡しましたよ。検めて下さい。』と紙包を自分の前に。

『今日は日曜で銀行がだめでですから貴所の宅に預つて下さいませんか。私の家は用心が悪う御座いますから。』と自分が言ふを老人は笑つて打消し、

『大丈夫だよ、今夜だけだもの、私宅だつて金庫を備へつけて置くほどの酒屋ぢやアなし、ハツハツ、

ハ、ハ、取られる時になりや私の處だつて同じだ。大井様は濟んだとして、後の二軒は誰が行く筈にな

つて居ます。』

『午後私が廻る積りです。』

升屋の老人は去り、自分は百圓の紙包を机の抽斗に入れた。

五月九日

自分は五年前の事を書いて居るのである。十月二十五日の事を書いて居るのである。厭になつて了つた。書きたくない。

けれども書く、酒を飲みながら書く。此頃島の若いものと一しよに稽古をして居る義太夫。さうだ玉

三でも唸りながら書かう。面白い！

——晝飯を済まして、自分は外出けようとする處へ母が來た。母が來たら自分の歸るまで待つて貰ふ筈にして置いた處へ。

色の浅黒い、眼に險のある、一見して一癖あるべき面魂といふのが母の人相。脊は自分と異つてす

らりと高い方。言葉に力がある。

此母の前へ出ると自分の妻などはみじめな者。妻の一言いふ中に母は三言五言いふ。妻はもぢくし

ながらいふ。母は號令でもするやうに言ふ。母は三言目には喧嘩腰、妻は罵倒されて蒼くなつて小さく

なる。女でもこれほど異ふものかと怪しまれる位。

母者ひとの御入來。

其處は端近先づくこれへとも何とも言はぬ中に、母はつかくと上つて長火鉢の向へむづとばかり、

『手紙は届いたかね。』とは一言で先づ我々の荒膽をひしがれた。

『届きました』と自分は答へた。

『言つて来たことは都合がつくかね?』

『用意して置きました。』とお政は小さい聲、母はそろ／＼機嫌を改めて、

『あゝ其は難有う。毎度お氣の毒だと思ふんだけど、ツイね私の方も請取る金が都合よく請取れなかつたりするものだから、此方も困るだらうとは知りつゝ、何處へも言つて行く處がないし、ツイね。』と

言つて莞爾。

能く見ると母の顔は決して下品な出来ではない。柔和に構へて、チンとすまして居られると、其險のある眼つきが却つて威を示し、何處の高貴のお部屋様かと受取られるところもある。

『イ、え如何致しまして。』とお政は言つたざり、伏目になつて助の頭を撫で、居る。母はちよつと助を

見たが、お世辭にも孫の機嫌を取つて見る母では無さうで、實はさうで無い。時と場合で其なことは

如何にでも。

『助の顔色が如何も可くないね、いつたい病身な兒だから餘程氣をつけないと不可ませんよ。』と云ひつ

つ今度は自分の方を向いて、

『學校の方は如何だね。』

『如何も多忙しくつて困ります。今日もこれから寄附金のこと出掛ける處でした。』

『さうかね、私にかまはないでお出かけよ、私も今日は日曜だから悠然して居られない。』

『さうでしたね、日曜は兵隊が澤山来る日でしたね。』と自分は何心なく言つた。すると母、やはり氣がとがめるかして、少し氣色を更へ、音がカンを帯びて、

『なに私どもの處に下宿して居る方は曹長様ばかりだから、日曜だつて平常だつてそんなに變らないよ。

でもね、日曜は兵が遊びに来るし、それに矢張上に立てば酒位飲まして返すからね、自然と私共も忙がし

くなる勘定サ。軍人は如何しても景氣が可いね。』

『さうですかね。』と自分は氣の無い挨拶をしたので、母は愈々氣色ばみ、

『だつてさうぢやないかお前、今度の戦争だつて日本の軍人が豪いから何時も勝つのおぢやないか。軍人

あつての日本だアね、私共は軍人が一番すきサ。』

この調子だから自分は遂に同居説を持ちだすことが出来ない。まして品行の噂でも爲て忠告がましいことでも言はうものなら、母は何と言つて怒鳴るかも知れない。妻が自分を止めたも無理でない。

『學校の先生なんて、私は大嫌ひサ、ぐ／＼して眼ばかりパチつかして居る處は蚊を捕へ損なつた疣蛙見たやうだ。』とは曾て自分を罵つた言葉。

疣蛙が出ない中にと、自分は、

『ちよつと出て來ます、御悠寛』とこそ／＼出てしまつた。何と意氣地なき男よ!

思へば母が大威張で自分の金を奪ひ、遂に自分を不幸のドン底まで落したのも無理はない。自分達夫婦は最初から母に吞れて居たので、母の爲ることを怒り、恨み、罵つては見る者の、自分達の力では母

を如何することも出来ないのであつた。

酒を飲まない奴は飲む者に凹まされると決定つて居るらしい。今の自分であつて見ろ！ 文句がある。

『母上さん、そりやア貴女軍人が一番お好きでせうよ。』とじろり其横顔を見てやる。母のことだから、

『オヤ異なことを言ふね、も一度言つて御覽。』と眼を釣上げて詰寄るだらう。

『御氣に觸はつたら御勘辨。一ツ差上げませう。』と杯を奉つる。『草葉の蔭で父上が……』とそれからさはりて行く處だが、彼の時は如何して彼の時分はあんなに野暮天だつたらう。

濱を誰か唸つて通る。彼の節廻しは吉次だ。彼奴聲は全く美しいよ。

五月十日

外から歸つたのが三時頃であつた。妻は突伏して泣いて居る。

『如何したのだ、如何したの？』と自分は驚いて訊いたが、お政のことゆゑ、泣くばかりで容易に言ひ得ない。泣くのは此女の持前で、少しの事にも涙をこぼす。然し今度のは餘程のことが有つたと見えて、自分が聞けば聞くほど益々泣入るばかり。かうなると自分は狼狽へざるを得ない。水を持つて来てやりなどすると、漸くのことと詳しく事情が解つた。

お政の苦心は十分母の満足を得なかつたのである。折角の帯も三圓にしかならず、仕方なしにお政は自分の出て行つた後で此三圓を母に渡すと、母は大立腹。二人の問答は次のやうであつた。

『五圓と言つて來たのだよ。』

『でも只今これだけしか無いのですから……。』

『だつて先刻用意してあると言つたぢやないか。』

『ですから三圓だけ漸々作らへましたから……。』

『さうお。漸々作らへてお呉れだつたのか。お氣の毒でしたね、色々御心配をかけて。必定七屋からでも持つて來たお金でせう。そんな思のとツ着いた金なんか借りたくないよ。何だね人面白くも無い。可いよ今藏が歸つて來るのを待つて居るから。今藏に言ふから。』

『イ、え主人では知らないのですから……。』

『オヤ今藏は知らないの？ 驚いた、それぢやお前さんが内證でお貸しなの。嘘を吐きなさんな、嘘を。今藏の奴必定三圓位で追返せとか何とか言つたのだらう。だから自分は私を避けて出て行つたのだらう。可いよ、待つて居るから。晩までだつて待つて居てやるから。』

『宅のは全く、全く知らないの……』と妻は泣いて口がきけない。

『泣かないでも可いぢやアないか。お前さんは亭主の言ひつけ通り爲たのだから可いぢやアないか。フン何ぞと言ふと直ぐ泣くのだ。どうせ私は鬼婆だから私が何か言ふと可怕いだらうよ。』

何と言はれても一方は泣くばかり、母は一人で並べて居る。

『だから出來なきや出來ないと言つて寄せば可いんだ。新町から青山くんだりまで三圓ばかりのお金を取りに來るやうな暇はない身體ですよ。意氣地がないから親一人妹一人養ふことも出來ずさ、下宿屋

家業までさして置いて忠孝の道を見童に教へるなんて、随分變つた先生様もあるものだね。然しお政さんなんぞは幸福さ、いくら親に不孝な男でも女房だけは可愛がるからね。お光などのやうに兵隊の機嫌まで取つて漸々御飯を載っていく女もあるから、お前さんなんぞ決して不足に思つちやなりませんよ。」

皮肉も言ひ盡して、暫く烟草を吹かしながら坐つて居たが、時計を見上げて、

『どうせ避けた位だからちよつと歸つて来ないだらう。歸りませう、私も多忙しい身體だからね。お客様に御飯を上げる仕度も爲なければならんし。』と急に起上つて、

『紙と筆を借りるよ。置手紙を書くから。』と机の傍に行つた。

此時助が劇しく泣きだしたので、妻は抱いて庭に下りて生垣の外を、自分も半分泣きながら、ぶらぶら歩いて子供を寝かしつけようとして居た。暫くすると急に母は大聲で、

『お政さん！ お政さん！』と呼んだ。妻は座敷に上がると母は眼に角を立て、睨むやうにして、

『お前さんまで逃げないでも可いよ。人を馬鹿にしてらア。手紙なんぞは書かないから、歸つたら然う言つてお呉れ。此三圓も不用いよ。』と投げだして、『最早私も決して来ないし、今藏も来ないが可い、親とも思ふな、子とも思はんからと言つてお呉れ！』

非常な劍幕で母は立ち去り、妻は其まゝ泣伏したのであつた。

自分は一々聴き終つて、今の自分なら、

『宜しい！ 不用けや三圓も上げんばかりだ。泣くな、泣くな、可いぢやないか母上さんの方から母で

もない子でも無いといふのなら、致方もないさ。無理も大概にして貰はんとな。』

然し彼の時分はさうでなかつた。不孝の子であるやうに言はれて見ると甚く其が氣にかゝる。氣にかかるといふには種々の意味が含んで居るので、世間體もあるし、教員といふ第一の資格も缺けて居るやうだし、即ち何となく心に安んじないのである。それに三圓といふことは自分も知らなかつたのだ、其點は此方が悪いやうな氣もするので、

『困つたものだ』と腕組して暫く嘆息をして居たが、

『自分で勝手に下宿屋を行つて居ながら、そんなことを言はれて見ると、全然私共が悪いやうに聞える。可いよ、私が今夜行つて来よう。そして三圓だけ渡して来る。』

五月十一日

今日は朝から雨降り風起りて、湖水のやうな海も流石に波音が高い。山は鳴つて居る。

今夜はお露も来ない。先刻まで自分と飲んで居た若者も歸つてしまつた。自分は可い心持に酔うて居る。酔うては居るものゝ如何も孤獨の感に堪へない。要するに自分は孤獨である。

人の一生は何の爲めだらう。自分は哲學者でも宗教家でもないから深い理窟は知らないが、自分の今、今といふ今感ずる所は唯だ儂さだけである。

如何も人生は儂いものに違ひない。理窟は抜にして眞實の處は儂いものらしい。

若し果敢いものでないならば、たとひ人は如何な境遇に墮ちるとして自分が今感ずるやうな深い悲

哀は感じない筈だ。

親とか子とか、兄弟とか朋友とか社會とか、人の周圍には人の心を動かすものが出来て居る。まぎらす者が出来て居る。若しこれ等が皆な消え去せて山上に樹つて居る一本松のやうに、たゞ一人、無人島の荒磯に住んで居たらどうだらう。風は急に雨は暗く海は怪しく叫ぶ時、人の生命、此地の上に住む人の一生を楽しいもの、望あるものと感ずることが出来ようか。

だから人情は人の食物だ。米や肉が人に必要物なる如く親子や男女や朋友の情は人の心の食物だ。これは比喩でなく事實である。

だから土地に肥料を施す如く、人は色々な文句を作つて此等の情を培かうのだ。

さうして見ると神様は甘く人間を作つて御座る。ではない人間は甘く猿から進化して居る。

オヤ！ 戸をたゞく者がある、此雨に。お露だ。可愛いお露だ。

さうだ。人間は甘く猿から進化して居る。

五月十二日

心細いことを書いてる中にお露が来たので、昨夜は書き續きの本文に取りかゝらなかつた。さて――若しお政が氣の勝つて居る女ならば、自分が其夜三圓持つて母を尋ねると言へば、

「質屋から持つて来たお金なんか厭だと被仰つたのだから持つて行かなくなつたつて可う御座いますよ。」と言ひ放つて口惜し涙を流す處だが、お政にはそれが出来ない。母から厭味や皮肉を言はれて泣いたの

は唯だ悲しくつて泣いたので、自分が優しく慰むれば心も次第に静まり、別に文句は無いのである。

處で母は百圓盗んで歸つた。自分は今これを冷やかに書くが、机の抽斗を開けて見て百圓の紙包が紛失して居るのを知つた時は、「オヤ！」と叫んだきり、容易に二の句が出なかつた。

「お前、此抽斗を開けや爲なかつたか。」

「否」

「だつて先刻入れて置いた寄附金の包みが見えないよ。」

「まア！」と言つて妻は眞蒼になつた。自分は狼狽して二の抽斗を抽き放つて中を一々検めたけれど無いものは無い。」

「先刻母上さんが置手紙を書くつてお開けになりましたよ！」

「さうだ！」と自分は膝を拍つた時、頭から水を浴びたやう。甍を踏外さうとした刹那の心持。

自分は暫らく茫然として机の抽斗を眺めて居たが、我知らず涙が頬をつたうて流れる。

「餘り酷すぎる」と一語僅かに洩し得たばかり、妻は涙の泉も涸れたか唯だ自分の顔を見て、血の氣のない唇をわな／＼と戦はして居る。

「ぢやア母上さんが……」と言ひかけるのを自分は手を振つて打消し、

「黙つてお居て、黙つてお居て。」と自分は四圍を見廻して「これから新町まで行つて来る。」

「だつて貴所……。」

「否や、母上さんに會つて取返へして来る。餘りだ、餘りだ。親だつて此事だけは黙つて居られるものか。然しどうして其な淺ましい心を起したのだらう……」

自分は涙を止めることが出来ない。妻も遂に泣きだした。夫婦途方に暮れて實に泣くばかり。思へば母が三圓投出したのも、親子の縁を切るなど突飛なことを怒鳴つて歸つたのも皆な其心が見えなく。『直ぐ行つて来る。親を盜賊に爲ることが出来ない。お前心配しないで待つてお居て、是非取りかへして来るから。』と自分は太急ぎで仕度し、手箱から亡父の寫眞を取り出して懐中した。

小春日和の日曜とて、青山の通りは人出多く、大空は澄み渡り、風は砂を立てぬほどに吹き、人々行樂に忙がしい時、不幸の男よ、自分は夢路を辿る心地で外を歩いた。自分は今も此時を思ひだすと、東京なる都會を惡む心を起さずには居られないのである。

東宮御所の横手まで來ると突然『大河君、大河君』と呼ぶ者がある。見れば齋藤といふ、これも建築委員の一人。莞爾しながら近づき、

『如何も相濟まん、僕は全然遊んで居て。寄附金は大概集まつたらうか。』

寄附金といはれて我知らずどぎまぎしたが『大略集まつた。』と僅に答へて直ぐ傍を向いた。

『廻る所があるなら、僕廻つても可いよ。』

『難有う。』と言つたぎり自分が躊躇して居るので齋藤は不審さうに自分を見て居たが『イヤ失敬』と言つて去つて終つた。十歩を隔て、彼は振返つて見たに違ひない。自分は思はず頸を竦めた。

母に會つたら、何と切出さう。新町に近づくにつれて、これが心配でならぬ。母から反對に怒鳴つけられたら、如何しようと思ふと、母の劍幕が目先に浮んで來て、足は自と立竦む。『若し如何しても返さなかつたら』の一念が起らうとする時、自分は胸を壓つけられるやうな氣がするので、其一念を打消し打消し歩いた。

『大河とみ』の表札。二階建、格子戸、見た處は小官吏の住宅らしく。女姓名だけに金貸でも爲さうに見える。一度は引返へして手紙で言はうかとも思つたが、何しろ一大事と、自分は思切つて格子戸を潜つた。

五月十三日

勝手の間に通つて見ると、母は長火鉢の向うに坐つて居て、可憐い顔して自分を迎へた。鐵瓶には徳利が入れてある。二階は兵士どもの飲んで居る最中。然し思つたより静で、妹お光の浮いた笑聲と、これに伴ふ男の太い聲は二人か三人。母はじろり自分を見たばかり一言も言はず、大きな聲で、

『お光、お銚子が出來たよ。』と二階の上口を向いて呼んだ。『ハイ』とお光は下りて來て自分を見て、

『オヤ兄様』と言つたが笑ひもせず、唯だ意外といふ顔付き、其風は赤いものづくめ、如何見ても居酒屋の酌婦としか受取れない。母の可憐い顔と自分の眞面目な顔とを見比べて居たが、

『それからね母上さん、お鮪を取つて下さい。』

『さう。幾價ばかり?』

『幾價だか。可い加減で可いでせう。それから母上さんにもお入なさいつて。』
 『あア』と母は言つて妙な眼つきでお光の顔を見たが、お光は其儘自分の方は見向きもしないで二階へ上つて了つた。自分は唯だ坐つたきり、母の何とか言ひだすのを待つて居た。

『何しに來たの』と母は突慥食に一言。

『先刻は失禮しました。』と自分は出来るだけ氣を落着けて左あらぬ體に言つた。

『いゝえ如何しました。色々心配をかけて濟まなかつたね。歸る時お政さんに言つて置いたことがあるが聞いてお呉れだつたかね?』と何處までも冷やかに、憎々しげに言ひながら起上がつて、『私はお客様の用で出て來るが、用があるなら待つて居てお呉れ』と臺所口から出て去つて了つた。

自分は腕組みして熟つとして居たが、我母ながら之れ實に惡婆であると思つて、情なく、あゝまで濟して居る處を見ると、言つたところで、無益だと思ふと寧ろのこと公けの沙汰にして終はうかとの氣も起る。然し現在の母が子の抽斗から盗み出したので、假令公金であれ、子の情として訴へる理由には如何してもゆかない。訴へることは出來ず、母からは取返へすことも出來ないなら、竊かに自分で辨償するより外的手段はない。八千圓ばかりの金高から百圓を帳面で胡魔化すことは、たとひ自分に爲し得ても、直ぐ後で發覺る。又自分には左る不正なことは思つて見るだけでも身が戰へるやうだ。自分が辨償するとして其金を自分に何處から持つて來る?

思へば思ふほど自分は如何して可いか解らなくなつて來た。これは如何なことでも母から取返へす外

はと、思ひ定めて居ると母は外から歸つて來て、無言で火鉢の向に坐つたが、

『如何だね、聞いてお呉れだつたかね?』と言つて長い烟管を取上げた。

『何をですか。』と自分は母の顔を見ながら言つた。

『まア可いサ聞かなかつたのなら。然しお前の用といふのは何だね?』

自分は懷中から三圓出して火鉢の横に置き、

『これは二圓不足して居ますが、折角お政が作らへて置いたのですから、取つて下さい、さう爲ませんと……』

『最早不用ないよ。だから私も二度とお前達の厄介にはなるまいし、お前達も私のやうなもの親と思はないが可い。その方がお前達のお徳ぢやアないか。』

『母上さん。貴女は何故そんなことを急に被仰るのです。』と自分は思はず涙を呑んだ。

『急に言つたのが悪けりや謝ります。さうだつたね、一年前位に言つたらお前達も幸福だつたのに。』

何といふ皮肉の言葉ぞ、今の自分ならば決然と、

『さうですか、宜しう御座います、それぢや御言葉に従ひまして、親とも思ひますまい、子とも思つて下さいますな。子とお思ひになると飛んだお恨みを受けるやうな事も起るだらうと思ひますから。就いては今日私の机の抽斗に百圓入れて置きました其が、貴女のお歸りになると同時に紛失したので御座いますが、如何でせう、若しか反古と間違つて、お袂へでもお入になりませんでしたらうか、一應お聞申

します。』と腹から出た聲を使つて、グツと急所へ一本。

『何だと親を捕へて泥棒呼はりは聞き捨てになりませんぞ。』と来る所を取つて押へ、片頬に笑味を見せて、

『これは異なこと！ 親子の縁は切れてる筈でせう。イヤお持歸りになりませんなら其で可う御座います、右の次第を届け出るばかりですから。』と大きく出れば、いかな母でも半分落城する所だけれど、彼の時の自分に何でこんな芝居が打てよう。

悪々しい皮肉を聞かされて、グツと行きづまつて了ひ、手を拱んだまゝ暫時は頭も得あげず、涙をほろほろこぼして居たが、

『母上さん、それは餘りで御座います。』とやう／＼に一言、母は何所までも上手、

『何が餘りだね。それは此方の文句だよ。チョツ泣蟲が揃つてら。面白くもない！』

自分は形無し。又も文句に塞つたが、氣を引きたてゝ父の寫眞を母の前に置きながら、

『父上さんをお伴れ申してのお願で御座います。母上さん、何卒……お返しを願ひます、それがないと私が……』と漸との思ひ言ひだした。母は直ぐ血相變へて、

『オヤそれは何の眞似だえ。可笑しなことをお爲だねえ。父上さんの寫眞が何だといふの？』

『どうか然う被仰らずに何卒お返しを。今日お持返へりの物を……』

『先刻からお前可笑しなことを言ふね、私お前に何を借りたえ？』

『何にも申しませんから、何卒然う被仰らずにお返しを願ひます、それがないと私の立つ瀬がないのですから……』と言はせも果てず、母は火鉢を横に膝を進めて、

『怪しからんことを言ふよ、それでは私が今日お前の所から何か持つてても歸つたと言ふのだね、聞き捨てになりませんよ。』と聲を高めて乗掛る。

『ま、ま、さう大きな聲で……』と自分はまご／＼。

『大きな聲が如何したの、いくらでも大きな聲を出すよ……さア今一度、言つて御覽。事とすべに依ればお光も呼んで立合はすよ。』といふ劍幕。此時二階の笑聲もびたり止んで、下を覗がひ聞耳をたてゝ居る様子。自分は狼狽へて言葉が出ない。もぢ／＼して居ると裏所口で『お待遠さま』といふ聲がした。母は、

『お光、お光お鮎が来たよ。』と呼んだ。お光は下りて来る。格子が開いたと思ふと、『今日は』と入つて来たのが一人の軍曹。自分をちよつと尻目にかけて、

『御馳走様』とお光が運ぶ鮎の大皿を見ながら、ひよろついて尻餅をついて、長火鉢の横にぶつ坐つた。

『おやまア可いお色ですこと。』と母は今自分を睨みつけて居た眼に媚を浮べて、『何處で。』

『ハツハツ……其は軍事上の祕密に屬します。』と軍曹酒氣を吐いて、『お茶を一ばい頂戴。』

『今入れて居るぢやありませんか、性急ない兒だ』と母は湯呑に充滿注いでやつて、自分の居ることは最早忘れたかのやう。二階から大聲で、

「大塚、大塚！」

「貴所下りてお出でなさいよ。」と母が呼ぶ、大塚軍曹は上を向いて、

「お光さん、お光さん！」

外所は豆腐屋の賣聲高く夕暮近い往來の氣勢。とても此様子ではと自分は急に起つて歸らうとすると、母は柔利い聲で、

「最早お歸りかえ。まあ可いぢやないか。そんなら又お來てよ。」と軍曹の前を作ろつた。

外へ出たが直ぐ歸ることも出來ず、さりとて人に相談すべきことではなく、身に降りかゝつた災難を今更の如く悲しんで、氣抜けした人のやうに當もなく歩いて溜池の傍まで來た。

全く思案に暮れたが、然し何とか思案を定めなければならぬ。日は暮れかゝり夕飯時になつたけれど何を食はうとも思はない。

ふと山王臺の森に烏の群れ集まるのを見て、暫く彼處のベンチに倚つて靜かに工夫しようと日吉橋を渡つた。

哀れ氣の毒な先生！「見すばらしげな後影」と言ひたくなる。酒、酒、何で彼の時、蕎麥屋にでも飛込んで、景氣よく一二本も倒さなかつたのだらう。

五月十四日

寂寥として人氣なき森蔭のベンチに倚つたまゝ、何時間自分は動かなかつたらう。日は全く暮れて四

圍は眞暗になつたけれど、少しも氣がつかず、たゞ腕組して折り々々嘆息を洩すばかり、ひたすら物思に沈んで居たのである。

實地に就ての益に立つ考案は出ないで、斯うなると種々な空想を描いては打壊はし、又た描く。空想から空想、枝から枝が生え、殆んど止度がない。

痴情の果から母とお光が軍曹に殺される。と一つ思ひ浮べると、其悲劇の有様が目の先に浮んで來て、母やお光が血だらけになつて逃げ廻る様が、あり々々見える。今藏々々と母は逃げながら自分を呼ぶ、自分は飛び込んで母を助けようとする、一人の兵が自分を捉へて動かさない……アツと思ふと此空想が破れる。

自分が百圓持つて銀行に預けに行く途中で、掏兒に取られた體にして肩け出よう、さう爲ようと考へた、すると嫌疑が自分にかゝり、自分は拘引される、お政と助は拘引中に病死するなど、又々淺ましい方に空想が移る。

校舎落成のこと、其落成式の光景、升屋の老人のよろこぶ顔までが目に浮んで來る。

あゝ百圓あつたらなアと思ふと、これまで金錢のことなど左まで自分を惱ましたことのないのが、今更の如く其怪しい、恐ろしい力を感じて來る。たゞ百圓、その金錢さへあれば、母も盜賊にはなるまいものを。よし母は盗みを爲した處で、自分に其金錢が有るならば今の場合、自分等夫婦は全く助かるものをなど考へると、金錢といふ者が欲しくもあり、悪くもあり、同時に其金錢のために少しも惱まされな

いで、長閑かに此世を送つて居る者が羨ましくもなり、又實に憎々しくもなる。總て是等の苦々しい情は、これまで勤勉にして信用厚き小學教員、大河今藏の心には起つたことはないの、あゝ金錢が欲しいなアと思はず口に出して、熟と暗い森の奥を見つめた。

すると、がやんと男女打雑じつて、ふざけながら上つて來るものがある。

『淋しいぢや有りませぬか、歸りませうよ。最早こんな處つまりませんわ。』といふ女の聲は確にお光。自分はぎよつとして起ちあがらうとしたが、直ぐ其處に近づいて來たので其儘身動きもせず様子を窺がつて居た。人々は全く此處に人あることを氣がつかぬらしい。お光が居れば母もと覗つたが、女はお光一人、男は二人。

『ねえ最早歸りませうよ、母上さんが待つて居るから。』と甘つたるい聲。

『何故母上さんは一緒に出なかつたのだらう、君知らんかね。』と一人の男が言ふと、一人、

『頭が痛むとか言つて居たつけ。』といふや三人急に何か小さな聲で囁き合つたが、同時にどつと笑ひ、一人が『ヨイショ』と叫んで手を拍つた。

面白くない事が到る處、自分に附纏つて來る。三人が行き過ぐるや自分は舌打して起ちあがり、そこそこと山を下りて表町に出た。

此上は明日中に何とか處置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴へて見、一方には愈々といふ最後の處置は如何するか、妻とも能く相談しよう、進まぬながらも東宮御所の横手まで來て、土手

について右に廻り青山の原に出た。原を横ぎる方が近いのである。

原を横ぎる時、自分は一個の手提革包を拾つた。

五月十五日

如何して手提革包を拾つたか其手續まで詳しく書くにも當るまい。たゞ拾つたので、足にぶつたから拾つたので、拾つて取上げて見ると手提革包であつたのである。

拾ふと直ぐ、金錢！ といふ一念が自分の頭にひらめいた。占めたと思つた、そして何となく夢では

ないかとも思つた。といふものは實は山王臺で種々の空想を描いた時、若し千兩も拾つたらなど、恥かしい事だが考へたからで、それが事實となつたらしいからである。革包は容易く開いた。

紙幣の束が三ツ、他に書類などが入つて居る。星光にすかしてこれを見た時、其時自分は全く夢ではないかと思つた。それを自分が届け出るとか、横奪することが破廉恥の極だとか、さういふことを考へることは出来なかつた。

たゞ手短かに天の賜と思つた。

不思議なもので一度、良心の力を失ふと、今度は反對に積極的に、不正なこと、思ひがけぬ大罪を成るべく爲し遂げんと務めるものらしい。

自分はそつと此革包を私宅の横に積んである材木の間に、而も巧に隠匿して、紙幣の一束を懐中して素知らぬ顔をして宅に入った。

自分の足音を聞いただけで妻は飛起きて迎へた。助を寝かし着けて其まゝ横になつて自分の歸宅を待ちあぐんで居たのである。

『如何でした。』と自分の顔を見るや。

『取り返して来た!』と問はれて直ぐ。

この答も我知らず出たので、嘘を吐く氣もなく吐いたのである。

既に斯うなれば自分は全くの孤立。母の秘密を保つ身は自分自身の秘密に立籠らねばならなくなつた。

『まア如何して?』と妻のうれしさうに問ふのを苦笑して受けて、手軽く、

『能く事わけを話したら渡した』とのみ。妻は猶ほ其様子まで詳しく聴きたかつたらしいが自分の進まぬ風を見て、別に深くも訊ねず、

『どんなに心配しましたらう。若しも渡さなかつたらと思つて取越苦勞ばかり爲ておました。』と萬斤の重荷を卸したよろこび。自分は懐に片手を入れて一件を握つて居たが、未だ夢の醒めきらぬ心地がして茫然として居る。

『御飯は?』

『食つて来た。』

『母上さんの處で?』

『あア』

『大變お顔の色が悪う御座いますよ。』と妻は自分の顔を見つめて言ふ。

『餘り心配したせぬだらう。』

『直ぐお寝みなさいな。』

『イヤ帳簿の調査もあるからお前へ先へ寝てお呉れ。』と言つて自分は八疊の間に入り机に向つた。然し妻は容易に寝さうもないので、

『早くお寝みといふに。』

自分はこれまで、これほどの角のある言葉すら妻に向つて發したことはないのである。妻は不審さうに、自分の方を見て居るやうであつたが、其中床に就てしまつた。自分は一度殊更に火鉢の傍に行つて烟草を吸つて、間の襖を閉め切つて、漸く秘密の左右を得た。

懐からそつと盗むやうにして紙幣の束を出したが、其様子は母が机の抽斗から、紙幣の紙包を出したのと同じであつたらう。

一圓紙幣で百枚!

全然註文したやう。これを數へる手はふるへ、數へ終つて自分は洋燈の火を熱と見つめた。直ぐこれを明日銀行に預けて帳簿の表を飾らうと決定したのである。

又盗まれてはと、箆筒に納うて錠を卸すや、今度は提革包の始末。これは妻の寝静まつた後ならではと一先素知らぬ顔で床に入つた。

床に入つて眼を閉ぢて居る時、この時には多少か良心の眼は醒めさうなものだが、實際はさうでなか

つた。魔が自分に投げ與へた一目的の爲めに、良心ならぬ猛烈の意志は冷やかに働らいて、一に妻の鼻息を覗つて居る。斯うして二時間経ち、十二時が打つや、蒼い顔のお政は死人のやうに横つて居るのを見届けて、前夜は盜賊を疑うて床を脱け出た自分は、今度は自身盜賊のやうに前夜よりも更に靜に、更に巧に、寢間を出て、縁側の戸を一分又た一分に開け、跣足で外面に首尾能く出た。

星は冴えに冴え、風は死し、秋の夜の静けさ、蟲は鳴きしきつて居る。不思議なるは自分が、此時かかる目的の爲に外面に出ながら、外面に出て二歩三歩あるいて暫時佇立んだ時この寥々として靜肅且つ莊嚴なる秋の夜の光景が身の毛もよだつまでに眼に沁こんだことである。今も其時の空の美しさを忘れない。そして見ると、善にせよ惡にせよ、人の精神凝つて雜念の無い時は、外物の印象を受ける力も亦た強い者と見える。

材木の間から革包を取出し、難なく座敷に持運んで見ると、他の二束も同じく百圓束、都合三百圓の金高が入つて居たのである。書類は請取の類。薄い帳面もあり、名刺もある。遺失した人は四谷區何町何番地日向某とて穀類の間屋を業として居る者といふことが解つた。

心の弱い者が惡事を働いた時の常として、何かの言譯を自分が作らねば承知の出來ないが如く、自分は右の遺失した人の住所姓名が解るや直ぐと見事な言譯を自分で作つて、そして殆んど一道の光明を得たかのやうに喜んだ。

一先拜借！ 一先拜借して自分の急場を救つた上で、其中に母から取返すとも、自分で工夫して金を

作るとも、何とでもして取つた百圓を再び革包に入れ、其まゝ人知れず先方に届ける。

天の賜とは實にこの事と、無上によるこび、それから二百圓を入れたまゝの革包を隠す工夫に取りかかった。然し元來狭い家だから別に安全に隠し場の有らう筈がない。思案に盡きて終に自分の書類、學校の帳簿などばかり入れて置く篋笥の抽斗に入れて其上に書類を重ね、そして鍵は晝夜自分の肌身より離さないことに決定して漸つと安心した。

一床に就いたと思ふと二時が打ち、がっかりして直ぐ寢入つて終つた。

五月十六日

忘れることの出來ない十月二十五日は過ぎた。翌日から自分は平時の通り授業もし改築事務も執り、表面は以前と少しも變らなかつた、母からも亦た何とも言つて來ず、自分も母に手紙で迫る事すら放棄して了ひ、一日一日と無事に過ぎゆいた。

然し自分は到底惡人ではない、又度胸のある男でもない。さればこそ母からも附込まれ、遂に母を盜賊にして了ひ、遂に自分までが賊になつてしまつたのである。であるから賊になつた上で又もや悶き初めるのは當然である。總て自分のやうな男は皆な同じ行き方をするので、運命といへば運命。蛙が何時までも蛙であると同じ意味の運命。別に不思議はない。

良心とかいふ者が次第に頭を擡げて來た。そして何時も身に着けて居る鍵が氣になつて堪らなくなつて來た。

殊に自分は兒童の教員、又た倫理を受持つて居るので常に忠孝仁義を説かねばならず、善惡邪正を説かねばならず、言行一致が大切ぢやと眞面目な顔で説かねばならず、其度毎に怪しく心が騒ぐ。生徒の質問の中で、折り／＼胸を刺れるやうなものがある。中には自分の祕密を知つてあんな質問をするのではあるまいかと疑ひ、思はず生徒の面を見て直ぐ我顔を背向けることもある。或日の事、十歳ばかりの兒が来て、

『校長先生、岩崎さんが私の鉛筆を拾つて返しません。』と訴へて來た。拾つたとか、失つたとか、落したとかいふ事は多數の兒童を集めて居ることゆゑ常に有り勝て怪しむに足らないのが、今突然此訴へに接して、自分はドキリ胸にこたへた。

『貴所が氣をつけんから落したのだ、待つてお居て、今岩崎を呼ぶから。』と言つたのは全然これまでの自分ないことで、兒童は喫驚して自分の顔を見た。

岩崎といふ十二歳になる兒童を呼んで、『あなたは鉛筆を拾ひはしなかつたか』と聞くと顔を赤らめてもぢり／＼して居る。

『拾つたでせう。他人の者を拾つたら直ぐ私の所へ持つて出るのが當然なのに、其を自分の者に爲るといふことは盗んだも同じことで、甚だ善くないことですよ。其鉛筆を直ぐ此人にお返しなさい。』と嚴かに命つけた。

そんならば何故自分は他人の革包を自分の筆筒に隠して置くのであるか。

自分は其日校務を了ると直ぐ宅に歸り、一室に屈居んで、悶き苦しんだ。自首して出ようかとも考へ、夫れとも學校の方を辭職して了はうかとも考へた。此の二を選ぶ上に就いて更に又苦しんだけれど、いづれとも決心することが出来ない。自首した後の妻子のことを思ひ、辭職した後の衣食のことを思ひ、衣食のことよりも更に自分を動かしたのは折角これまでに經營して校舎の改築も美々しく落成するものを捨て、終ふは如何にも残念に感じたことである。

其處で一日も早く百圓の金を作るが第一と、今度はそれのみに心を碎いたが、當もなんにもない。小學教員に百圓の内職は荷が勝ち過ぎる。たゞ空想ばかりに耽つて居る。起きれば金銭、寝ても百圓。或日のことで自分は女生徒の一人を連れて郊外散歩に出た。其以前は能く生徒の三四人を伴うて散歩に出たものである。

美しき秋の日で身も軽く、少女は唱歌を歌ひながら自分よりか四五歩先を左も愉快さうに跳ねて行く。路は野原の薄を分けてや、爪先上の處まで來ると、ちらと自分の眼に映つたは草の間から現はれて居る紙包。自分は駈け寄つて拾ひあげて見ると内に百圓束が一個。自分は狼狽て懷中にねぢこんだ。すると生徒が、

『先生何に?』と寄つて來て問うた。

『何でも宜しい』

『だつて何に? 拜見な。よう拜見な。』と自分にあまえてぶら下つた。

『可けないと言ふにー』と自分は少女を突飛ばすと、少女は仰向けに倒れかゝつたので、自分は思はずアツと叫んで之を支へようとした時、覺むれば夢であつて、自分は晝飯後教員室の椅子に凭れたまゝ轉寢をして居たのであつた。

拾つた金銭の穴を埋めんと悶いて又夢に金銭を拾ふ。自分は醒めた後で、人間の心の淺ましさを沁々と感じた。

五月十七日

妻のお政は自分の様子の變つたのに驚いて居るやうである。自分は心にこれほどの苦悶のあるのを少しも外に見せないなどいふことの出来る男でない。のみならず若し妻が此秘密を知つたなら如何しようかと宅に在つては其が亦た苦勞の一で、妻の顔を見ても、感附いては居まいかと其眼色を讀む。絶えずキョトキョトして、そはくして安んじないばかりか、心に爛れた處が有るから何でもないことと妻に角立つた言葉を使ふことがある。無言で一日暮すこともあり、自分の性質の特色ともいふべき溫和な人なつたところは殆ど消え失せ、自分の性質の裏ともいふべき妙にひねくれた片意地の處ばかり潮の退いた後の岩のやうに、ごつ／＼と現はれ残つたので、妻が内心驚いて居るのも決して不思議ではない。溫和で正直だけが取柄の人間の、其取柄を失つたほど、不愉快な者はあるまい。澁を抜いた柿の腐敗りかゝつたやうなもので、とても近よることは出来ない。妻が自分を面白からず思ひ、氣味悪う思ひ、そして鬱いてばかり居て、折り／＼左も氣の無きやうな嘆息を洩すのも決して無理ではない。

これを見るに就つて自分の心は愈々爛れるばかり。然し運命は永く此不幸な男女を弄ばず、自分が革包を隠した日より一月目、十一月二十五日の夜を以つて大切と爲て呉れた。

此夜自分は學校の用で神田までゆき九時頃歸宅つて見ると、妻が助を脊負つたまゝ火鉢の前に坐つて着い顔といふよりか凄い顔をして居る。そして自分が歸宅つても挨拶も爲ない。眼の邊には泣きたゞらした痕の残つて居るのが明々地と解る。

此の様子を見て自分は驚いたといふよりか懼れた。懼れたといふよりか戦慄した。

『オイ如何したの？ お前如何したの？』と急きこんで問うたが、妻は其凄い眼で自分をぢろりと見たばかりで一語も發しない。ふと氣が着いて見ると、箆筒を入れた押込の襖が開放して、例の秘密の抽斗が半分開いて居た。自分は飛び起つた。

『誰が開けたのだ。』と叫んで抽斗に手をかけた。

『私が開けました。』と妻の沈着き拂つた答。

『何故開けた、如何して開けた。』

『委員會から帳簿を貸して呉れると言つて來ましたから開けて渡しました。』とぢろり自分の顔を見た。『何だつて私の居ないのに渡した、え何だつて渡した。怪からんことだ。』と喚きつゝ抽斗の中を見ると革包が出て居て而も口を開けたまゝである。

『お前これを見たな！』と叫んで、『可し、私にも覺悟がある、覺悟がある。』と怒鳴りながら其蓋抽斗を

閉めて錠を卸し、非常な劍幕で外面に飛び出してしまった。

無我夢中で其處らを歩いて何時しか青山の原に出たが矢張當もなく歩いて居る。けれども結局、妻に秘密を知られたので、別に覺悟も何にも無いのである。たゞ喫驚した餘りに怒鳴り、狼狽へた餘りに喚いたので、外面に飛び出したのは逃げ出したるに過ぎない。

であるから歩いて居る中に次第に心が靜まつて來た。斯うなつては何もかも妻に打明けて、この先のこと相談しよう、さうすれば却つて妻と自分との間の今の面白くない有様から逃れ出ることも出来ること、急いで宅に歸つた。

何故そんなら革包を拾つて歸つた時に相談しなかつた。と問ふを止めよ。大河今藏の筆法は萬事これなのである。

歸つて見ると妻の姿が見えない。見えないも道理、助を脊負たまゝ裏の井戸の中に死んで居た。

お政はこれまで決して自分の錠を卸して置いた處を開けるやうなことは爲なかつた。然し何時しか自分の舉動で算筒の中に秘密のあることを推し、帳簿を取りに寄こされたを幸に無理に開けたに相違ない。錠は用算筒のを用ゐたらしい。革包の中を見て如何にか驚いたらう。思ふに自分が盗んだものと信じたいに違ひない。然し書置などは見當らなかつた。

何故死んだか。誰一人この秘密を知る者はない。升屋の老人の推測は、お政の天性憂鬱である上に病身で兎角健康勝れず、其が爲に氣がふれたに違ひないといふことである。自分の秘密を知らぬものゝ推

測としては之が最も當つて居るので、お政の天性と癯弱なことは確に幾分の原因を爲して居る。若しこれが自分の母の如きであつたなら決して自殺など爲ない。

自分は直ぐ辭表を出した。言ふまでもなく非常に止められたが遂には、此場合無理もない、強ひて止めるのは却つて氣の毒と、三百圓の慰勞金で放免して呉れた。

實際自分は放免して呉れると否とに關らず、自分には最早何を爲る力も無くなつて了つたのである。人々は死んだ妻よりも生き残つた自分を憐れんだ。其處で三百圓といふ類稀なる慰勞金まで支出したのも、升屋の老人などの發起に成つたのである。

妻子の葬儀には母と妹も來た。そして人々も當然と思ひ、二人も當然らしく舉動つた。自分は母を見ても妹を見ても、普通の會葬者を見るのと何の變りもなかつた。

三百圓を受けた時は嬉しくもなく難有くもなく又厭とも思はず。其中百圓を葬儀の經費に百圓を革包に返し、残の百圓及び家財家具を賣り拂つた金を旅費として飄然と東京を離れて了つた。立つ前夜密に例の手提革包を四谷の持主に送り届けた。

何時自分が東京を去つたか、何處を指して出たか、何人も知らない、母にも手紙一つ出さず、建前が濟んで内部の造作も半ば出来上つた新築校舎にすら一瞥も呉れないで夜竊かに迷ひ出たのである。

大阪に、岡山に、廣島に、西へ〜と流れて遂に此島に漂着したのが去年の春。

妻子の水死後全然失神者となつて東京を出てこの方幾度自殺しようと思つたか知れない。衣食のため

に色々の業に従ひ、種々の人間、種々の事柄に出會ひ、雨にも打たれ、風にも採れ、往時を想うて泣き今に當つて苦しみ、そして五年の歳月は澱みながらも絶えず流れて遂に此の今の泡の塊のやうな輕石のやうな人間を作り上げたのである。

三年前まではは死んだ赤兒の泣聲がやゝもすると耳に着き、蒼白い妻の水を被つた凄い姿が眼の先にちらついていたが、酒のお蔭で遂に追拂つて了つた。然し今でも眞夜中にふと眼を醒ますと酒も大略醒めて居て、眼の先を兒を脊負つたお政がぐる／＼廻つて遠くなり近くなり遂に暗の中に消えるやうなことが時々ある。然し別に可怕しくもない。お政も今は横顔だけ自分に見せるばかり。思ふに遠からず彼方向いて去つて了ふだらう。不思議なことには眞面目にお政のことを想ふ時は決して其淺ましい姿など眼に浮ばないで現はれる時は何時も突然である。

可愛いお露に比べて見るとお政などは何でもない。母などは更に何でもない。

五月十九日

昨夜は六兵衛が来て遅くまで飲んだ。六兵衛の言ひ草が面白いでないか。

『お露を妻に持ちなせえ。』

『持つても可いなア。』

『持つても可えなんチウことは言はさん、あれほど可愛いがつて居つて未だ文句が有るのか。』

『全く彼の女は可愛いよ、何故斯う可愛いだらう、ハハハ、……』

『先方でも其えに言うてら、如何で斯う先生が可愛いのか解らんチウて。』

『左やうさ、私見たやうな男の何處が可いのかお露は無暗と可愛がつて呉れるのが妙だ。これは私にも解らんよ。』

『さうで無えだ、先生のやうな人は誰でも可愛がりますぞ。お露が可愛がるのは無理が無えだ。』

『ハハハ、何故や、何故や。』

『何故チウて問はれると困まるが、一口に言ふと先生は苦勞人だ。それで居て面白い處があつて優しいところがあるだ。先生と斯う飲んで居ると私でも四十年も前の情話でも爲て見たくなる、先生なら黙つて聽いて呉れさうに思はれるだ。島中先生を好んものは有りましたねえで、お露や私を初め。』

自分は如何して斯う老人の氣に入らだらう。老人といへば升屋の老人は今頃誰を對手に碁を打つて居ることやら。

六兵衛は又斯う言つた。

『先生は一度妻を持つたことが有るに違ひなからう。』

『如何して知れる。』

『如何してチウて、それは老人の眼には知れる。』

『全く有つたよ、然し餘程以前に死んで了つた。』

『ハアそれは氣の毒なことをなされました。』

「けれどもね六兵衛さん、死んだ妻はお露ほど可愛くなかつたよ、何んでも無かつたよ。」
「それは不實だ。先生もなか／＼浮氣だの、新しいのが可えた。」と言つて老人は笑つた。

自分も唯だ笑つて答へなかつた。不實か浮氣か、そんなことは知らない。お露は可愛い。お政は氣の毒。酒の上の管ではないが、夫婦といふものは大して難有いものではない。別してお政なんぞ、あれは升屋の老人が呉れたので、呉れたから貰つたので、貰つたから子が出来たのだ。

母もさうだ、自分を生んだから自分の母だ、母だから自分を育てたのだ、そこで親子の情があれば眞實の親子であるが、無ければ他人だ。百圓盗んで置きながら親子の縁を切るなど文句が面白い。初から他人なのだ。

自分は子供の時から母に馴染まなんだ。母も自分には極めて情が薄かつた。

明日は日曜。同勢四五人舟で押出す約束であるが、お露も連れこみたいものだ。

* * * * *

大河今藏の日記は以上にて終りぬ。彼は翌日誤つて舟より落ち遂に水死せるなり。醉に任せ起つて躍り居たるに突然水の面を見入りつ、お政々と連呼して其まゝ顛落せるなりといふ。

記者去年歸省して舊友の小學校教員に會ふ、此日記は彼の手に秘藏され居たるなり。馬島に哀れなる少女あり、大河の死後四月にして兒を生む、これ大河が片身、少女はお露なりとぞ。

猶ほ友の語る處に依れば、お露は美人ならねども其眼に人を動かす力あふれ、小柄なれども強健なる

體格を具へ、島の若者多くは心ひそかに之を得んものと互に争ひ居たるを、一度大河に少女の心移るや、皆大河のためにこれを祝して敢へて嫉むもの無かりしといふ。

お露は兒のために生き、兒は島人の何人にも抱かれ、大河は其望む處を達して島の奥、森蔭暗き墓場に眠るを得たり。

記者思ふに不幸なる大河の日記に依りて大河の總てを知ること能はず、何となれば日記は則ち大河自身を書き、而して其日記には彼が馬島に於ける生活を多く誌さざればなり。故に余輩は彼を知るに於て、彼の日記を通して彼の過去を知るは勿論、馬島に於ける彼が日常をも推測せざる可らず。

記者は彼を指して不幸なる男よといふのみ、其他を言ふに忍びず、彼も亦た自己を憐れみて、やゝもすれば曰く、あゝ不幸なる男よと。

酒中日記とは大河自から題したるなり。題して酒中日記といふ既に悲惨なり、況んや實際彼の筆を採る必ず酔後に於てせるをや。此日記を讀むに當つて特に記憶すべきは實に又この事實なり。お政は兒を負うて彼に先ち、お露は彼に残されて兒を負ふ。何れか不幸、何れか悲惨。

馬上の友

「君、最早寝るのか？」と今しも當直を終へて士官室に入つて来た一人の大尉が、自分に問うた。
 「寝るには早し、起きて居ても對話者はなし、困つて居た處サ。」と自分は起ちかけて居た腰を更にソファに卸して、「それとも何か珍談が有るかね？」

「大ありだ、まア話したまへ。」と言ひつゝ大尉は手早く外套の頭巾を脱ぎ、巻いて居た白い毛糸の頸巻を外し、ハンケチで顔を磨りながら、「鼻の先の感覚が無くなつて了つた。恐ろしい風だ。ボーイ！」聲に應じて使童室の小窓が開き、眠むさうな眼つきをした水兵の顔が現はれた。

「湯が沸いてるなら、一本熱くして呉れ。出来なけア、ウイスキーを持つて来い！」と彼は命じた。

時は明治二十七年十二月の末、我が國の艦隊が、大連灣に集合して、榮城灣上陸の準備の整ふのを待つて居た頃である。自分は新聞記者、大尉は兼ねて自分と仲よく話して、話も能く合ふ士官の一人である。

ボーイはウイスキーを持つて来た。大尉は自分にも杯を差して、

「是非君に聞いて貰ひたい珍談があるのだ。」と頗る愉快げに言つて、彼は其杯を干し、

「聽いて呉れるか？」

「聽くとも、話したまへ。」

夜は更けて一艦の人、其職に在るものゝ外は悉く寝て了ひ、朔風帆綱をたゞいて艦上は物凄く鳴つて居るけれど、室内は極めて静かである。

士官は其一語一句力ある口調で――

僕は今日、公務を帯びて運送船備後丸に行つたが、彼の船には君も知つて居る通り、海軍士官が乗つて居る、其士官と用談を済して歸るべく舷門のところまで来たのだ。(大尉は歐文直譯風の口調を使ふのが癖で、而も其癖を彼は得意として居るのである。)すると一人の男が其處に立つて居て他の船員と何事か物語りつゝあつた。僕は何心なく舷門を下りかけると、其男が手を舉げて僕に敬禮するトタン、僕と彼とは互に顔を見合して驚いたといふよりか寧ろ訝かつたといふが適當だらう。

如何も見たことのある男だと僕は思つて、思はず足を止めた。けれども若しも此時、此船のボーイが来て今一度僕を士官の部屋に呼びもどさなかつたならば、僕は不審と思ひつゝも直ちに舷門を下りて其まゝ小蒸汽に乗り、歸艦つて来て了つたらうと思ふ。

運命は僕等を幸ひした。僕が二足三足、舷梯を下りかけるとボーイが飛んで来て僕を呼び止め、僕は再びケビンに呼びこまれて、互に失念して居た用務を辨ずべく、更に二十分ばかりを費やした。

其用務が済むと直ちに僕は對手の士官に向ひ、顔の四角な、眼のぎよろりとした、口髭の眞黒な、年の頃は二十八九かそれとも三十位な、脊の高い、此船の事務員らしい男が、彼は何者だと訊ねた。士官

は手軽に、

『事務長だらう、それは。』

『名前は？』と僕は問うた。

『糸井といふのが姓だが、名は知らない、今度初めて此船に乗つたので……』

士官の言葉の終らぬ中に僕は『糸井！ 糸井！ 糸井！』と叫んだ。士官は喫驚して、僕の顔を見て居たが、元來、餘り好奇心に誘はれない男、寧ろ其頭の未だ黒い割合には其心が少々固定して居る男だから、僕の此叫聲について左までの注意を拂はず、シガーを口にしたらまゝ、只だ眼を大きく見張つた許りであつた。

僕は直ぐケビンを出て甲板にのぼるや、一人の水夫に向つて事務長の部屋に案内しろと命じた。

『事務長は彼處に居ます。』と水夫の指さす方を見ると、先の男は欄干に寄つて、たゞ一人茫然と立つて居る、其様が、其男も僕と同じく、或一種の不審に打たれて、それを解くべく心を悩まして居たらしかつた。

僕はツカ／＼と近づいて、言葉靜かに、

『貴方は若しか糸井國之助君とは申されませんか、間違つたら失禮ですが。』と云うた。そして對手の顔をツク／＼と見た。對手は暫時く口ごもつて居たが、忽ち物慣れた口調と、船の事務員に通有なる懇懇の態度を以て、

『私は糸井で御座いますが、さうお仰いますと若か貴方は……』皆まで言はず、僕は直ぐ手を出して、

『野村です、野村勉二郎です。』と叫んだ。糸井の手はヂツとばかり僕の手を握つて、僕も彼も、暫時く言葉を出し得なかつた。

僕が海軍士官の一人位になつて居る事は別に彼を驚かす程の身の成ゆきではない。けれども糸井其人が日本第一の汽船會社に事務長の役を務め居ることを發見した僕の驚愕は決して尋常ではなかつたのである。

僕と糸井の再會の歡喜が如何なる言葉に依つて互に言ひ交はされたかを詳しく言ふ必要もあるまい。

二人は直に食堂に入つて杯をあげ互の健康を祝した。抑も此糸井なる男は何者であるか。まア聽いて呉れたまへ、斯ういふ譯だ――

僕の未だ十五の時だ。さうだ中學校に初め入つた年の秋のことだ。小春日和の佳い天氣の日であつたが、僕の宅から五六丁もゆくと小さな丘がある、それは他の山脈は全く獨立して居るので恰度瘤のやうに見える、それへ僕は一人で遊びに出かけた。

日曜だから他にも少年が遊びに来て居た。此丘に登ると町が一目で見わたされるので公園にでもすれば持つて來いの場所だが、小けな町には別に公園の必要もないので、たゞ少年等の遊場になつて居るばかり。

僕は木の根に腰をかけて何心なく下を見て居ると直ぐ目の下の並木道を、一人の少年が馬に乗つて面

白さうに駈けて居たが、折り／＼其姿が樹の枝に隠れて見えなくなるかと思ふと又た現はれ、少年は三四丁の處に往きつもとどりつして、自在に馬を扱つて居るのである。僕は一心に見て居たが、次第にそれが羨ましくなつて、自分でも乗つて見たくて堪らなくなつた。

直ぐ丘を下りて並木道に出て見ると、少年は恰度僕の前に馬を進めて來た。見れば僕と同年度の少年で、身には粗末な筒袖の衣服を着て、頭の髪は蓬々と生えたまゝ櫛を入れたこともないらしい、が其顔は丸く肥つて其眼つきは如何も凛々しげに、其様子が一見して農家の兒とは趣を異にして居るのである。少年は僕の前を二三度駈け通つたが、忽ち馬首を轉じて、桑園の中に乗り入つて了つた。細い徑が一筋、桑園を通じて一軒の茅屋に達して居る。

僕は茫然と其後姿を見送つて居たが、ふと一策を思ひつき、直ぐ其後について桑園の中に入つて、やや暫くゆくと右傍に棒が立つて居て、それに『かし馬』の三字を筆太に書いた板が釘附けにしてあるのを發見した。

『かし馬』があるといふことを聞いて居たが、さてはこの馬かと、僕は其まゝツカ／＼と内に入ると今しもさきの少年が馬から下りて馬を柿の木に繋いで居るところ。

少年はちよつと僕を振り向いて見たが、黙つて内庭に入つて了つた。見廻すと、古ぼけた母屋は、重い屋根に壓しつけられて今にも壓しつぶされさうである。軒は傾き柱は歪んで居て、藁葺屋根は名ばかり、緑の苔、白い苔一面に敷いて其所々に雜草すら生えて居る。物置のやうな馬小屋に馬が一頭繋いで

ある。

四邊は藁、枯草、木の枝などが散亂して其間を矮鶏が二三羽餌をあさつて居た。

僕は柿の木の傍に近づいて馬を見て居ると、内庭からの、その現はれた男は、年頃五十幾歳、目の深く落窪んだ、胡麻白頭の、脊の高い人物。無言で僕を見て居たが、

『貴君は馬に乗れるのか？』と一言、如何にも人を馬鹿にした口調で問うた。

『乗つたことはないが乗つて見たいと思つて居るのだ。』と僕も平氣で答へてやつた。

『そんなら乗つて見るが可い。』と言ひつゝ、彼、其人は僕が此家の主人と鑑定した、氣難しさうな老人は直に馬首を捉へて控へて居る。

凹むことの何よりも嫌ひな、生意氣なる少年なる僕は、内心やゝひるんだけれど、先の少年に勵まされて居たから勇氣を鼓して、馬の傍に寄り、鞍に手をかけた。そして足を鎧に掛けたまでは可いが、なかなか身體が軽く馬の脊に上らない。中學校の運動場で木馬を飛び越えることに自慢して居た僕も、生きた馬の脊に乗る一段に及んで頗る當惑して居ると、傍で苦笑をして居た意地の悪いお爺さん、遂に見かねたか、其荒々しい腕を伸して僕の身體をちよいと掬つた。と思ふと僕の身體は早くも馬の上に在るを發見した。

さて馬の脊に乗つて見ると、生れてから初めて馬なる動物に乗つた僕は、馬の丈の今更に高く、馬の脊の今更に幅廣く、しかして我身體が一種異様な彈力に支へられて居るを感じて驚いた。

何所までも人の悪いお爺さんは手綱を柿の木から解いて馬の頭を並木道の方に向け、「そらー」と言ひさま、その手綱を鞍へ投げかけた。人の善さうな馬はのそり／＼と、さも面倒臭さうに其四足を動かしはじめた。この時、此馬が若し、馬の主人のやうな意地悪ならば、必定思つたに違ひない、「生意氣な小僧だ。一ツおどかして、泣面かゝしてやらう。」と後足で急に突立つ位な藝を演じたかも知れない。けれども元來少年に向つて甚だ親切なる馬は、彼の老人よりも僕を愛し、たゞ斯う思つた、「やれ／＼厄介な物を脊負れたことだ、仕方がない其所らを一周歩いて来てやらう。」

桑園を出て並木道にかゝると、今まで静かな並足で歩いて居た馬は、早足になつて其蹄を鳴らし初めた。僕の身體はヒョイ／＼と上に飛び上がり、恰度、鞍の上で躍つて居るかのやうである。僕は思つた、「他人が馬に乗つて居るのを見ても又た騎馬の畫を見ても、皆な馬と人とは恰も一體のやうになつて其運動が如何にも自由自在らしく見え、甚しきは馬の上で何十貫目の鐵棒を振り廻すなどいふ豪傑も居る。それなのに自分の身體は何故斯う馬の脊に着かないで今にも轉げ落ちさうになるのだらう。」と。

けれども僕は勇氣を奮つて手綱を採つたまゝ馬の走るに任して置いた。馬は船と異つて彼自身に感覺があるのだから幾何放擲つて置いても物に衝突する心配はない。其點は頗る安心なものだ。

並木道が盡きると國道に出る、これを左に廻はると丘を一周して歸ることが出来る、然し其道程は十七八丁以上もある。馬は頭を左に轉じて此一周をやらうとした。蓋し彼は數々かく教へられて居たに違ひない。

此時僕は如何しやうかと思つたといふは、十七八丁の道程が恐いのではなく、國道は並木道と異つてやゝ人通が多い、車が通る、荷馬車が通る、其間を首尾よく乗りぬくことは、僕に取つて頗る覺束ない役だと思つたからである。けれども馬は遠慮なく其目的通りに歩みだした。馬に乗せられて居る僕は如何することも出来ない。

はや國道を三四十間も行くと、後から蹄を鳴らして來た騎馬がある。忽ち僕の傍へ來たのを見ると、先の少年が裸馬に乗つて來たのである。

『何所へゆくのです。』と彼は莞爾笑つて問うた。

『何所へゆくのだか知らない。』と僕は答へざるを得なかつた。少年は笑つて、

『これから馬を洗ひにゆくのだから貴方も私に従いておいて下さい。』と國道を右に折れて田圃路に馬を進めた。さうすると僕の乗つて居る馬は恰も若主人の言ふことを解して居るかのやうに、先に立つてゆく馬の後を追うて、やはり田圃道に下りた。

路が狭いので馬を駢べることが出来ない。少年は後を振り向き／＼、靜かに馬を進ませて居る。

『何所へ馬を洗ひにゆくのです。』と僕は問うた。

『蛇の池です。』

『蛇の池?』と僕は驚いた。この池は山の麓にあつて、周圍は老樹叢として繁り、蒼々と水を湛へて居るので如何にも物凄さうに見え、少年等も氣味を悪がつてめつたに近づかない所である。

『何時でも蛇の池で馬を洗ふのだらうか。』

『さうです！』と少年は平氣で言ひ放つた、田圃路を十丁もゆくの家數五十軒もある小村に達する。其

村を横ぎると路が爪先上りになつて竹藪の彼方を流れる溪流の音が聞えだした。

間もなく池の邊に出ると、少年はひらり馬から下りたので、僕は鞍を捉へてずる／＼と下りた、とい

ふよりも滑り落ちたといふ方が適當だらう。

池の一邊が遠淺になつて居て其處の汀はやゝ池に突出して居るので、成程馬を洗ふには恰度可い場所

だと僕も思つた。

池を挟んで居る兩方の山は峻峻にして見上ぐるまでに高く、西岸は山の影で暗いけれど、東岸は西に

傾いた秋の日を受けて明るく輝いて居る。風のない日であるから一碧鏡のやうな湖面は山の影、森の影

を倒に映し、湖心最も寂なる邊には白雲の影をさへ沈めて居る。

少年は裸馬を牽いて膝のあたりまで水の届く所に出て、馬を洗ひ初めた。僕は岸からこれを眺めて居

る、僕の乗つて來た馬は楊に繋がれたまゝ草を食つて居る。

馬は少年は中心にして波紋が脈々と起り、それに日の光が映つて如何にも綺麗であつた。

『此馬も洗ふのか。』と僕は大聲で問うた、其聲を山彦が答へて湖面に響きわたつた、少年は頭を擧げて

僕を見て、優しい笑顔を満面に漲らして、首を左右に掉つた。僕は其後、何時までも此時のことを忘れ

ない。今でも眼の先に直ぐ此時の光景を浮べることが出来る。僕の眼の底には此等の光景が畫を見るよ

りも鮮かに残つて居るのである。

暫時して我少年は馬を洗ひ了り、岸にのぼつて來た。

『何故此方の馬は洗はないのだ？』

『鞍を置いて來たから』と少年は答へ、『歸りは二人が此馬に乗つて裸馬の方は牽いて歸るのだ。』と言ひ

つゝ彼は少時休息すべく草の上に足を投出した。僕も其傍に坐り、

『僕でも乗れるやうになれるだらうか。』

『なれますとも。直ぐ乗れるやうになる。』

『君は幾年だ？』

『十五。』

『十五なら僕も同じだ。これから毎日乗りにゆくから教へて呉れたまへ。』といふや少年は少し顔を赤ら

めて、

『私は出來ないから父上に教へてお貰ひなさい。父上は上手だから。』

『父上は馬の先生かえ。』

『先生だ。昔は殿様に馬を教へたのださうだ。』と少年は答へて得意の色を示すべく禁じ得なかつた。

これを聞いて僕も少年ながらに、やゝ彼の身の上が讀めて來て、急に尊敬の意が加はり、初から氣に

入つた此少年が今更親しくなつて、何時しか仲の好い以前からの朋友のやうな氣になつて了つた。

『これから毎日遊びにゆくよ。』

『あゝ来たまへ、學校へも何處へも行かないのだから毎日宅に居るから。』と彼も既に僕を朋友扱ひにして親しく話すのである。

『何故學校に行かないの？』と僕は無遠慮に問うた。

『父上がやつて呉れないのだ。』と少年は眞面目に言つて、『もう歸りませう！』と立つた。

僕を前に、鞍の上に乗せて少年は後に乗り、裸馬の手綱を探つて、これを牽き、池の邊を出立つて歸路に就いた。少年は後から巧に馬を御し、馬は心地よく走つて田圃路を過ぎ、國道に出て、國道から並木道に入ると、短い秋の日は既に暮近く、空氣は水の如く澄み、並木の小枝を蒼空に透して仰げば、星影の一ツ二ツも枯葉の間から覗かれさうな頃となつた。少年は口笛を吹く、二頭の馬は蹄の音を揃へて走る、僕は何とも知れず、たゞ嬉しくて堪らなかつた。

此日から僕は殆んど毎日のやうに此少年の許に出かけて、二人して馬の頭を並べ、並木道を走らし、丘を一周し、時には蛇の池に馬を洗ひにゆくなど、これまでにない面白い日を送り得ることゝなつたのである。

聞き得たる處に依ると少年の父は糸井專造といひ、以前は藩の馬術の指南役で知行百五十石を領し、隨分立派に暮して居たのだが、維新後の零落甚だしく遂に今の有様となり果たといふ事だ。專造の零落は時勢の罪ばかりでなく、其大部分は彼自身の性癖に由れることは、僕も彼に近づくにつれて人の噂を

確めたのである。

彼は馬術の外、何の技倆もない殆んど無學文盲な人物であるばかりか、頗る片意地で頑固で、少しも世の成行を見て身の計を立てるといふことを爲さない、そればかりなら未だ可いが、それが嵩じて世の成行を咀ひ且つ力めて逆行しようとのみ爲て居たのである。

貧苦の中の『かし馬』は生業の爲ばかりでなく、一は專造其人の性癖も満足せしめる爲であつたといふ證據は、中學校の生徒、巡查、市の若い者などが馬を借りに、彼の許にゆくと、彼は自分の弟子でも来たかのやうにこれを扱ひ、馬の乗様が如何だとか、斯うだとか、小言の千百を並べた末が頭ごなしに呶鳴りつけることも度々あるので、氣の弱いものか、氣の短いものは一度で懲りて行かなくなる、それを彼は却つて得意らしく、今の奴等にはとても馬は乗れないと力味のを見ても解る。

專造はそれでも可いが、氣の毒なのは子息の國之助である。父は彼を尋常小學校までやつて退校して了ひ、乗馬術だけ十分に仕こめば祖先に對して申譯は立つと、自分の無學を悔いずして却つて愛兒までを無學に終らしめようとして居るのである。

僕は國之助を知つてから、其事情を知るにつれて少年心にも同情に堪へず、色々の本を貸して讀ますやうにして居たが、彼は渴けるものゝ水を求めるが如く、一書を読み了はれば又一書と、僕の貸し得る丈の本は三四ヶ月の間に大概讀んでしまつた。彼が最も愛讀したのは、ロビンソン漂流記の和譯と、ジュールベルスの海底旅行の和譯、在來の本では源平盛衰記、三國誌等であつた。

僕は彼に知識の泉を貸したばかりでなく、實に少年に取つて更に大いなるもの、即ち空想の翼を貸した。

彼と二人で馬首を並べ田圃路を歩みながらの物語は一として將來の空想でないことはなくなつた。彼は或時、

『馬乗になるよりか船乗りになるほうが如何に愉快か知れない。馬に乗つて五大洲を横行することは出来ないが、船に乗れば地球を一周することが出来る』と言つて、『僕は如何しても船乗になるのだ。』と力味んだ。

翌年の正月の末と記憶する、夜の八時頃僕は學友の宅に遊びに行つて其歸りがけ、例の並木道を一人で通りかゝると、糸井國之助にひよつくり出遇つた。彼は何時もの快活なるに反し、屈託した顔つきをして居るから如何したのだと聴くと、

『今父上と喧嘩したのだ。』といふ。

『如何して！』僕は驚いて訊ねた。

『僕は斷然と僕の目的を話して父の賛成を求めたのだ、今から五六年東京へやつて呉れると頼んで見た。處が父は非常に怒つて、船乗になつて何になるのだ、貴様は武士の子だ、武士の子が船頭になるなんて見下げ果てた了見だと呶鳴つけた、僕は父の言ひ草が餘り亂暴だから二言三言争ふと、如何した事か父は泣きだして、子息にまで馬鹿にせられるやうになつたとは情ない、貴様のやうな奴は最早力にしよう』

は思はないから、出てゆくなら何處へでも勝手に出てゆけ、そのかはり生涯歸つて来て呉れるなど言ひだしたのだ。母も傍で泣くし、僕もとうとう泣いて父に謝罪つたが、考へて見ると僕ほど不幸なものはないよ……』と言ひさして國之助は愁然と頭を垂れた。

『そして君は今何處へゆくのだ。』

『何處へゆく積りもない、たゞ餘りに屈託したから外へ飛び出したのだ。』

『そんならこれから僕の宅に來たまへ。』と彼を誘うて歸り、言葉を盡して慰めてやつた。

實に彼は不幸な少年であつた。彼の兄は幼にして此世を去り、彼の力とする人は父ばかり、其父は世間並はづれた頑固者、而も彼の胸底には燃ゆるばかりの志が潜んで居る。彼はそれを壓へて父の許に朝夕たゞ馬の脊に乗つて居なければならぬとは！

彼の心を知るものは僕一人であるから彼は僕に親しみ、僕を力とし、三日も僕が彼を訪はなければ必ず彼は僕を訪ねて來た。

けれども運命は何時までも僕等二人を狭い町に置いて互に往來することを許さなくなつた。十六の春の末、僕は叔父に招かれて東京に留學することとなり、愈々出立といふ四五日前に僕は此事を國之助に話した。

國之助の驚愕は實に意想外であつた。初は信じなかつたが、遂に事實なることを知るや彼は顔色を變へて黙つて了つた。

出立の前日、僕の父は愛兒の門出を祝すべく學友などを招いて心ばかりの饗宴を開いたが、其時僕は國之助をも招いたけれど彼は來なかつた。

其夜、彼から一通の手紙が來た、其文言の意味は、『君若し東京に去らば僕は最早、友も何もなくなつて了ふ。明日から誰と馬を駢べて乗らう、誰と此志を語らう、誰が僕の志を憐れんで慰めて呉れる、誰れが僕を勵まして呉れる、然し今更これを言ふのは愚痴だ、僕は僕に志を立てさして呉れた君の恩を忘れない、そして此志は必ず貫いて見せる。君も亦た何時までも僕を忘れて呉れるなどいふだけであるが、僕はこれを讀んで一人泣いたのである。』

翌日は朝早く父と共に宅を立つた。母や、弟や、學友や、親戚の者は峠の中の茶屋まで見送つて呉れた。僕の故郷から其頃港まで出るには五里の道を人車で走らなければならぬ。父は港まで僕を送るべくやはり車に乗つて峠を越されたのである。僕は立つ前に國之助に會ひたく思つたけれど、多分見送つて呉れるだらうと思つた彼の姿が、中の茶屋で見なかつたので、頗る失望したのである。不思議に感じつゝ峠の絶頂の茶屋まで來ると、馬に乗つて坂を見下して居る一人の少年が彼であつた。彼は莞爾笑つて馬を近づけ、

『早かつたねえ。』とたゞ一言。

人車の進むにつれて馬も進む、彼は馬を人車に並べて走らす。馬上の人、車上の人、語らんとして語ることが出來ない。

『最早可いから歸つて呉れたまへ。』

『何に、もすこし』と彼は低く答へて靜に驅ける。坂を下つて更に半里、馬と車は相並んで走つた。

『眞實に最早可いよ。』

『もすこし』

『如何かして君も上京するようにしたまへ。』

『さうなると僕も嬉しいけれど……』

そのまゝ二人は無言。野は菜種の花が咲き亂れて居る。大空は霞み、雲雀は高く啼いて居る。何處を眺めても佳い景色である。

小川に渡した石橋まで來ると、彼は突然馬をとめて、『左様なら！ 此處で別れる！』と言ひ放つた。其眼元には涙が一ばい含まれて居た。

車が二三丁行き過ぎた時、僕は後を振り向いて見ると、我少年は馬を石橋に立て、此方を見送つて居た。僕は車の上で熱涙を呑んだ。

東京に着くや僕は、直ぐ手紙を出し、彼からも書狀が來たが、それも一度ぎりて、其後は僕から三四度音信したけれど遂に彼の返事はなかつたので、僕も何時かそのまゝ捨置くことゝなつた。

僕は十七歳まで東京に居て、それから江田島の海軍兵學校に入り、江田島を出るや軍艦に乗り込み其まゝ終に一度も故郷に歸らなかつたから、糸井國之助の其後の様子は全く今日が日まで知らなかつたの

である。僕の父母は僕の江田島に居る時分既に東京に住居を移して居たのだ。

ところが、彼も亦た僕の江田島に居る時分、故郷を飛び出して長崎に出たとの事である。

長崎に出た後、如何して船員となり、事務長にまでなつたのか、彼は十分話さないから解らないが、

何しろ彼の事だから非常に勉強したに違ひはない。如何だ！ 珍談だらう！ 今日僕が十年ぶりに此少

年と備後丸で、大連灣で、再び出會はし、そして二人の馬乗が、二人とも船乗になつて居たといふこと

は！

我が海軍士官の物語はこゝで終つた、自分は何心なく、『何故、糸井は君の手紙に返事を出さなくなつ

たのだらう。』『あゝ、僕も其事を聞いた。すると彼は平氣で郵便錢すら其頃はなかつたと答へた。』

自分は士官と共に杯をあげて糸井國之助の健康を祝した。

惡 魔

『如何な奴？』

『まア、奴なんて。口が悪いのねえ。』

『そんなら如何な先生？』

『私、知らないワ、如何ななんて。』

『だつて見たのだらう。』

『先刻御挨拶をしたの。』

『だから如何な人だか訊くのサ。』

對手の君子は急に眞面目な顔をして自分を凝視め、微に吐息をして、『大變學者だツてねえ。』

『誰がさう言ツた。自分で言ツたのだらう。』『御自分が何でそんなこと被仰るもんですが。宅の母上が

さう言つてゝよ。』『どうせ斯んな山の中に住みたいといふんだから變物の青瓢箪だらう。』

『武様變物ぢやないワねえ。』と君子は言ひ捨て、駈け出したが、五六歩で立どまり、莞爾笑つて、『日が

暮れたら遊びにお出でなツ。必然！』

「知らないッ！」と自分は其まゝ裏山に登つて小松原を歩いて居たが、何となく胸がむしゃくしゃする。君子は十八、自分は二十、従兄妹同士で仲善で、自分は誰よりも君子が好き、君子も自分が好であつたらしいのが、今度、浅海の一家突然、君子の宅の母家を借りて住むこととなり、其總領息子の謙輔、東京に久しく留學して居た青年が歸つて來るといふので、一週間も前から叔母を初め君子姉妹までが噂をして待つて居て、それで今日の朝、愈々謙輔が着いたとのこと、君子に遇つて見ると嬉しさに、そはそはして居る、癢に觸らざるを得ない。

元來山内家と自分の布浦家とは古くからの親戚で、某町からは十二三町もある此山の中に小さな丘一ツ隔て代々住んで居るので、君子の母は自分の叔母に當り、叔母は五年前に其良人を失ひ、今では君子と豊子と繁といふ末の男兒と四人暮し、母屋は廣過るとて閉めて了ひ、門の傍なる離室三間を常の住居となし、又自分も早く父を失ひ母と二人淋しく暮し、下男下女の外は、先づ自分を男の中の大将として兩家極めて親密なる交際をして來て居たのである。

一月程前に町から人が來て、今度出來た登記所の所長として來られた浅海氏の爲に山内の母家を借りたいと思ふが、相談して見て呉れまいかとのこと、この中間に立つた人は年來の交際ゆゑ、自分の母も早速承知して山内の叔母に此意を傳へて尙ほ色々相談した結果が、登記所の所長様と言へば田舎では一個の立派な紳士、それが借りたいとあれば無下に否むも可笑なもの、又此淋しい山の中に一家でも殖えれば、女ばかりの世界が大に心強くなるといふ利益もあり、兎も角も貸した方が可からうといふこと

に定つて、其旨を先方に答へたのである。

浅海氏は喜んで町の假住居から移轉つて來たが、家族は三人である。主人の所長殿は年齢頃五十二三、脊の高い色の浅黒い、頭髮半ば白き立派な人物、妻は四十六七で叔母よりか少しの年長者、夫婦ともに見たところ氣だての優しい、快活な、交際に慣れた人々らしく、十二歳の女の子を一人連れたので我々の一族は又もや二人の女子を得て、何處までも女人國の體を失はないけれど、猶且つ五十以上の堂々たる一男子を得たことは叔母達の大に意を強うしたところであつた。

寂寞たる山林の生活が此後から少なからず賑うて來て、見聞の狭い叔母達から見ると、役人生活に慣れて所々を渡り歩いて來た浅海一家の人の物語や生活法は少からず興味を惹き、好奇心を満足せしめ、又た尊重の念をさへ起さしめたのである。

そして二週間も経つと、婦人連に取りては更に一の興味ある問題が出來たといふのは、謙輔が遠からず歸宅するとの事實が知れたのである。

謙輔年齢は二十三、其註文には一二年田舎に居て靜に讀書したい、就いて住宅は町を避け出來るだけ閑靜な所にして貰ひたいとのこと、浅海氏が登記所に通ふ路の遠く且つ難儀なるをも辭せないで、山内の母屋を喜んだのは此理由であつたのである。

謙輔が着く三日前の晩、自分が叔母の宅へ遊びにゆくと、叔母は自分と君子に向ひ、

「浅海の奥様が今日謙輔様の寫眞を見せたが威のある立派な方だよ。宅でも君が男であつて呉れると私

も大變力になるけれど、繁しげぢやアまだく先が長うて、あんな立派な息子息子になるのは、ちよつくらのことぢやない。私は今日寫眞を見て眞實ほんじつに羨ましかつた。』

『さう、そんなに立派な方？』と君子は頭をかしげて、裁縫の手を止めて問うた。

『あア』と軽く應じて叔母は、『お前もこれからすこし氣をつけないと可いけないよ。田舎娘で行儀も作法も知らないと思はれないようにしなければ。』

『さうですねえ。』と君子は至極感心したらしい。

『だつて田舎娘が急に東京者になれもすまいぢやアないか。』と自分がつい口を入れると、叔母は、『けれども田舎娘には出舎娘で相當の教育をして來たのだから、笑はれるやうなことを爲しては、君ばかりぢやアない、私まで卑下ひげすまれるからねえ。』

『眞實ほんじつにさうだわ。』と君子は頗る眞面目である。

『何に關かまはん僕は暴れて見せてやるのだ。』眞實ほんじつに武様むさまんは變物だよ。』と君子は今更らしく眼を見張つた。

『さうよ、變物のところを見せてやるのだ。』馬鹿をいふもんぢやアないよ、お前なども謙輔けんすけ様が來られたら色々教へて貰ふ方が可い。』と叔母は大眞面目。

『何をサ。』何かにつけてサ。』僕は鮎釣あなづりと狸狩ねじを教へてやらア。』

叔母も君子も機嫌が可くないので自分は直ぐ外そとに飛び出したが、此時から既に自分は淺海謙輔が我等の仲間なかまに加はることを何となく歓迎しては居なかつたのである。

それで今、君子に別れて小松原を歩いて居ても、何時ものやうに面白うないばかりか、口惜くやしいやうな、情ないやうな氣がして堪たまらなかつた。

二

成程自分は變物に違ひない。自分は子供の時分から他の腕白仲間と一緒に遊ぶことは餘り好すかなかつた。なるべく單獨ひとりで惡戯いたづらが爲したかつた。たゞ其中に君子にだけは心置きなく遊ぶことが出來、君子は自分の従妹いとこであるばかりか、時には姉のやうな心持もして、長ずるに従ひ、益々君子と親み、其姿を二三日見ないと、如何も物足らず感じて淋しさを覺えたものである。

それで君子は自分のことを變物だと常つも稱いつて居たが、自分は君子にさう言はれることは別に不快な感も起らなかつたのである。

ところが、淺海謙輔のことで、今度、君子から變物と言はれたことだけは、今更のやうに聞えて、自分はずからず不快の念を醸かめたのである。

『變物なら如何どうしたい！』自分は反抗して見なくなつた。

『どうせ僕は變物だよ。猶ほ變物になつて見せるぞ。』と一念の發作はつさくを禁じ得なかつた。

既に斯ういふ風だから自分は、淺海謙輔に近づく氣は毛頭もないばかりか、なるべく其機會を避けるやうにして居たのである。

であるから君子が遊びに來いと言つたけれど、必定きまつ謙輔も同席だらうと、行かないで其夕ゆふは宅うちにしつ

込んで居たが、我儘者の癖にして、斯うなると益々氣色が悪くなるばかり、遂には何故君子が呼びに寄さないうらう、とまで思ひ、獨りて焦れて居た。

夜の九時頃まで読みもせぬ本を机の上に、洋燈の心を出して見たり引込めて見たりして居たが、ふと頭を上げて見ると、窓の障子に月影が射して居るので、其まゝ外に飛び出した。

夏の末、秋の初の夜の冴え渡り、半圓の月清く澄みて下界はしつとりと露けく靜かに、山も林も黒い影に淡靄の白き光を浴びて浮んで居る。

丘の脊を辿つて山内の裏山まで来て、子供の時から君子等と筵を布いて遊んだ平地へ出ると此處からは北向の村を見渡すことが出来る。村は何處、林は何處、たゞ見る、月の光は、あらゆる直線を和げ、あらゆる色彩を融き、我世をさながら夢の世に變へて居るのである。自分は岩陰に佇立して居た。

暫くすると何者か自分と同じく上つて来た人の氣勢、靜に控へ、呼吸を凝らして居ると、其者は自分の傍らの岩に腰をかけた。隔つこと十歩、されど岩陰は自分を隠して居る。

彼も動かず、我も動かず、斯くて幾分を過ぎた。此時、寂として音なく、たゞ何處にか蟲の音の微かに、遠く聞えるばかり。

忽ち物言ふ聲！、自分は悚然として閉息した。言葉は嚴かに、音は澄みて、『天に在ます神、慈愛の神様……萬有を統べ給ふ神よ、塵深き都を去つて此靜なる山の上に立ち、心置きなく祈禱を捧げ得ることを感謝します。信仰薄く、常に地の煩悶に苦しむ我を憐れみ給へ。この清き村、この靜なる山、此美は

しき自然の懷に導き給ひしを感謝します……』

聲は慄へ、嗚咽泣く音を交へて『されど神様、されど……斯く祈りつゝ我心は何故に眞實に覺醒むる能はざる乎、神様、此天地を統べ給ふ神様、限りなき時と限りなき空間、思へば不思議にして驚く可き此の世界に斯の生を寄せながらも、我心は何故に常に平然として月に泣き花に笑ふの情と、親を慕ひ戀を樂しむの心とにのみ其安和を得て満足するか。神よ、神よ、不思議と知りつゝも不思議を感じる能はざる人の心は初めより神の定め給ひし約束なるか。……然らば何故に神は、我心に此遂げ難き希望を置き給ひしか……何故に我心を更に暗く且つ鈍く作り給はざりしか……獸にも等しく生存を希ふ欲望を與へながら、而も且つ天を仰いで其限りなきを見、此の生命の泡沫の如きを思ひ得るの心を、人には授け給ひしぞ……嗚呼神よ、我苦悶の聲を憐れみ給へ……』

聲は止み、泣く音のみ微かに聞えて、やゝ少時。少時は泣く音も絶えて幾分か過ぎたが、やがて彼は其處を去つて元と來し途へ引返へし、其足音も聞えなくなつた。

何者ぞ？ 言ふまでもなく淺海謙輔！ 自分は直ぐ山を下りて叔母の離室を訪うた。君子は、『何故早く來ないの？』『たゞ來なかつたのサ。』と言へど自分は山に得し不安と不審の胸猶ほ靜まらず、『今山に上つて月を見て來た。』『さう？ 先刻まで謙輔様が來て居て東京の話をして聞いたのに。』『如何な先生だ……？』

『優しさうな人よ。』と君子は母を顧みて『ねえ母上。』『さうさ、そして何處か人ずれの爲ない、内氣な所

があつて眞實に私は氣に入つちやツた。」と叔母。

『明日武様ところへも挨拶に行く被仰つてよ。』と君子は『そして武様の事を話したの。』『何と言つて？』

『年齢は十九だが腕白者だから何分願ひますと私が頼んで置いた。』と叔母。

『そして變物だつて私が言つてやつた。』と君子は笑つて自分の顔を覗込んだ。

けれども自分は山に得た不審の心安からず、君子に反抗の氣も乘兼ねて可笑しくもない、腹も立たぬ。黙言つて居ると、君子は言譯らしく、『けれども私武様を譽めて置いてよ。』『何と言つて？』『變物だけれど感心に書物が好きで、英語が上手だつて。可いでせう其なら。』『馬鹿言つてらア』と自分は苦笑したばかり。

『何處で英語を習つたのだつて訊いてよ。木實様といふ人に教はつたのだと言つたら、木實といふ人は何だと聞くから耶蘇だつて言つたの。』『そして何と言つて？』『今其人は何處に居るかと聞くから、先達まで町に居て教會堂の牧師でしたが、今は何處へか轉任して居ませんと言つたの。そしてね武様耶蘇信者かツて訊いてよ。』『信者だつて言つたの？』『否え、初めは耶蘇らしかつたけれど今は何でもなつて。』『そして何と言つて？』『たゞ黙つて居てよ。そしてね私に耶蘇の説教を聞いたことがあるかと訊くから、武様が曩日山で木實様の聲色だつて説教の眞似事をしたのを聞きましたよ。』と叔母は早口に、『耶蘇笑つて居らしてよ。』『餘計なことを言つてらア。』と自分は言つて歸らうとすると叔母は早口に、『耶蘇

かも知れないよ謙輔様も。』さうかも知れない。』と自分は起つた。君子も起つて、『耶蘇だつて可いヲ。』

『大嫌ひだつて言つてた癖に。』それは以前のことでワ。』

三

實に自分は木實先生に英語を學び、又た耶蘇教の説教をも聞かされた。けれども自分は英語だけ學んで宗旨の方は如何しても氣乗りがしなかつたのである。

英語のバイブルは讀み習うたが、バイブルの教は自分は如何しても受取れなかつたのである。又自分は其教を求める氣も全然無かつたから、木實先生は自分を愛して呉れる一方で、甚だ失望して居たらしかつた。轉任して町を立つ前の晩、久しく無沙汰して居た自分を使者を以てわざ／＼招び寄せ、自分と一人會堂の隅に坐らして、『天に在ます父よ、何卒此青年を救ひ給うて、無窮き生命の泉を汲ましめ給へ……』云々と熱心に祈られた其時、自分はたゞ眞面目に先生の親切を感じたばかりで、宗旨の上には少しも心を動かさなかつたのである。

けれども計らず淺海謙輔の祈禱を竊聽した時は言ふべからざる者を感じて自分が淺海に對する反抗の念をすら幾分、曖昧にしてつた。

翌日の朝、謙輔は自分の宅を訪うて來た、母も自分も出て挨拶した。見ると香のすらりとした色の白い、思つたよりは若々しい青年だ。自分達に物言ふ聲音には一種の愛嬌ありて敵をも和げさうな力あり、其眼は輝きて鋭く、急速しく左右を顧眄するところ、彼が不穩の心を示して居た。

其の誘ふに任して相伴うて野に出た。露は旭にきらめき、遙けき野末の村よりは烟が上つて居る、この村は海濱に沿うて鹽田あり、烟は鹽竈より立上るのである。

『貴様は朝晩散歩を爲さいますか。』と彼は自分を顧みて問うた。

『散歩と言つて規則立つたことは爲ませんが、野山を駆け廻ることは何より好きですから始終行つて居ます。』『お一人で？』『さうです、僕には友達が別にありませんから。』『これから僕と一緒に歩きましょう。』

『何卒願ひます。』『此邊には佳い風景の所が澤山に有るでせう。』『別に佳いといふ所も有りません、大概こんなものです、海濱に出れば幾分か變つて居ますが……。』

それより二人は丘に上り村を過りなどして、一時間ばかりも歩いた、其間、自分には見慣れて珍らしとも思はぬ村落樹林の景も、謙輔には餘程氣に入つたらしかつた。

『貴様には面白くもないでせう、こんな景色は？』と問うたから自分は有體に『何でもありません。』さうでせう。珍らしいから美しくいと思ふのは景色ばかりでなく、何事もさうでせう。私も其中には貴様のやうに此景色が何んでもないやうになる時が必然來るのです。』と彼は理由ありげに言ふので、自分は『當然のこととて別に不思議はないでせう。』『さうです。當然のこととて、けれども私は其當然が甚だ氣に喰はないのです。』『何故です。當然のことは當然のこととてせう。』『さうです。人の心が左様作られ居るといへばそれまでです……併し……。』

謙輔は黙つて了つた。自分はそつと彼の顔を覗くと、彼の眼は凄く光り、彼の唇は堅く閉ぢて居る、

端なく自分は彼の前夜の祈禱の言葉を想ひ起した。

『貴様は耶穌教をお聴きになつたことが有るさうですね。』と突然問はれて、『有ります……けれども今は……』『今はお止になりましたか。』『初から信者ではありません、たゞ聴いたばかりです。』『では貴様は神様は無いものと思ふのですか。』『あるか無いか、そんなことは思つたことも無いのです。有るものでせうか。』自分の語氣にはやゝ冷嘲を帯びて居た。

謙輔は靜に、『有るかも知れませんが、無いかも知れません。』『だつて貴様は神に祈つたではないか』と言ひたかつた。けれど流石に口には出し得ず、たゞ彼の顔を打まもつた。

『牧師は何と貴様に教へました？』と問ひかけたので、『有ると教へました。』『たゞ有ると？』『さうです、有ると教へて其理由を色々話して聴きました。けれど私は……』言ひかけると彼は直ちに、

『其理由が解らないといふのでせう。』『さうです。私には理由が解らないのです。けれども研究も爲ませんでした。』『研究！ 研究！ 私も研究は大嫌ひです。神の有無を研究するのは……幽霊の有無を研究するのも同じことです。』と言つて謙輔は冷かに笑つた。

『幽霊も神様も同じやうなものです。』『兄弟分です……あゝ佳い風景だ！』と彼は突然足を止めたので氣がつくと、近郊遠村を見渡し得る丘の脊に我々は立つて居たのである。

『そら、彼所に見えるのが此所の教會堂です』と自分は町端に立つて居るペンキ塗の家を指さした。謙輔はたゞ首肯いたばかり。村の少女が二人、松葉搔の籠を脊負つて傍の徑を過ぎゆく、其一人が自分に

會釋したのを自分は呼び止めて、『オイお鶴、お鶴！ 先生に今晚出かけると言つて呉れ。』『先生とは誰です』と謙輔は訊いた。自分は笑つて『お鶴の兄です。叔母の家の小作を爲て居ますが、淨瑠璃の名人で、面白い男です。變物扱ひに村の者は爲て居ますが、私は好だから時々遊びに行つてやるのです。』『貴様も淨瑠璃を行るのですか。』『彼奴が勝手に先生になつて無理に私を弟子に爲て居ますから少しづつ行つて居ます。讚美歌よりか淨瑠璃の方が面白いやうですなア。』

謙輔は思はず聲を放つて笑ひ、『さうかも知れませんが、先生も耶蘇教の先生よりか可いかも知れない！』『然し木實先生は全く好い人でした、この前の會堂の先生は。』『好人物必ずしも眞實の傳道者ではないやうです。』

二人は暫時く黙したまゝで立つて居ると、松原の彼方で先の小女の唄ふ聲が聞える。謙輔は『一度私も淨瑠璃の先生の所へ連れて行きませんか。』『何時でも御一緒に参りませう。』
以上の如くして自分は淺海謙輔と相知つたのである。

四

謙輔の言葉の節々、自分は頗る不審に思つたのである。彼は果して耶蘇教信者であらうか。自分に取つては彼が耶蘇であらうと無からうと、何んであらうと別に關係もないことで、氣に留めるほどのことで無い筈が、實際はさうでなく、今までは、教會に出入してすら何にも感じなかつた自分が、不思議にも痛く彼の舉動に動かされたのである。

淺海謙輔は果して耶蘇教徒であらうか。神に祈りたる、其熱心な言葉を思ふと正しく信者らしく、而も彼は、『神は有るかも知れず、無いかも知れない』などいふ曖昧なことを言つて居る。

のみならず、讚美歌より淨瑠璃の方が面白いと自分の言つた言葉は奇怪とは思はず、却つて大笑したではないか。

彼も亦た一個の變物であるまいか。
自分には謙輔の人物が不審であつたのである。

五

謙輔に初めて會つた日から三日目、郷里から二十里隔たつて居る某町に住んで居る叔父の宅から自身を招く手紙が來た。本年は珍らしい大競馬があるから是非に來いと祭の案内狀。自分は餘り進まなかつたが、母が強ひるので終に出立した。

三四日滯留の積が一週間になり十日になり、更に叔父一家の者と讚岐琴平詣を爲なければならぬこととなり、忽ち一月足らず過ぎて漸く宅に歸ることが出來た。

宅に着いたのは夜の七時頃である。母と差向ひ夕飯を濟すや土産物を持つて叔母の家を訪ふべく外に出ると、夕月の影冴えて、恰度、淺海謙輔が初めて此處へ來た頃の夜の様と同じである。月は一月進み、秋は半となり、露重く蟲の音繁く、引く呼吸のやゝ冷たきを覺ゆるまでになつただけである。
叔母と外の子供達は居たが君子の姿が見えない。

『お君さんは？』と問うた自分の語氣には我知らざる不安と不足の音を帯びて居たのである。

『謙様の宅よ、姉さんは』と豊子が何氣なく答へた。
『呼んでおいてよ』と叔母が言ふかと思つたら黙つて居る。自分は旅行中の事どもを話して居たが、何となく心が落着かない。それとも叔母は氣の着く道理もなし、色々と訊いて居たが自分の答辯に氣の乗らないのを見て、『疲れて居るだらうから早く歸つてお寝み、謙様もお前の歸りを待つて居なかつたから明日は朝から遊びに来るが可い。』と言つたが、君子のことは何とも言はない。

外に出たが直ぐ宅に歸る氣にならず、仰いで大空を望めば星の一個、今更の如く眼に映る。自分は今更といふ、何故なれば、これまで幾百千度、空を仰いで星影を見たが、此時ほど我心に其清くして澄みたる、意味ありげなる趣を印したことはないからである。今までに感じたことのない、うら悲しい懐がして、涙さへ誘ふばかりになつた。

今から思ふと、自分は其頃、君子を戀して居たことが解るのである。何故自分は謙輔を叔母や君子等の如くに歡迎することが出来なかつたか、何故自分は、君子が謙輔に近づいたことを知ると共に、我知らず深い哀みを感じたか。此悲哀は戀の果敢さの悲哀ではないか。

けれども自分は當時、明かに自分の戀を認めては居なかつたのである。たゞ夫れ、物足らぬ思ひ、言ひ知らぬ哀を催したばかりに過ぎない。

家には歸らないで自分の足は知らず、裏山の松原に向いた。徑は幾重にも迂回して緩かに、樹間よ

り洩る月影を踏んで頂に到り、先の夜、謙輔が神に熱禱した岩陰まで出て、暫く佇立んで居ると、人の話聲が近づいて来る。

自分の今来た路を登つて来る人は山内の者か自分の宅の人ならでは無し、何者かと氣をつけて待つて居ると、一人は謙輔の聲、一人は君子の聲！

自分は直ぐ身を木蔭に隠して了つた。彼等の様子を覗ふこと、其物語を竊聽きすること、これ善きことと悪しきことなど思ひあきらむるの心さへ起らず。

暗き影の中より二人の黒き姿が現はれた。透し見る、二人は肩の磨れ合ふまでに身を寄り添へて歩く、一步は一步より遅く、忽ち二個の姿一個に合ひし如くに自分には見えたが、又た二個に分れて頂きの平地に並んで立つに及び、二人は月に向ひ暫く無言の體。

『だつて田舎よりか如何しても東京の方が可いでせう。』といふ君子の聲。

『さうです、都會に住む人は悪魔になり、田舎の者は悉く善人だといふ譯は決してないけれど、其のやうな人間には如何しても田舎の方が可いやうです。近いところが都會に居てはこんな山もなければ、こんな見晴らしもありません。全くないではないが、田舎に住んで心閑かに眺めると、都會に居て名利競争の暇に賞美するのは全然精神が違ふやうです。』『さうですかねえ。』『然し理窟を言へば何でも議論は出来ませんが、私は理窟は如何でも可いので、たゞ田舎が好き、それで文句はないのです。たゞ思ひます、田舎の好きな人は都會の好きな人よりか幸福だと、さう思ひます……どうせ人は皆な死んで了ふの

ですからねえ……『でも尾間さんは先の世が在ると仰しやいましたよ。』『尾間君などに何が解るものですか。』『マアあんなことを！』『眞實ですよ、彼の人のなんか、神様が如何だとか、かうだとか、木で作つて衣兜の中に納つてあるやうに手軽く神様々々といひますが、あれは皆な偽の皮ですよ。』『ヂャア偽言者でせうか。』『マア偽言者でせうなア。』『ヂャア未來は無いものでせうか。』『あるかも知れませんが、無いかも知れません。』『でも有るつて尾間さんは言ひましたよ。』『尾間君などは善人です。』『だつて貴様今、偽言者だつて仰しやつたヂャアありませんか。』『偽言者の善人は澤山ありますよ、傳道師などは大概さうのやうです。』『貴様の仰しやることは私なぞに寸毫も解りません。』

然り、竊聽する自分にも解らない。謙輔は曾て自分にも同じやうなことを言ひ、亦た今、君子に向けて語る、其一語、其一句、好んで斯くもひねくるのか、さうでもないらしい。怪しいかな彼！

『尾間君などは解るやうに言ひますが、あれで自分では何も解つて居ないのですよ。』

『大變悪く仰しやいますねえ。』『悪く言ふ譯ぢやない、私は全くさう信ずるのです。若し彼が解つて居るのなら、私は狂氣です。』と言ひ放つた謙輔の聲は甚く激して居た。

『そんなことは有りませんワ。』『いゝえ、狂氣です。けれども私は尾間君の善人よりか自分の狂氣の方を選びます。』

君子は黙つて了つた。頭を垂れて立つ少女、傍に立つ一人は昂然として大空を見渡して居る。

『歸りませう！』

謙輔は靜かに前に立つた。君子は其後に。先には並び歩いた二人が、今は前後して相隔つる二歩三歩、林に入り言葉もなく山を下りて了つた。

尾間とは新任の傳道師、彼如何にして二人の題目となつたか。自分の居ない間に、わが靜なる山家は、更に一人の友を加へたのか。

自分は家に歸り床に就いたが、暫時は眠むる能はず、君子とたゞ二人、長閑かに往來して暮らした彼の日、彼の時、色々と思ひ浮べて居ると、丘の麓を聲朗かに唄ひゆく、聲は正しくお鶴の兄、我が淨瑠璃の先生！

六

次の朝君子に逢つた。君子は奥の三疊でたゞ一人裁縫を爲て居た。自分を見て、『お歸り、大變遅かつたのねえ。待つて居てよ。』『嘘言つてらア、待つても居ない癖に。』と自分は其傍に坐つた。見ると見慣れぬ男の衣服を縫つて居る。

『誰の？ それは。』『これ？ 謙様の。好い柄でせう。さうく言ひ遅れました、お土産有難う、私大變あの縞が氣に入つたのよ。』『随分長逗留だつたらう。』『眞實に長かつたワねえ、私待ち疲れて了つてよ。』と言ひつゝ針を運して居る。其顔を見ると、血の氣は失せて、何處となく憔悴れて見えるので、『如何かしたの？ 顔色が悪いよ。』『さう？ 如何も爲ませんよ、昨夜何だか能く眠られなかつたからでせう。』と顔を上げ頬に垂れた髪を掻きあげて又た下を向いた。

『如何して？ 何處か悪いのぢやアないの。』『武様！』と君子は顔を上げ、笑味に恥を帯びて、『私、昨夜妙な夢を見てよ。』

『謙輔先生のお嫁になつた夢でも見たの？』と自分はツイ口を滑らした。君子はサツと顔を赤らめ、『知らないワ！ そんな夢ぢやアないワ！』『どんな夢？ それぢやア。』『死んだ夢なの、死んで地獄に陥ちた夢。何だか可畏つて可畏つて、赤鬼だの青鬼がぞろぞろ居て、火の池に私を突き落して私が這ひ上らうとすれば又た突落すのよ。』と熱心に語る其眼の中に光あり、睫毛は潤んで居る。『そしてね。』と急に聲をひそめ、『向を見ると謙様も居るのよ、謙様が大きな聲で君さんく早く逃げる、早く逃げるッて言ひながら、火の中に浮いたり沈んだり爲さるの……』『僕は居なかつて？ 僕は？』

君子は頭を掉つて歎息をして、『妙な夢でせう。』

『僕が居たら直ぐ君さんを助けてやるんだけど、謙様たんか弱蟲だから駄目だ。』

『地獄なんて、眞實に有るものでせうか』と君子は何處までも眞面目である。

『有るかも知れないよ、耶穌でも佛教でもさう言ふから。』『武様眞實に如何思つて？』

『どつちでも可いと思ふ。そんなことは如何でも可いぢやアないか。君さんと一緒になら僕は地獄にても行かア。』『私、否。』『極樂なら？』といふ自分の間に君子は答へず、急に起上つて次の間に出たと思ふと、『武様、謙様が入ッしやッてよ……武様も來て居ますから此處へお入りなさいナ。』

暫くすると尾間利雄も來た、自分が尾間に會ふは初めて。君子は馴れくしく言葉を交へて居る。叔

母の發案で、今日は小春の上目利、山遊に大勢で押出せといふに皆々賛成し、尾間に謙輔、自分に君子、

謙輔の妹の春子、それに豊子と繁と同勢七人。叔母は下女下男と共に後から辨當を運ぶといふ手配まで

決り、河に沿うた山、俗に赤山と呼ぶ低い平い、見晴の佳い丘へと繰り出した。

『御酒は先へ持つて行つたら？』と出立際に叔母の注意。『酒は持たない方が可いでせう。』と尾間の牧

師。『イヤ持つて行かう、少しでも持つて往かないと、山遊の氣が爲ないから』と、淺海謙輔の言葉に附

いて、『賛成、賛成！』と自分は早くも叔母の手から例の一瓢を受取り擔いで了つた。尾間は見て苦笑し

た。

『讚美歌を持つて行きませうか』と言つたのは君子、大賛成を表したのは尾間、自分も謙輔も黙つて居た。

繁を先登に、これに續く春子、豊子、男三人と君子とは後になり先になる。最後の下男の一人が藁筵

と毛絨とを擔いで續く。

脊の一番高いのが淺海謙輔、次が自分で、尾間は君子よりやゝ高い。尾間は二十六の由なれど小柄ゆ

ゑ淺海の方が却つて老けて見える。顔の一番白いのが君子で次ぎが尾間、自分の顔は分らないが、淺海

と同じ黒さであらう。尾間は洋眼を着て杖を持つて居る、衣囊を膨らして居るのは聖書か、それとも

謙輔の所謂木で作つた手輕な神様か。

淺海は飛白の羽織に米利堅帽、これは彼の常の衣装らしい。君子は束髪にリボン、其色が桃色、薔薇

の花髪挿は見慣れぬ一物、多分浅海か尾間が贈った品らしい。
 『繁さん、左様走つては危ないよ。』と後を追うて駆け出した豊子に従いて、春子の姿も小藪の曲角に隠れて了つた。

角まで來ると『ワツ』と三人。喫驚した顔で飛び上つた尾間の様子が剽輕だと君子は相好を崩して笑ふ、自分も笑ふ、謙輔も笑ふ、笑ふや一、心持は異つて居たかも知れない。

『尾間様、杖を拜借な』と君子は振り向く。

『何に爲さる？』何でも可いから貸して頂戴な。』と言はれて尾間は大事さうに持つて居た杖を渡す。自分達は如何するかと見て居ると、君子はたゞそれを携へて行くのである。

麓を廻つて一丁ばかり、一軒の農家がある。小犬が吠えて飛び出した。ワツと三人の子供は後へ逃げ廻る、君子は杖を振り廻した。犬は益々吠える。君子は遂に杖を犬に投げつけると、犬は一躍、平氣な顔でそれをくはへ後の山へ上つて了つた。喫驚したのは尾間の牧師である。手早く上着を脱いで草の上に投げ出したトタンに衣兜から飛び出したのが聖書、アハヤ田溝に轉げ落ちさうにして僅に草の根に止つたのを見向きもせず、一目散に犬の後を追駆けた。

浅海は腹を抱へて笑ふ、其際に自分は聖書を拾つて我が懐の奥に隠した。見たものは誰もない。

尾間が杖を取り返すに十分もかゝつたらうか、上着を肩にかけたまゝズボンから眞白な手巾を出して汗を拭きながら歩む、聖書のことは氣が着かぬらしい。

此一幕が終むと間もなく赤山の麓なる河岸に出た。川幅三四間、岸には川楊繁る。水は澄み底は小石の數も讀まるべく、小舟一艘繋いであるのを見て、我年若き傳道師は逸早く飛び乗つた。其勢の餘り烈しかつたので、軽く繋ぎし綱抜けて舟はする／＼と一間ばかり沖へ。波紋ゆら／＼と起つて岸を打つ時、舟は止つて流緩るれば流れもせず、後へも先へも其儘尾間は流罪の體となつて了つた。

子供は手を拍つて山へと登りはじめ、浅海もこれに續ぎ、君子と自分は後に残つたが、二人の間は四五間隔たつて居たのである。

小舟には水棹なし、尾間は驚いたが如何することも出来ない、下男は爲に近所の家へ竹棹を借りに行く。自分は岸に立つて懐から先の聖書を取り出し、故意と素知らぬ顔で繕いて讀む眞似をすると、尾間は見て、『オヤ驚いた、それは僕のヂヤアないですか』と急いで衣兜を捜したが、『不可せん／＼、それを見ちやア不可ません、布浦様、武雄さん、眞實です、それを見ちやア不可ません。』と躍起になつて叫んだ。『可いぢやア有りませんか、祕密の本ヂヤア無いでせう、先刻貴様が落して御存知ないのを拾つて置いたのです。』と自分はたゞ椰楡ふ積りで益々聖書をひねくる。

『どうも有難う、然し／＼……、ア、困つたなア』と其當惑さ加減は尋常でない。浅海も不審に思つて足を止めて見て居る。

皮表紙四六版の聖書、それも手磨のした、流石に其職の人が持つて居さうな古ぼけた書、別に不思議はないのである。君子が五歩六歩、自分の傍に近づいた時、表紙の裏に附いてある紙の間に少し現

はれて居る紙片に眼が着いた、其文字に。鉛筆で、『愛する山の女神、君子の君に榮あれ!!!』

自分はハタと書を閉ぢた時、君子は傍に来て、『何ぞ書いて有るの？ お見せなさいな。』『尾間様！』
 自分は呼びかけて『返しますよ、そら！』と投げた。書は無事に彼の手へ。自分は走つて浅海の後を追
 うた。七人、山に揃うた時、自分の素知らぬ風を見て、君子は勿論、浅海も、又た尾間すら文字を見た
 自分を怪しまなかつた。けれども一種、言ひがたき不快の念、それは前夜、君子の姿の見えなかつた時
 に感じたそれとは異つた、苦々しい、重苦しい思ひが自分の胸を壓へて、山遊も一向に面白くない。け
 ども顔には少しも出さなかつた。

一番面白さうなのが子供の次ぎには尾間牧師、次には君子、浅海も面白さうであるが、尾間ほどハシ
 やいて居ない。君子はやゝ浮れ氣味で、地獄の夢など消えて跡なき夢物語。天國は近にありさうな様子。
 辨當が来た、酒を出す、尾間は見向きも爲ない、浅海は二三杯、自分は五六杯、後は下男が飲んで了つた。
 松の木蔭に立てば冷しき風吹き、見渡せば野は半ば刈り取られ、廣びると佳き眺めを面白いとも樂し
 いともたゞ嬉しかつたのは以前の山遊、今は甚だ下さらない。君子と尾間は聲を合はして讚美歌を歌つ
 て居る。浅海は黙つて聽いて居る、自分は黙つて見て居る。子供等は叔母や下男と戯れて居る。尾間の
 ホワイトシャツは反射し、君子のりボンは輝へる。

此日、尾間と初めて相見て、此日より自分は尾間が嫌ひになつた。そして浅海謙輔を何となく慕
 く思ひはじめたのは實に此日からである。

山遊の日から五個月経つた。此短かい月日の間に如何なことが有つたか、自らの口から言ふより浅
 海謙輔の筆の方が適切で而も意味が深いだらう。

春三月、謙輔は飄然として家を出て再び都に去つて了つたのである。自分すら其前夜まで知らなかつ
 た。朝になつて見ると、謙輔が居ない、浅海の父母は、たゞ昨夜急に思ひ立つて旅行の途に上つたとの
 み、我々に告げた。實は父母すらそれが永久の門出たることを知らなかつたのである。

けれども謙輔は途中から自分に一冊の隨筆を送り來した、自分は何度繰返へして讀んだらう。
 要するに彼は眞實の傳道者であつたと、自分は此處に斷言するのである。自分は彼に由つて實に新しき
 生命を得た。と言ふよりか寧ろ、彼に依つて自分は眞實の生命に入る門を開かれたと自分は斷言する。
 要するに彼は煩悶の兒である。自分も亦た彼に依つて深い煩悶の淵に沈むことゝなつた。けれども自
 分はこれを少しも悔いないのである。

彼の名は今以て世間に聞えない。恐らく永久に聞えないだらう。けれども初より社會生存を無視した
 る彼には當然の事で、彼は勿論、自分とても敢へて苦にもしないのである。

『惡魔』は我山林生活に於ける彼の隨筆。かれ自ら題して『惡魔』と書し、自分に送つたのである。

其序文に曰く——武雄君足下、此一冊を君が机下に呈す。これ余が隨筆なり、月日たき日記なり、小
 説なり、演説なり、祈禱なり、咒咀なり、而して實に懺悔なり。過ぎし半年の永かりしことよ！ 此間、

余が君の親切に負ふ所如何に多かりしやを思ふ時、この冊子を示して可なる人、君に非ずして遂に誰ぞ。今日まで、君は忍んで余が苦悶の聲を聞き給ひぬ、願くは今一度我ために忍んで此冊子を一讀せよ。讀み了つて火中に投ずるも余に於て憾なし、藏して永く不幸なる青年が記念とも見給ふ、これ又可なり。或は又これを君子に示し給ふとも、其は君が處置に任す。

悪魔よー 悪魔よー 生命の秘義に觸る可く、僅に一幕を隔つるのみにして而も遂に爾の捻じたる黒影を拂ふ能はざるは永久の恨なるかな。

斯の如くして余も亦た遂に獸の如く死する也。斯の如くして余も亦た遂に泥土に歸する也——。自分はこのより左に『悪魔』の數節を抜く。

〔一〕

君子と知るを得たり。君子は十八と言へど都會の娘に比れば十六位にしか見えぬ。其眼は人を魔するの力あり、睫毛長く垂れて常に物を思ふが如きまなざし。

舉止活潑なれども温雅の風姿を亂るに至らず、言語明晰にして語音に妙なる響あり、髪は長く黒く房と耳を覆ふ。教育あるが如し。

豐子は我妹の友なるべし、君子は如何、余が友たるを得るや否や。余は其友たるを望む。

我が山林の生活を彩るに斯る少女あるべしとは思はざりしに。我も少女と共に幸多からんことを祈る。君子の母は善き人なるが如し、されど君子の容姿の母に肖ざるは、亡き父の血を受けしものか。

〔二〕

月明を踏んで山に登る。月光流水の如く、山も林も野も村も、寂として夢の如し、岩に伏して祈る。祈る時、我が胸は掻き亂れぬ。この靜なる山林の生活を得て、而も我遂に安んずる能はざるか。神を祈れども神を知らざる者は我なるかな。

されど、我は『不安』を否まざるなり、我が『不安』はわが靈の生命なり、生命の根なり源なり、我は安くして犬の如く死なんより悶きて天界を失落せる悪魔の子の如く生くべし。

空しき言葉なるかな。斯く書しつゝ我心の焦だちを覺ゆるなり。嗚呼これ何の故ぞや。

〔三〕

幻影あり。

我を導く一個の星あり、我が眼前に淡青色の光を放つて進む。我其後を尾して行く。

既にして我が住む地球は星の如く小さくなれり。空冥杳に他の群星と共に輝くを見る。而して我眼を眺へして上下左右前後八方を見渡すに、一道の光輝紫色を帯びて、天の一方に横ふを見る、思ふにこれ太陽の光、暗黒裡に入りて其光を失ひしならん。矢の如く走りゆく光あり。頭上に五個の大圓球あり。皆な血の色を帯びて浮ぶが如く懸れり。

幻影か、幻影か、余は斯る幻影を追ふことを好む。

〔四〕

布浦武雄は才あり氣力ある好青年なるが如し。木實某が彼を化して、『信者』となさんと試みし勞力の無益に歸したるは笑ふべきかな。化して石となし驪馬となす、余はこれをアラビヤナイトに於て見る、化して『信者』となさんと勞苦する魔術者を基督の弟子に見るは傷しいかな。されど怪しむ勿れ、彼等弟子と稱する輩も亦た化成の『信者』にてあるなり。

神を求めよ、されど如何して？ 神とは此世の神か、果して然らば貨幣も何の選ぶ處ぞ。

嗚呼吾等が住む此小さき星も亡ぶる時あらん、秋の梢より木の葉の落つるが如くして。これ比喩に非ずして推測せる自然法なり、事實なり。此事實を感じて其心を動すこと、戀を感じて其情も動すが如くんば、神を求む、然らずんば死を求む。

我黙して山上に立つ時、忽然として我生存の不思議なるを感ず、此時に於て『歴史』なく『將來』なし、たゞ見る、我が生命其者の此不思議なる宇宙に現存することを。あゝこれ天地生存の感にあらずや。かかる時口言ふ能はず、たゞ奇異にして恐しき感、わが靈を震動せしむ。思ふ基督が四十日間、荒野に於て嘗め盡したるものは此痛感にあらざるか。

〔五〕

山を下れば社會あり。食物あり、衣服あり、住宅あり、父母あり、隣人あり、こゝに交際あり、名譽あり、恥辱あり、而して哀しき人情あり。過去に歴史あり、幻の如く我等を追ひ、將來に希望あり、蜃氣樓の如く前程に浮ぶ。

こゝに文學あり、美術あり、政治あり、而して此處に宗教ありて神を説く。或は無常を説く。要するに紛々として我等を繞る者、我等が肉となり情となり、生命となり、而して首尾よく社會生存の實を擧ぐ。

社會生存とは何ぞや、余の術語なり。億萬の人、其生存を自覺せりと云ふ、そは社會に於ける生存のみ。山を下れば社會あり。天地生存を自覺せる余も、社會に入ること分秒、忽然として社會の一員となり了しぬ。而も遂に我靈を震動したる痛烈なる感想を忘るゝ能はざるが故に苦惱する余は悲惨なるかな。

〔六〕

君子と共に野を散歩す。岡に上り、林に入りて坐す。鮮なる秋の日影、樹間より洩れて君子が肩に點々たり。二人は語りて時の移るを知らざりき、妙なる香氣ありて君子が身を包むが如く覺えぬ。この少時、われは世を忘れ、天地を忘れ、我をすら忘れたる、これ何故ぞや。

斯くて又た少時、われ卒然眼を轉じて四邊を視たり、あゝ何の力ぞ、我は此刹那に於て君子を忘れ、一切を没了して、たゞ夫れ天地悠々、我が生の此無窮なる空間に繋かれるを感じ、堪へ難き哀愁泉の如く湧きぬ。

〔七〕

町なる教會に行く。小さき建物なれども尙ほ百人を容るには餘りあるべし。信者の集會三十名ばかり。都會の教會とは異なり、年若き男女は數名に過ぎず、多くは中年以上の人々にて、小兒も加れり。

傳道師なる尾間利雄と語る。快活多辯、愉快なる人物なり。彼は我家をも訪ふべく約しぬ。神よ、願くは我をも謙遜なる信者の中に加へ給へ。我が苦惱を柔げ給へ。あゝ在さざるところなき神よ、無窮を統べ給ふ神よ、常に此生の泡沫の如きを感じて、容易く永久の生命を信ずる能はざる我をも憐れみ給へ。人類ありて以來、幾千億萬の我々が祖先今何處にありや、あゝ神よ、時の不思議なる謎を示し給へ。

丘の麓に民家ありて其屋根よりは青烟の立登るを見る、其裏には父あり母あり妻子あり、彼等は朝な朝な起き出で野に耕し夕は團欒して談笑す、屋後に墓地ありて月明の底に眠れり。あゝ神よ、これ我には大なる謎なるかな、哀しき謎なるかな。あゝ神よ、我も亦た彼等と共に人情哀樂の泉を汲んで此生を安んず可き乎。

〔八〕

尾間利雄来る、談論す。君子傍らに在りて聴く。尾間曰く、君は愛を疑はざる可し。既に愛を疑はずんば神の愛、基督の愛を信ずるに於て異存のあるべき筈なしと論鋒頗る鋭利なり。我一々うなづきぬ。尾間は轉じて君子に向ひ、諄々として天に在ます父の愛を説き、永生を説き、人の罪を説きたり。更に天國を説き地獄を説きぬ。而して曰く永遠の亡、これ地獄なりと。君子の心動きたりと覺し。

われは明言す、斯る傳道は『虚偽』なりと。あゝ天とは何ぞや、命とは何ぞや、亡とは何ぞや。形容詞を止めよ、説教を止めよ、自己を宇宙の外に置き、神と人と其處に並べて鑛物の見本を説明す

るが如くに宗教を説く勿れ。理學士も熱心に語るなり。爾の熱心を誇る勿れ。眞面目を誇る勿れ、眞面目といふ心持は大して價值あるものに非ざるなり。心的現象の一に過ぎず、人は木片をも大眞面目に信ずるもの也。

神の有無を言ふ勿れ。『人』なる言葉を止めよ、爾先づ生物の一個として面と面、直ちに此無窮なる宇宙に對し、爾の生命其者の存在を直感せよ。されど之れも亦た余が説教にあらざるか。

〔九〕

人は世間から生れ出て世間の中に葬られて了ふのではない、天地から生れて天地に葬られるのである。世間には人々相集合して成立つ形のない者、人とは物質、此物質は此大なる自然てふ物質の一部分である。これほど簡単な事實はないので、小學校の生徒も知つて居ることである。然るに不思議にも人は此事實を忘れてしまひ、成長するに従ひ、たゞ世間ばかり對手に生きて居る、世間を對手に或は泣き、或は笑ひ、そして一生涯を送つてしまふ。そしてヒョククリ死んで了ひ、彼が全く忘却して對手にも爲なかつた自然の中に消滅して了ふ。

凡て人間界の不思議中、これほどの不思議はないのである。さういふ私もやはり其お仲間なので、四六時中、夢にも現にも私の心を動かして居るものゝ九分九厘は世間である。

ところが、昨夜のことであつた、私はフト眞夜中に眼が覺めた。夢も見ない熟睡の中から覺めた。一

室は仄暗く、あたりは森として居る。此時、私の心に電のやうに閃いて來た一思想があつた、思想といはうか、感情といはうか、將た現象と言はうか、心理學者の分類するところの知情意の何れに屬すべきものたるを私は知らない。

『ア、不思議！ 此處は何處だ、宇宙だ、自分は此大宇宙の一部分だ、生命よ、生命よ、此生命は此宇宙の呼吸である。』

たゞ斯う言へば言葉の連続に過ぎないが然し、私の感じたことは到底如何なる言葉を以てしても現はすことが出来ない。此畏しき心の現象が閃いた時、其時實は私自身の存在を感じたのである。世間に於ける自己ではない、利害得喪、是非善惡の爲めに心を悩す自己ではない、文學とか宗教とか政治とか、はた倫理とかいふ題目に思を焦す自己ではない。又た親子の愛、男女の戀に熱き涙を流す自己でもない。たゞ夫れ一個の生物たる我的存在、此宇宙に於ける存在を感じたのである。

然し忽ちにして此心の現象は消えて了つた、恰度闇に閃く電光が忽然として又た闇に消えて了ふやうに、私は再びこれを呼び返さうと力めて見たがだめであつた。

しかしながら此時私は沁々と感じた、『さて〜人間とは不思議なものである。生命とは不思議なものである、』と。

以上の如く君子に語りたれども、たゞ首肯けるのみ、さして異なりたる感を起したる様も見えざりき。神を説くは易し、神を求めずんば止む能はざるの境に人心を導くことは難し、尾間の言は解し易く、

我が語るところの經驗は、經驗ありし其人にあらずんば遂に解す可からざる乎。

〔十〕

鬼あり、黒き翼を振つて我室に現はれぬ。聲荒かに曰ふ、『來れ！ 爾に見すべきものあり。』彼に尾して飛びゆくに其道程を知らず。鬼曰く、『見よ！ 爾彼等を知るか。』と。黒闇々の裡、色彩鮮明に現はるる二個の人物あり。一は尾間利雄、一は君子！

『爾、彼等を知るか。』鬼は冷かに問ひぬ。

『知れり。一は傳道師尾間利雄。一は少女君子。』

『見よ、彼等さも陸じき様ならずや。』

『然り、互に寄り添うて歩むなり。』我が聲は慄ひぬ。

『見よ、彼等相抱きぬ。』と鬼は私語り。我は顔を背けて見ざらんと欲して能はず。鬼は晒ひて、

『何ぞ正視せざる？ 彼等は樂しげなり。』

『然り樂しげなり、されど我は多く見ること好まざるなり。』

『何故ぞや。花の咲ける、鳥の囀づる、男女の相親しむ。みな自然の女神の織りなす綾のみ。怪しむに足らざるなり。』

『然り、然り、爾の言ふところの如し。』

『然も爾の顔に苦痛の色あるは何ぞや。』と鬼は苦笑して問ひぬ。

『女の愚なるを憐れむなり。』と我が聲は激しぬ。

『欺く勿れ、自ら欺く勿れ。愚なる女を爾は何が故に戀ひたる。』

『あゝ我戀ひせしか、戀とは何ぞや。』

『戀とは爾が今、彼の少女の上に注ぐ心の様の如きを言ふなり。戀とは唯だかくの如きのみ。』

『我は彼女を惡む。』

『則ち戀のみ。戀は惡み、恨み、憤ることを教ふ。爾も亦た其奴のみ。……見よ、見よ、彼等も戀の奴なり、されど彼等は樂しげなり、幸福なり、爾これを祝せざるか。』

余は口言ふ能はず、たゞ眼を張つて闇黒裡に旋轉する二個の幻影を見るのみ。彼等は聲高らかに得意の讚美歌を歌ひつゝ互に手を執つて胡蝶の如く舞ひ、落花の如く飄へり、翩々として上天杳に上りゆくなり。

鬼は喜ばしげに叫んで曰く、『あゝ爾等永久に幸福なれ。神の御前に爾等の戀を遂げよ！』

『惡魔！ 惡魔！』と我が血は沸き、我が眼背は裂け、我が聲は嘎れつ、直に無限の闇の底深く身を躍らせば、飄々蕩々として窮まるところを知らず、火光矢の如く身邊を掠めて飛ぶこと無數、泣く聲、叫ぶ聲、遠くして哀笛の如きもの身を繞りて聞ゆ。夢にあらず、現にあらず。

〔十一〕

布浦武雄と相親しむこと益々深し。君子は町なる教會に通ふこと度重なり、尾間利雄は余が許に來る

毎に必ず君子を訪ひ、時として君子をのみ訪ふことあり。武雄は尾間をよるこぼざるが如し。

武雄と尾間が問答こそ面白けれ。武雄曰く、『君は女の信者を作ることゝ、男の信者を作ることゝ何れを難しとし給ふや。』

尾間は眞面目になりて『それは同じことなり。等しく人なる以上は神のこれを召し給ふに何の差別あらん。』

『神の召し給ふには差別なかるべし。されど等しく人形を作るにも男形と女形とは勞力に於いて甚だしく差ありと聞く、信者を作る亦た此類ならずや。』

尾間は益々眞面目になりて、『我等を人形造に喩へ給ふこと苦しからず、基督は自身を牧者に喩へ給ひしことすらあり。故に君が問に答へん、女は男に比ぶれば心直にして教を納れ道に順ひ易し、男はこれに反す、されば女の信者を作るは甚だ易きことなり。』

『且つ甚だ樂しきことなるが如く見ゆ、如何。』と問はれて尾間は大聲に笑ひ、『左なり、左なり、大に樂しきものなり。』と言ひ放ちて意に介せざる様なりし。

〔十二〕

惡魔あり、私語いて曰く『何故に爾は自殺する能はざるか。自殺の罪惡説は爾の冷笑する處ならずや。爾は罪惡説の故を以て自殺せざるには非ず、自覺せよ。』

爾に希望ある乎。曰く無し。爾に平和あるか。曰く無し。爾の有するところは唯だ苦惱のみ。千萬人

の中の一人も経験することなき苦惱のみ。爾は咀はれつゝあるなり。爾は宗教を以て満足せず、爾は花の美、月の光を以て満足せず、爾は實に人の力を以てしては遂げ難きものを追はんと悶くなり。今や爾は何事を以てするも興味を感ぜざる也。然らば何故に自殺せざるか。死は萬事休する最後の平和に非ずや。平和、然らずんば空。

此處に一個鋭利なる小刀あり爾の爲めに特に用意し置きたるなり。以て胸を刺すに足る。

イザ一舉手のこと！ 十分に或は五分間にして足る。僅かに五分間の苦痛！

爾が父母、兄弟、朋友、總て爾の一度見し處の人、見ざる億萬人、すべて後より爾を追ひゆくべし。

彼等も終には爾と等しかるべし。數年若くは數十年の遅速のみ。

イザ小刀こゝにあり、何故に躊躇ふか。一舉手の事、五分間にして足る、五分間、三分間！

見よ、爾の崇拜する古英雄、古聖人、爾の親しかりし朋友某等、皆な死の國の民ならずや。死の國には友多し、彼もあり、彼もあり。

一舉手のこと！ 何故にためらふか。嗚呼、爾はたゞ空しくためらふのみ、其理由を解せざるなり。

若し理由ありとすれば一個、僅に爾を憤激せしむるものあり、曰く自殺は薄弱の行爲なり、平和を得ずんば得るまで戦へ、信仰なくんば信仰を得るまで苦戦せよ。自殺は薄弱の行爲なりと。

されど爾は已に此憤激を用ふること餘りに數々、最早爾を立たしむるの弾力なきまでに使ひたり。

欺く勿れ、爾は未だ眞面目ならぬなり。自殺をも爲し得ず、希望もなく平和もなし。爾は憐れの男な

り、あ、爾は世にも憐れなる一人なり。死か生か、其一を正しく選ぶ能はず、獸の如く生くことすら能はず、たゞ苦惱のみ、名け難き苦惱の兒のみ。たゞ肉體を古びたる衣の如く纏ひつゝ戦慄す、吐血す。われ靜に答へて曰く——『自殺して終に如何。生と死と何の相違ぞ。宇宙はあらゆる法則なり。死するも生くるも我等この法則の外に脱がるゝ能はず。死は吾等を選びて宇宙の外に持去るかの感想を懐くことは、自殺者及び死を輕視する者の總ての誤謬ならずや。』

われ此處に嚴存す。宇宙は全體なり、あゝ我れ此存在を如何すべき。死するも生くるも遂に此存在の

事實は人の力もて打消し能ふべきに非ず。在るものは如何してもあるなり。あゝ我、不思議なるかな。』

悪魔笑つて曰く——『いみじくも言へるもの哉。爾は終に苦惱の兒なり。死の存在を得るに若かず、

死の法則に順ふに若かず。』

〔十三〕

戀よ、戀よ、われ戀を欲す。少女の香に打たるゝ時、己が惱める魂は安を得るなり。君子と偕に在る

ときは、限り知らぬ樂しさを覺ゆ。

されど君子は余を憎からず思ふのみ、寧ろ彼の尾間利雄を戀ひつゝあり。

〔十四〕

悪 武雄と語る。余曰く——『若し冷やかなる言葉を以てすれば我等が選ぶ可きは二者の一のみ。曰く天地に大道存し、大道は神より出で、人は之を信じて、愛と美とを永久の眞と信ずること。曰く天地はた

運

だ盲動の暗黒のみ、人は愚と悪との肉塊のみ、美とは空名のみ、愛とは動物の發作のみ、空より生じて空に消ゆべきのみ。

命

此二者のみ、光若くは暗。されど奇怪なるは我等が心の立場なり。二者の一をも信ずる能はず。確信する能はず。確信の實を擧ぐる能はず。

道路二岐に分る、我等が足其分點に立つ。右すべき乎。左すべき乎。右すべくんば右し、左すべくんば左す、決する能はずんば躊躇す。凡て此等の行爲は極めて明白なり。

然るに天地人生の意義を思ふ時に於て、人の心も奇怪なるかな、光明か暗黒か、其一を選ぶべくして選ばず、躊躇し苦悶すべくして然らず、平然として談笑論議す。

懸崖の上を歩む時、深淵眼下に蒼たり、路帯よりも細し、心期せずして戦く、足自ら慄ふ。光と暗とを界する危道に立ちて我等が心の平然たるは何故ぞ。

要するに吾等の心は光明と暗黒とを選ぶべき必然の地位に立たざるなり。習慣と傳説の底に住みて日より日と動物的生命を驅りつゝあるのみ。斯くて尙ほ善といひ悪といひ神といふも終に盡しき言葉ならんのみ。

所謂る宗教を説き信仰を叫ぶ者、此類ならぬは殆んど稀なり。基督が十字架の苦を説く前に、荒野の苦悶を解せざる可からず。基督は十字架に依つて尊し、されど荒野の苦悶ありて基督ありしなり。

吾等は先づ正直に我等が心の今の立場を明めざる可からず。『求めよ、然らば與へられん。』果して然ら

ば先づ求めよ、されど求むるに先立つて求むるの心を求めざる可からず。』

〔十五〕

武雄と共に淨瑠璃の先生を訪ふ。先生の名は虎三。三十に近き壯夫なり。赤顔の脊高き男。

丘を越えて行けば藪の小蔭に茅屋あり、冬の夜の闇を破りて障子に映る火影のゆらぐを見る。裡に入れば土間に築きし竈の下熾に燃えて、其傍に蹲居りたるは虎三なり。我等の入來るを見て起たんともせず、手を火にかざしたるまゝ顔を向け、『此寒いのによくこそ』

余は武雄が就いて學ぶところを聴き、更に虎三のみが語る一段を聴きぬ。彼の肉聲の一高一低、嗚咽ぶが如きとき、忽ちさら／＼と音して屋外に訪ふものあり。暫くして止みぬ。一室の中たゞ朗々の聲、痛哀の調を聞くのみ。

辭して戸外に出づれば、飛ぶが如き雲間より月現はれ、過ぎゆきし霞の跡白く狭き山路を隈れり。武雄は今夜學びしところを歌ひつゝゆく。

岡の頂に達す。見渡せば近郊の田園樹林、塞き月影に沈み、天外の清光霜を帯ぶ。二人は暫く立つとけ居たりしが、此時、言ひ難き哀感と共に我知らず落涙す。

『何が故に落涙したまふ。』と武雄問ひぬ。

『この如き時、涙を禁じ能はざるもの余のみには非ず。たゞ夫れ月明の清きを哀むといはんか、あらず、君の歌ふを聞き、其聲の呼えて山彦に響くを聞き、山を見、林を見、仰いで千古の月明に對し、窮りな

悪

魔

き大空を望むとき、人情と自然との幽なれど絶えざる約束を感じざるを得ず、これを以て泣くなり。君は曾て、旅して遠く笛の音を聞きしことありと言ひたまひぬ。余も亦たこれを聞きぬ、而して今夜に等しき哀感に打たれぬ。この如きは其他に數々余の経験せしところ。あゝ余が存在の不思議にまどひつつも猶ほ僅に堪へ忍び得るは全く此哀感の故のみなり。時の羽風耳邊を掠めて飛び、此生の泡沫の如く、人類の運命の遂に果敢きを感じて銷魂する時も、僅に此哀感の力にて我が心は幽かながらも永遠の命の俤に觸れ得るなり。』

九

浅海謙輔の『悪魔』は大概以上の如きものであつた。自分はこれを君子に示さうかとも思つたが、要するに無益のことと思ひ止つたのである。

君子は初め自分を愛して居たが、然しそれは所謂從兄妹の戀で言ふに足りない。謙輔が來てから、君子の心は大に傾き、自分は確に二人の戀の成立べきを思つた。けれども謙輔は君子に取つて餘り大きな謎語であつた。謙輔の言葉は決して甘つたるくなかつた。

其處へ現はれたのが尾間利雄である。利雄は熱心に君子を説き、神の愛を囁んで含めて聽した。得意の讚美歌を以て君子の心を動かした。そして二人は殆んど戀の底に沈まうと爲たのである。

浅海が去るや、自分は叔母を説いて君子を自分の友なる隣村の青年に嫁がしめた。君子は愛の自由を説いて、此結婚に反對した時、叔母の驚愕は尋常でなかつたのである。何時の間に君子が斯る主張を公

言するやうになつたのか、殆んど寢耳に水の感があつたらしい。

けれども兎も角も君子は遂に自分の友の許に嫁いで了つた。そして間もなく尾間は轉任して我郷里を離れた。

* * * * *

君子には今、一人の兒が出來て、頗る平和に暮して居る。神の愛は忘れて了つたらしい。耶穌教の耶の字も今はなくなつた。自分がをりく浅海謙輔のことを話すと、彼の頃は面白かつたとのみ。

言ふことを忘れて居たが、謙輔の父母は謙輔が去つて後、半年目で他に轉任したのである。それで謙輔は其後遂に一度も我山林に來ないのである。恐らく永遠に來ないだらう。

尾間は相變らず神の愛を説いて居ることだらう。謙輔は今も『悪魔』を筆にしつゝあるや如何に。

畫の悲み

畫を好かぬ子供は先づ少ないとして其中にも自分は子供の時、何よりも畫が好きであつた。(と岡本某が語り出した。)

好きこそ物の上手とやらで、自分も他の學課の中畫では同級生の中自分に及ぶものがない。畫と數學となら、憚りながら誰でも來いなんて、自分も大に得意がつて居たのである。しかし得意といふことは多少競争を意味する。自分の畫の好きなことは全く天性といつても可からう、自分を獨で置けば畫ばかり書いて居たものだ。

獨で畫を書いて居るといへば至極温順しく聞えるが、其辯自分ほど腕白者は同級生の中にならばか、校長が持て餘して數々退校を以て嚇したのでも全校第一といふことが分る。

全校第一腕白でも數學でも。しかるに天性好きな畫では全校第一の名譽を志村といふ少年に奪はれて居た。この少年は數學は勿論、其他の學力も全校生徒中、第二流以下であるが、畫の天才に至つては全く並ぶものがないので、僅に疊を摩さうかとも言はれる者は自分一人、其他は悉く志村の天才を崇め奉つて居るばかりであつた。所が自分は志村を崇拜しない、今に見るといふ意氣込で頻りと睨んで居た。

元來志村は自分よりか歳も兄、級も一年上であつたが、自分は學力優等といふので自分の居る級と志

村の居る級とを同時にやるべく校長から特別の處置をせられるので、自然志村は自分の競争者となつて居た。

然るに全校の人氣、校長教員を始め何百の生徒の人氣は、温順しい志村に傾いて居る。志村は色の白い柔和な、女にして見たいやうな少年、自分は美少年ではあつたが、亂暴な傲慢、喧嘩好きの少年、おまけに何時も級の一番を占めて居て、試験の時は必らず最優等の成績を得る處から、教員は自分の高慢が癢に觸り、生徒も自分の壓制が癢に觸り、自分にはどうしても人氣が薄い。そこで衆人の心持は、せめて畫でなりと志村を第一として、岡本の鼻柱を挫いてやれといふ積であつた。自分はよく此消息を解して居た。そして心中ひそかに不平でならぬのは、志村の畫必ずしも能く出來て居ない時でも校長をはじめ衆人がこれを激賞し、自分の畫は確かに上出來であつても、さまで賞めて呉れ手のないことである。少年ながらも自分は人氣といふものを悪んで居た。

或日學校で生徒の製作物の展覽會が開かれた。其出品は主に習字、圖畫、女子は仕立物等で、生徒の父兄姉妹は朝からぞろぞろと押かける。取りどりの評判。製作物を出した生徒の氣が氣でない、皆なそはそはしく展覽室を出たり入つたりして居る。自分も此展覽會に出品する積りで畫紙一枚に大きく馬の頭を書いた。馬の顔を斜に見た處で、無論少年の手には餘る畫題であるのを、自分は此一舉に由つて是非志村に打克たうといふ意氣込だから一生懸命、學校から宅に歸ると一室に籠つて書く、手本を本にして生意氣にも實物の寫生を試み、幸ひ自分の宅から一丁ばかり離れた桑園の中に借馬屋があるので、幾度

となく其處の厩に通つた。輪郭といひ、陰影と云ひ、運筆といひ自分は確にこれまで自分の書いたものは勿論、志村が書いたものゝ中でこれに比ぶべき出来はないと自信して、これならば必ず志村に勝つ、いかに不公平な教員や生徒でも、今度こそは自分の實力に壓倒さるゝだらうと、大勝利を豫期して出品した。

出品の製作は皆んな自宅を書くのだから、何人も誰が何を書くのか知らない、又互に祕密にして居た。殊に志村と自分は互の畫題を最も祕密にして知らさないようにして居た。であるから自分は馬を書きながら、志村は何を書いて居るかといふ問を常に懐いて居たのである。

さて展覽會の當日、恐らく全校數百の生徒中尤も胸を轟かして、展覽室に入つた者は自分であらう。圖畫室は既に生徒及び生徒の父兄姉妹で充滿になつて居る。そして二枚の大畫(今日の所謂大作)が並べて掲げてある前は最も見物人が集つて居る。二枚の大畫は言はずとも志村の作と自分の作。

一見自分は先づ荒膽を抜かれてしまつた。志村の畫題はコロンプスの肖像ならんとは！ 而もチョークで書いてある。元來學校では鉛筆畫ばかりで、チョーク畫は教へない。自分もチョークで畫くなど思ひもつかんことであるから、畫の善悪は兎も角、先づ此一事で自分は驚いてしまつた。その上ならず馬の頭と鬚髯面を被ふ堂々たるコロンプスの肖像とは、一見まるで比べ者にならんのである。且つ鉛筆の色はどんなに巧みに書いても到底チョークの色には及ばない。畫題といひ色彩といひ、自分の要するに少年が書いた畫、志村のは本物である。技術の巧拙は問ふ處でない、掲げて以て衆人の展覽に供すべ

き製作としては、いかに我慢強い自分も自分の方が佳いとは言へなかつた。さなきだに志村崇拜の連中は、これを見て歡呼して居る。『馬も佳いがコロンプスは如何だ！』などいふ聲が彼處でも此處でもする。自分は學校の門を走り出た。そして家には歸らず、直ぐ田圃へ出た。止めようと思つても涙が止まらない。口惜しいやら情ないやら、前後夢中で川の岸まで走つて、川原の草の中に打倒れてしまつた。足をばたばたやつて大聲を上げて泣いて、それで飽き足らず起上つて其處らの石を拾ひ、四方八方に投げ附けて居た。

から暴れて居るうちにも自分は、彼奴何時の間にチョーク畫を習つたらう、何人が彼奴に教へたらうと其ればかり思ひ續けた。

泣いたのと暴れたので幾干か胸がすくと共に、次第に疲れて來たので、いつか其處に臥てしまひ、自分は蒼々たる大空を見上げて居ると、川瀬の音が滌々として聞える。若草を薙いで來る風が、得ならぬ春の香を送つて面を掠める。佳い心持になつて、自分は暫時じつとして居たが、突然、さうだ、自分もチョークで畫いて見よう、さうだといふ一念に打たれたので、其儘飛び起き急いで宅に歸り、父の許を得て、直ぐチョークを買ひ整へ、畫板を提げて直ぐ又外に飛び出した。

この時まで自分はチョークを持つたことが無い。どういふ風に書くものやら全然不案内であつたがチョークで書いた畫を見たことは度々あり、たゞこれまで自分で書かないのは到底未だ自分どもの力に及ばぬものとあきらめて居たからなので、志村がああ位の書けるなら、自分も幾干か出来るだらうと思

つたのである。

再び先の川邊へ出た。そして先づ自分の思ひついた畫題は水車、この水車は其以前鉛筆で書いたことがあるので、チョークの手始めに今一度これを寫生してやらうと、堤を辿つて上流の方へと、足を向けた。

水車は川向にあつて其古めかしい處、木立の繁みに半ば被はれて居る案排、蔦葛が這ひ纏うて居る具合、少年心にも面白い畫題と心得て居たのである。これを對岸から寫すので、自分は堤を下りて川原の草原に出ると、今まで川楊の蔭で見えなかつたが、一人の少年が草の中に坐つて頻りに水車を寫生して居るのを見つけた。自分と少年とは四五十間隔たつて居たが、自分は一見して志村であることを知つた。彼は一心になつて居るので、自分の近づいたのにも氣もつかぬらしかつた。

おや、彼奴が来て居る、どうして彼奴は自分の先へ〜と廻るだらう、忌々しい奴だと、大に癢に觸つたが、さりとして引返すのは猶ほ嫌だし、如何して呉れやうと、其儘突立つて、志村の方を見て居た。

彼は熱心に書いて居る草の上に腰から上が出て、其立てた際に畫板が寄掛けてある。そして川楊の影が後から彼の全身を被ひ、たゞ其白い顔の邊から肩先へかけて楊を洩れた薄い光が穩かに落ちて居る。これは面白い、彼奴を寫してやらうと、自分は其儘其處に腰を下して、志村其人の寫生に取りかゝつた。それでも感心なことには、畫板に向ふと最早志村もいま〜しい奴など思ふ心は消えて書く方に全く心を奪られてしまつた。

彼は頭を上げては水車を見、又畫板に向ふ、そして折り〜左も愉快らしい微笑を頬に浮べて居た。彼が微笑する毎に、自分も我知らず微笑せざるを得なかつた。

さうする中に、志村は突然起ち上がった、其拍子に自分の方を向いた。そして何とも言ひ難き柔和な顔をして、につこりと笑つた。自分も思はず笑つた。

『君は何を書いて居るのだ。』と聞くから、

『君を寫生して居るのだ。』

『僕は最早水車を書いてしまつたよ。』

『さうか、僕は未だ出来ないのだ。』

『さうか。』と言つて志村は其儘再び腰を下し、もとの姿勢になつて、

『書き給へ、僕は其間にこれを直すから。』

自分は畫き初めたが、畫いて居るうち、彼を忌々しいと思つた心は全く消えてしまひ、却つて彼が可愛くなつて來た。其うちに書き終つたので、

『出來た、出來た！』と叫ぶと、志村は自分の傍に來り、

『おや、君はチョークで書いたね。』

『初めてだから全然畫にならん、君はチョーク畫を誰に習つた。』

『そら先達東京から歸つて來た奥野さんに習つた、然し未だ習ひたてだから何にも書けない。』
『コロンブスは佳く出来て居たね、僕は驚いちやつた。』

それから二人は連立つて學校へ行つた。此以後自分と志村は全く仲が善くなり、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた元來が温順しい少年であるから、自分を又無き朋友として親しんで呉れた。二人で畫板を携へ野山を寫生して歩いたことも幾度か知れない。

間もなく自分も志村も中學校に入ることとなり、故郷の村落を離れて、縣の中央なる某町に寄留することとなつた。中學に入つても二人は畫を描くことを何よりの楽しみにして、以前と同じく相伴うて寫生に出掛けて居た。

此某町から我村落まで七里、若し車道をゆけば十三里の大迂廻になるので我々は中學校の寄宿舎から村落に歸る時、決して車に乗らず、夏と冬と定期休業毎に必ず、此七里の途を草鞋がけて歩いたものである。

七里の途はたゞ山ばかり、坂あり、谷あり、溪流あり、淵あり、瀧あり、村落あり、兒童あり、林あり、森あり、寄宿舎の門を朝早く出て日の暮に家に着くまでの間、自分は此等の形、色、光、趣きを如何いふ風に畫いたら、自分の心を夢のやうに鎖して居る謎を解くことが出来るかと、そのみに心を奪られて歩いた。志村も同じ心、後になり先になり、二人で歩いて居ると、時々は路傍に腰を下して鉛筆の寫生を試み、彼が起たずば我も起たず、我筆をやめずんば彼も止めないと云ふ風で、思はず時が経ち

驚いて、二人とも、次の一里を駈足で飛んだこともあつた。

爾來數年、志村は故ありて中學校を退いて村落に歸り、自分は國を去つて東京に遊學することとなり、いつしか二人の間には音信もなくなつて、忽ち又四五年経つてしまつた。東京に出てから、自分は畫を思ひつゝも畫を自ら書かなくなり、たゞ都會の大家の名作を見て、僅に自分の畫心を満足さして居たのである。

處が自分の二十の時であつた、久しぶりで故郷の村落に歸つた。宅の物置に曾て自分が持ちあつた畫板が有つたのを見つけ、同時に志村のことを思ひだしたので、早速人に聞いて見ると、驚くまいことか彼は十七の歳病死したとのことである。

自分は久しぶりで畫板と鉛筆とを提げて家を出た。故郷の風景は舊の通りである、然し自分は最早以前の少年ではない、自分はたゞ幾歳かの年を増したばかりでなく、幸か不幸か、人生の問題になやまされ生死の問題に深入りし、等しく自然に對しても以前の心とは全く趣を變へて居たのである。言ひ難き暗愁は暫時も自分を安めない。

時は夏の最中自分はたゞ畫板を提げたといふばかり、何を書いても見る氣にもならん、獨りぶらぶらと野末に出た。曾て志村と共に能く寫生に出た野末に。

闇にも歡びあり、光にも悲みあり、麥藁帽の脰を傾けて、彼方の丘、此方の林を望めば、まじくとも照る日に輝いて眩ゆきばかりの景色、自分は思はず泣いた。

空知川の岸邊

余が札幌に滞在したのは五日間である、僅に五日間ではあるが、余は此間に北海道を愛するの情を幾倍したのである。

我國本土の中でも中國の如き、人口稠密の地に成長して山をも野をも人間の力で平げ盡したる光景を見慣れたる余にありては、東北の原野すら既に我自然に歸したるの情を動かしたるに、北海道を見るに及びて、如何で心躍らざらん、札幌は北海道の東京でありながら、満目の光景は殆んど余を驚し去つたのである。

札幌を出發して單身空知川の沿岸に向つたのは、九月二十五日の朝で、東京ならば猶ほ殘暑の候でありながら、余が此時の服装は冬着の洋服なりしを思はゞ、此地の秋既に老いて木枯の冬の間近に迫つて居ることが知れるのであらう。

目的は空知川の沿岸を調査しつゝある道廳の官吏に會つて土地の選定を相談することである。然るに余は全く地理に暗いのである。且つ道廳の官吏は果して沿岸何れの邊に屯して居るか、札幌の知人何人も知らないである、心細くも余は空知太を指して汽車に搭じた。

石狩の野は雲低く迷ひて車窓より眺むれば野にも山にも恐ろしき自然の力あふれ、此處に愛なく情なく、見るとして荒涼、寂寞、冷厳にして且つ壯大なる光景は、恰も人間の無力と儂さを冷笑ふが如く見えた。

蒼白なる顔を外套の襟に埋めて車窓の一隅に黙然と坐して居る一青年を同室の人々は何と見たらう。人々の話柄は作物である、山林である、土地である、此無限の富源より如何にして黄金を掴み出すべきかである。彼等の或者は罇詰の酒を傾けて高論し、或者は煙草をくゆらして談笑して居る。そして彼等の多くは車中で初めて遇つたのである。そして一青年は彼等の仲間に加はらずたゞ一人其孤獨を守つて、獨り其空想に沈んで居るのである。彼は如何にして社會に住むべきかといふことは全然其思考の問題としたことがない、彼はたゞ何時も何時も如何にして此天地間に此生を託すべきかといふことをのみ思ひ悩んで居た。であるから彼には同室の人々を見ること殆んど他界の者を見るが如く、彼と人々との間には越ゆ可からざる深谷の横はることを感ぜざるを得なかつたので、今しも汽車が同じ列車に人々及び彼を乗せて石狩の野を突過してゆくことは、恰度彼の一生のそれと同じやうに思はれたのである。あゝ孤獨よ！彼は自ら求めて社會の外を歩みながらも、衷心實に孤獨の感に堪へなかつた。

若し夫れ天高く澄みて秋晴拭ふが如き日であつたならば、余が鬱屈も大にくつろぎを得たらうけれど雲は益々低く垂れ林は霧に包まれ、何處を見ても光一閃だもないので、余は殆ど堪ふべからざる憂愁に沈んだのである。

汽車の歌志内の炭山に分る、某停車場に着くや、車中の大半は其處で乗換へたので、残るは余の外に二人あるのみ。原始時代そのまま幾千年人の足跡をとどめざる大森林を穿つて列車は一直線に走る。灰色の霧の一團又一團、忽ち現はれ忽ち消え、或は命あるもの、如く黙々として浮動して居る。『何處までお出でですか。』と突然一人の男が余に聲をかけた。年輩四十幾干、骨格の逞しい、頭髮の長生た、四角な顔、鋭い眼、大なる鼻、一見一癖あるべき人物で、其風俗は官吏に非ず職人にあらず、百姓にあらず、商人にあらず、實に北海道にして始めて見るべき種類の者らしい、則ち何れの未開地にも必ず先づ最も跋扈する山師らしい。

『空知太まで行く積りです。』

『道廳の御用で？』彼は余を北海道廳の小役人と見たのである。

『イヤ僕は土地を選定に出掛けるのです。』

『ハハア。空知太は何處等を御選定か知らんが、最早目星いところは無いやうですよ。』

『如何でせう、空知太から空知川の沿岸に出られるでせうか。』

『それは出られませうとも、然し空知川の沿岸の何處等ですか、其が判然しないと……』

『和歌山縣の移民團體が居る處で、道廳の官吏が二人出張して居る、其處へ行くのですがね、兎も角も空知太まで行つて聞いて見る積りで居るのです。』

『さうですか、それでは空知太にお出になつたら三浦屋といふ旅人宿へ上つて御覽なさい、其處の主人

がさういふことに明るう御座いますから聞いて御覽なつたら可うがす、どうも未だ道路が開けないので、一寸其處までの處でも大變大廻りを爲なければならんやうなことが有つて慣れないものには困ることが多うがすテ。』

それより彼は、開墾の困難なことや、土地に由つて困難の非常に相違することや、交通不便の爲めに折角の收穫も容易に市場に持出すことが出来ぬことや、小作人を使ふ方法などに就いて色々と話し出した。其等の事は余も札幌の諸友から聞いては居たが、彼の語るがまゝに受けて唯だ其好意を謝するのみであつた。

間もなく汽車は蕭條たる一驛に着いて運轉を止めたので余も下りると、此列車より出た客は總體で二十人位に過ぎざるを見た、汽車は此處より引返すのである。

たゞ見る此一小驛は森林に囲まれて居る一の孤島である。停車場に附屬する處の二三の家屋の外人間に縁ある者は何も無い。長く響いた汽笛が森林に反響して脈々として遠く消え去せた時、寂然として言ふ可からざる静けさに此孤島は還つた。

三輛の乗合馬車が待つて居る。人は黙々としてこれに乗り移つた。余も先の同車の男と共に其一に乗つた。

北海道馬の驪馬に等しきが二頭、逞しき若者が一人、六人の客を乗せて何處へともなく走り初めた。余は『何處へともなく』といふの心持が爲たのである。實に我が行先は何處で、自ら問うて自ら答へるこ

とが出来なかつたのである。

三輛の馬車は相隔つる一町ばかり、余の馬車は殿に居たので、前に進む馬車の一高一低、凹凸多き道を走つて行く様子が能く見える。霧は林を掠めて飛び、道を横つて又た林に入り、眞紅に染つた木の葉は枝を離れて二片三片馬車を追うて舞ふ。御者は一鞭強く加へて、

『最早降るぞ！』と叫んだ。

『三浦屋の前で止めてお呉れ！』と先の男は叫んで余を顧みた。余は目禮して其好意を謝した。車中何人も一語を發しないで、皆な屈託な顔をして物思に沈んで居る。御者は今一度強く鞭を加へて喇叭を吹き立てたので、軀は小なれども強力なる北海の健兒は大駈に駈けだした。

林がやゝ開けて殖民の小屋が一軒二軒と現れて來たかと思ふと、突然平野に出た。幅廣き道路の兩側に商家らしきが飛びくゞに並んで居る様は、新開地の市街たるを欺かない。馬車は喇叭の音勇ましく此間を駈けた。

二

三浦屋に着くや早速主人を呼んで、空知川の沿岸にゆくべき方法を問ひ、詳しく目的を話して見た。處が主人は寧ろ引返へして歌志内に廻はり、歌志内より山越えした方が便利だらうといふ。

『次の汽車なら日の暮までには歌志内に着きますから今夜は歌志内で一泊なされて、明日能くお聞合せになつて其上でお出かけになつたが可うがす。歌志内なら此處とは違つて道廳の方も居ますから、其井

田さんとかいふ方の今居る處も多分解るでせう。』

斯ういはれて見ると成程さうである。されども余は空知川の岸に沿うて進まば、余が會はんとする道廳の官吏井田某の居所を知るに最も便ならんと信じて、空知太まで來たのである。然るに空知太より空知川の岸をつたふことは案内者なくては出來ぬとのこと、而も其道らしき道の開け居るには在らずとの事を、三浦屋の主人より初めて聞いたのである。其處で余は主人の注意に従ひ、歌志内に廻はることに定めて、次の汽車まで二時以上を、三浦屋の二階で獨りポツ然と待つことになつた。

見渡せば前は平野である。伐り残された大木が彼處此處に衝立つて居る。風當りの強きゆゑが、何れも丸裸體になつて、黄色に染つた葉の僅少ばかりが枝にしがみ着いて居るばかり、それすら見て居る内にバラ／＼と散つて居る。風の加はると共に雨が降つて來た。遠方は雨雲に閉されて能くも見え分かず最近に立つて居る柏の高さ三丈ばかりなるが、其太い葉を雨に打たれ風に揺られて、けうとき音を立てて居る。道を通る者は一人もない。

かゝる時、かゝる場所に、一人の知人なく、一人の話し相手なく、旅人宿の窓に倚つて降りしきる秋の雨を眺めることは決して楽しいものでない。余は端なく東京の父母や弟や親しき友を想ひ起して、今更の如く、今日まで我を圍みし人情の如何に温かであつたかを感じたのである。

男子志を立て理想を追うて、今や森林の中に自由の天地を求めんと願ふ時、決して女々しくはならぬと我とわが心を引立てるやうにしたが、要するに理想は冷かにして人情は温かく、自然は冷厳にして

親しみ難く、人寰は懐しくして巢を作るに適して居る。

余は悶々として二時間を過した。其中に雨は小止になつたと思ふと、喇叭の音が遠くに響く。首を出して見ると斜に絲の如く降る雨を衝いて一輛の馬車が馳せて来る。余は此馬車に乗込んで再び先の停車場へと、三浦屋を立つた。

汽車の乗客は數ふるばかり。余の入つた室は余一人であつた。人獨り居るは好ましきことに非ず、余は他の室に乗換へんかとも思つたが、思ひ止まつて雨と霧との爲めに薄暗くなつて居る室の片隅に身を寄せて、暮近くなつた空の雲の去來や輪をなして回轉し去る林の立木を茫然と眺めて居た。斯る時、人は往々無念無想の裡に入るものである。利害の念もなければ越方行末の想もなく、恩愛の情もなく憎惡の惱もなく、失望もなく希望もなく、たゞ空然として眼を開き耳を開いて居る。旅をして身心共に疲れ果て、猶ほ其身は車上に搖られ、縁もゆかりない地方を行く時は、往々にして此の如き心境に陥るものである。かゝる時、はからず目に入つた光景は深く腦底に彫り込まれて多年之を忘れないものである。余が今しも車窓より眺むる處の雲の去來や、樺の林や恰度それであつた。

汽車の歌志内の溪谷に着いた時は、雨全く止みて日は將に暮れんとする時で、余は宿るべき家のあてもなく停車場を出ると、流石に幾千の鑛夫を養ひ、幾百の人家の狭き溪に簇集して居る場所だけありて宿引なるものが二三人待ち受けて居た。其一人に導かれ磔多し燈暗き町を歩みて二階建の旅人宿に入り妻女の田舎なまりを其儘、愛嬌も心かららしく迎へられた時は、余も思はず微笑したのである。

夜食を済すと、呼ばずして主人は余の室に来てくれたので、直に目的を語り彼より出来るだけの方便を求めた、主人は余の語る處をにこついて聞いて居たが、

『一寸お待ち下さい、少し心當りがありますから。』と言ひ捨て、室を去つた。暫時して立還り、

『だから縁といふは奇態なものです。貴所最早御安心なさい、すつかり分明ました。』

と我身のことの如く喜んで座に着いた。

『わかりましたか。』

『わかりましたとも、大わかり。四日前から私の家にお泊りのお客様があります。この方は御料地の係の方で先達から山林を見分してお廻りになつたのですが、ソラ野宿の方が多でしょう、だから到頭身體を傷して今手前共で保養して居らつしやるのです。篠原さんといふ方ですがね。何でも宅へ見える前の日は空知川の方に居らつしやつたといふことを聞きましたから、若しやと思つて唯今伺つて見ました處が、解りました。ウン道廳の出張員なら山を越すと直ぐ下の小屋に居たと仰しやるのです。御安心なさい、此處から一里位なもので譯は有りません、朝行けばお晝前には歸つて來られますサ。』

『どうも色々難有う、それで安心しました。然し今も其小屋に居て呉れ、ば可いが。始終居所が變るのて其れで道廳でも知れなかつたのだから。』

『大丈夫居ますよ、若し變つて居たら先に居た小屋の者に聞けば可うがす、遠くに移るわけは有りませぬ。』

『兎も角も明朝早く出掛けますから案内を一人頼んで呉れませんか。』
 『さうですな、山道で岐路が多いから矢張り案内が入るでせう、宅の伴を連れて行らつしやい。十四の
 小僧ですが、空知太までなら存じて居ます。案内位出来ませうよ。』

と飽くまで親切に言つて呉れるので、余は實に謝する處を知らなかつた。成程縁は奇態なものである、
 余にして若し他の宿屋に泊つたなら決してこれ程の便宜と親切とは得ることが出来なかつたらう。

主人は何處までも快活な男で、放膽で、而も眼中人なきの様子がある。彼の親切、見ず識らずの余に
 まで惜氣もなく投げ出す親切は、彼の人物の自然であるらしい。世界を家となし到る處に其故郷を見出
 す程の人は、到る處の山川、接する處の人が則ち朋友である。であるから人の困厄を見れば、其人が何
 人であらうと、憎悪するの因縁さへ無くば、即ち同情を表する十年の交友と一般なのである。余は主人
 の口より其略傳を聞くに及んで彼の人物の余の推測に近きを知つた。

彼は其生れ故郷に於て相當の財産を持つて居た處が、彼の第二人は彼の相續したる財産を羨むこと甚
 だしく、遂には骨肉の争まで起る程に及んだ。然るに彼の父なる七十の老翁も亦た少弟二人を愛して、
 やゝもすれば兄に迫つて其財産を分配せしめようとする。若し三等分すれば、三人とも一家を立つるこ
 とが出来ないのである。

『だから私は考へたのです、こればかしの物を兄弟して争ふなんて餘り量見が小さい。宜しいお前達
 に與つて了はう。唯五分のただけ呉れる、乃公は其を以て北海道に飛ぶからつて。其處で小僧が九の時

でした、親子三人でポイと此方へやつて來たのです。イヤ人間といふものは何處にでも住まば住まれる
 ものですよ。ハツハツハツ』と笑つて、

『處が妙でせう、弟の奴等、今では私が分配をやつた物を大概無くしてしまつて、それで居て矢張り小
 ぼけな村を此上もない土地のやうに思つて、私が何處も北海道へ來て見ると手紙ですゝめても出て來得
 ないんでサ。』

余は此男の爲す處を見、其語る處を聞いて、大に得る處があつたのである。よしや此一小旅店の主人
 は、余が思ふ所の人物と同一でないにせよ、よしや余が思ふ所の人物は、此主人より推して更に余自身
 の空想を加へて以て化成したる者にせよ、彼はよく自由に、よく獨立に、社會に住んで社會に壓せられ
 ず、無窮の天地に介立して安んずる處あり、海をも山をも原野をも將た市街をも、我物類に横行闊歩し
 て少しも屈託せず、天涯地角到る處に花の香しきを嗅ぎ人情の温かきに住む、げに男はすべからず此の
 如くして男といふべきではあるまいか。

斯く感ずると共に余の胸は大に開けて、札幌を出てゝより歌志内に着くまで、雲と共に結ばれ、雨と
 共にしをれて居た心は端なくも天の一方深碧にして窮りなきを望んだやうな氣がして來た。

夜の十時頃散歩に出て見ると、雲の流急にして絶間々々には星が見える。暗い町を辿つて人家を離れ
 ると、溪を隔てゝ屏風の如く黒く前面に横はる栂山の上に月現はれ、山を掠めて飛ぶ浮雲は折り々、其
 前面を拭うて居る。空氣は重く濕めり、空には風あれども地は肅然として聲なく、たゞ溪流の音のかす

かに聞ゆるばかり。余は一方は山、一方は崖の爪先上りの道を進みて小高き廣場に出たかと思ふと、突然耳に入ったものは絃歌の騒ぎである。

見れば山に沿うて長屋建の棟あり、これに對して又一棟あり。絃歌は此長屋より起るのであつた。棟は幾戸かに分れ、戸々皆な障子をとざし、其障子には火影華やかに映り、三絃の亂れて狂ふ調子、放歌の激して叫ぶ聲、笑ふ聲は雜然として起つて居るのである。牛部屋に等しき此長屋は何ぞ知らん鑛夫どもが深山幽谷の一隅に求め得し歡樂境ならんとは。

流れて遊女となり、流れて鑛夫となり、買ふものも賣るものも、我世夢ぞと狂歌亂舞するのである。

余は進んで此長屋小路に入った。

雨上の路はぬかるみ、水溜には火影うつる。家は離れて見しよりも更に哀れな建てざまにて、新開地だけにたゞ軒先障子などの白木の夜目にも生々しく見ゆるばかり、床低く屋根低く、立てし障子は地より直に軒に至るかと思はれ、既に歪みて隙間よりは釣ランプの笠など見ゆ。肌脱の荒くれ男の影鬼の如く映れるあり、亂髪の酌婦の頭の夜叉の如く映るかと思へば、床も落つると思はるゝ音が爲て、ドツとばかり笑聲の起る家もあり。『飲めよ』、『歌へよ』、『殺すぞ』、『撲るぞ』、哄笑、激語、惡罵、歡呼、叱咤、艶ある小節の歌の文句の腸を斷つばかりなる、三絃の調子の鳴咽ぶが如き、忽ちにして暴風、忽ちにして春雨、見來れば、歡樂の中に殺氣をこめ、殺氣の中に血涙をふくむ。泣くは笑ふのか、笑ふのは泣くのか。怒は歌か、歌は怒か、嗚呼儚き人生の流よ！ 數年前までは熊眠り狼住みし此溪間に流れ落ちて、こ

こに激み、こゝに激し、こゝに沈み、月影冷やかにこれを照して居る。

余は通り過ぎて振り顧り、暫し佇立んで居ると、突然間近なる一軒の障子が開いて一人の男がつと現はれた。

『や、月が出た！』と振上げた顔を見れば年頃二十六七、脊高く肩廣く屈強の若者である。きよろゝ四邊を見廻して居たが吻と酒氣を吐き、舌打して再び内によるめき込んだ。

三

宿の子のまめ／＼しきが先に立ちて、明くれば九月二十六日朝の九時、愈々空知川の岸へと出發した。陰晴定めなき天氣、薄き日影洩るゝかと思へば忽ち峰より林より霧起りて峰をも林をも路をも包んでしまふ。山路は思ひしより樂にて、余は宿の子と様々の物語しつゝ身も心も軽く歩んだ。

林は全く黄葉み、蔦紅葉は眞紅に染り、霧起る時は霞を隔てゝ花を見るが如く、日光直射する時は露を帯びたる葉毎に幾千萬の眞珠碧玉を連れて全山燃ゆるかと思はれた。宿の子は空知川沿岸に於ける熊の話をも爲し、續いて彼が子供心に聞き集めたる熊物語の幾種かを熱心に語つた。坂を下りて熊笹の繁れる所に來ると彼は一寸立どまり、『聞えるだらう、川の音が』と耳を傾けた。『ソラ……聞えるだらう、あれが空知川、もう直ぐ其處だ。』

『見えさうなものだな。』

『如何して見えるものか、森の中に流れて居るのだ。』

二人は、頭を没する熊笹の間を僅に通ふ帯ほどの徑を暫く行くと、一人の老人の百姓らしきに出遇つたので、余は道廳の出張員が居る小屋を訊ねた。

『此徑を三丁ばかり行くと幅の廣い新開の道路に出る、其右側の最初の小屋に居なさるだ。』と言ひ捨てて老人は去つて了つた。

歌志内を出發つてから此處までの間に人に出遇つたのは此老人ばかりで、途中又小屋らしき物を見なかつたのである。余は此老人を見て空知川の沿岸の既に多少かの開墾者の入込んで居ることを事實の上を知つた。

熊笹の徑を通りぬけると、果して思ひがけない大道が深林を穿つて一直線に作られてある。其幅は五間以上もあらうか。然も兩側に密茂して居る林は二丈を越え三丈に達する大木が多いのだ。此幅廣き大道も、堀割を通ずる鐵道線路のやうであつた。然し余は此道路を見て拓殖に熱心なる道廳の經營の、如何に困難多きかを知つたのである。

見れば此道路の最初の右側に、内地では見ることの出来ない異様な掘立小屋がある。小屋の左右及び背後は林を倒して、二三段歩の平地が開かれて居る。余は首尾よく此小屋で道廳の屬官、井田某及び他の一人に會ふことが出来た。

殖民課長の丁寧なる紹介は、彼等をして十分に親切に余が相談對手とならしめたのである。更に驚くべきは、彼等が余の名を聞いて、早く既に余を知つて居たことと、余の燕雜なる文章も、何時しか北海

道の思ひもかけぬ地に其讀者を得て居たことであつた。

二人は余の目的を聞き終りて後、空知川沿岸の地圖を披き其經驗多き鑑識を以て、彼處此處と、移民者の爲めに區劃せる一區一萬五千坪の地の中から六ヶ所ほど選定して呉れた。

事務は終り雜談に移つた。

小屋は三間に四間を出でず、屋根も周圍の壁も大木の皮を幅廣く剥ぎて組合したもので、板を用ひしは床のみ、床には筵を敷き、出入の口はこれ又樹皮を組み立てた一枚被はれてあるばかり、これ開墾者の巢なり、家なり、いな城郭なり。一隅に長方形の大きな爐が切つて、これを火鉢に竈に、煙草盆に、冬ならば煖爐に使用するのである。

『冬になつたら堪らんでせうね、こんな小屋に居ては。』

『だつて開墾者は皆なこんな小屋に住んで居るのですよ。どうです辛棒が出来ますか。』と井田は笑ひながら言つた。

『覺悟は爲て居ますが、イザとなつたら随分困るでせう。』

『然し思つた程でもないものです。若し冬になつて如何しても辛棒が出来さうもなかつたら、貴所方のことだから札幌へ逃げて來れば可いですよ。どうせ冬籠は何處でも同じことだから。』

『ハツハツハツ、其なら初めから小作人任にして御自分は札幌に居る方が可からう。』と他の屬官が言つた。

『さうですとも、さうですとも冬になつて札幌に逃げて行くほどなら、寧ろ初めから東京に居て開墾した方が可いんです。何に僕は辛棒しますよ。』と余は覺悟を見せた。井田は、『さうですな、先づ雪でも降つて來たら、此爐にドン／＼焚火をするんですな。薪木ならお手のものだから、それで貴所方だからウンと書籍を仕込で置いて勉強なさるんですな。』
『雪が解ける時分には大學者になつて現はれるといふ趣向ですか。』と余は思はず笑つた。
談して見ると、突然バラ／＼と音がして來たので余は外に出て見ると、日は薄く光り、雲は靜に流れ、寂たる深林を越えて時雨が過ぎゆくのであつた。

余は宿の子を残して、一人此邊を散歩すべく小屋を出た。
げに怪しき道路よ。これ千年の深林を滅し、人力を以て自然に打克んが爲めに、殊更に無人の境を選んで作られたのである。見渡すかぎり、兩側の森林これを覆ふのみにて、一個の人影すらなく、一縷の輕煙すら起らず、一の人語すら聞えず、寂々寥々として横つて居る。

余は時雨の音の淋しさを知つて居る、然し未だ曾て、原始の大深林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ實に自然の幽寂なる私語である。深林の底に居て、此音を聞く者、何人か生物を冷笑する自然の無限の威力を感じざらん。怒濤、暴風、疾雷、閃雷は自然の虚喝である。彼の威力の最も人に迫るのは、彼の最も靜かなる時である。高遠なる蒼天の、何の聲もなく唯だ黙して下界を瞰下す時、曾て人跡を許さざりし深林の奥深き處、一片の木の葉の朽ちて風なきに落つる時、自然は

欠伸して曰く、『あゝ我一日も暮れんとす』と。而して人間の一千年は此刹那に飛びゆくのである。

余は兩側の林を覗きつゝ行くと、左側で林のやゝ薄くなつて居る處を見出した。下草を分けて進み、ふと顧みると、此身は何時しか深林の底に居たのである。とある大木の朽ちて倒れたるに腰をかけた。林が暗くなつたかと思ふと、高い枝の上を時雨がサラ／＼と降つて來た。來たかと思ふと間もなく歇んで森として林は靜まりかへつた。

余は暫くジツとして奥の暗くなつて居る處を見て居た。
社會が何處にある、人間の誇り顔に傳唱する『歴史』が何處にある。此場所に於て、人はたゞ『生存』其者の自然の一呼吸の中に託されてをることを感ずるばかりである。露國の詩人は曾て深林の中に坐して、死の影の我に迫まるを覺えたと言つたが、實にさうである。又た曰く、『人類の最後の一人が此地球上より消滅する時、木の葉の一片も其爲にそよがざるなり。』と。

死の如く靜なる、冷かなる、暗き、深き森林の中に坐して、此の如きの威迫を受けないものは誰も無からう。余我を忘れて恐しき空想に沈んで居ると、

『旦那！ 旦那！』と呼ぶ聲が森の外でした。急いで出て見ると宿の子が立つて居る。

『最早御用が済んだら歸りませう。』

其處で二人は一先づ小屋に歸ると、井田は、
『どうです、今夜は試験のために一晩此處に泊つて御覽になつては。』

余は遂に再び北海道の地を踏まないで今日に到つた。たとひ一家の事情は余の開墾の目的を中止せしめたにせよ、余は今も尙ほ空知川の沿岸を思ふと、あの冷厳なる自然が、余を牽きつけるやうに感ずるのである。
何故だらう。

非凡なる凡人

上

五六人の年若い者が集つて、互に友の上を噂し合つたことが有る。其時、一人が——
僕の子供の時から友に桂正作といふ男がある、今年二十四で今は横濱の或會社に技手として雇はれ専ら電氣事業に従事して居るが、先づ此男ほど類の異つた人物はあるまいかと思はれる。
非凡人ではない。けれども凡入でもない、さりとして偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふが最も適評かと僕は思つて居る。

僕は知れば知るほど此男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つた處で、秀吉とか、ナポレオンとか其他の天才に感心するのは異ふので、此種の人物は千百歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社會が常に産出し得る人物である。又た平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから桂のやうな人物が一人殖えればそれだけ社會が幸福なのである。僕の桂に感心するのは此意味に於てである。又僕が桂をば非凡なる凡人と評するのも此故である。

僕等が未だ小學校に通つて居る時分であつた。或日、其日は日曜で僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似を爲て、我こそ秀吉だとか義経だとか、十三四にもなりながら馬鹿げた腕白を働ら

て大あばれに暴れ、遂に喉が渴いて來たので、山の直ぐ麓にある桂正作の家の庭へ、裏山からドヤドヤと駈下りて、案内も乞はず、いきなり井戸邊に集まつて我勝にと水を汲んで呑んだ。

すると二階の窓から正作が顔を出して此方を見て居る。僕はこれを見るや、

『來ないか。』と呼んだ。けれども平常にない眞面目くさつた顔つきをして頭を横に掉つた。腕白の方でも人並のことを爲てのける桂正作、不思議と出て來ないので、僕等も強ひては誘はず、其儘又た山に駈登つて了つた。

騒ぎ疲れて衆人散々に我家へと歸り去り、僕は一人桂の宅に立寄つた。黙つて二階へ上つて見ると、正作は『テーブル』に向ひ椅子に腰をかけて一心になつて、何か讀んで居る。

僕は先づ此『テーブル』と椅子のことから説明しようと思ふ。『テーブル』といふは粗末な日本机の兩脚の下に續臺をしいた品物で、椅子とは足續の下に箱を置いたゞけのこと。けれども正作は眞面目で此工夫をしたので、學校の先生が日本流の机は衛生に悪いと言つた言葉を成程と感心して、直ぐこれだけのことを實行したのである。そして其後常に此椅子テーブルで彼は勉強して居たのである。其テーブルの上には教科書其他の書籍を丁寧に重ね、筆墨の類まで決して亂雑に置いてはならない。彼は日曜の好い天氣なるにも關はず、何の本か脇目もふらないうで讀んで居るので、僕は其傍に行つて、

『何を讀んで居るのだ。』と言ひながら見ると洋綴の厚い本である。

『西國立志編だ。』と答へて顔を上げ、僕を見た其の眼ざしは未だ夢の醒めない人のやうで、心は猶ほ書

籍の中にあるらしい。

『面白いかね?』

『ウン、面白い。』

『日本外史と何方が面白い。』と僕が問ふや、桂は微笑を含んで、漸く我に復り、例もの元氣の可い聲で『それやア此の方が面白いよ。日本外史とは物が異ふ。昨夜僕は梅田先生の處から借りて來てから讀みはじめたけれど面白うて止められない。僕は如何しても一冊買ふのだ。』と言つて嬉しくつて堪らない風であつた。

其後桂は遂に西國立志編を一冊買ひ求めたが、其本といふは粗末至極な洋綴で、一度讀み了らない中に既にバラバラになりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻糸で綴直した。

此時が僕も桂も數へ年の十四歳、桂は一度西國立志編の美味を知つて以後は、何度此書を読んだか知れない、殆んど誦誦するほど熟讀したらしい、そして今日と雖も常にこれを座右に置いて居る。

別に桂正作は活きた西國立志編と言つてよからう、桂自身でもさう言つて居る。

『若し僕が西國立志編を讀まなかつたら如何であつたらう。僕の今日あるのは全く此書のお蔭だ。』と。けれども西國立志編(スマイルスの自助論)を讀んだものは、洋の東西を問はず幾百萬あるか知れないが、桂正作のやうに、『余を作りし者は此書なり。』と明言し得る者は果して幾人あるだらう。

天が與へた才能からいふと桂は中位の人たるに過ぎない。學校に於ける成績も中等で、同級生の中、

彼よりも優れた少年は幾干も居た。又た彼は可なりの腕白者で、僕等と一緒に随分荒れたものである。それで學校に於ても郷黨に在つても、特に人から注目せられる少年ではなかつた。

けれども天の與へた性質から言ふと、彼は率直で、單純で、そして何處かに壓ゆべからざる勇猛心を持つて居た。勇猛心といふよりか、敢爲の氣象と言つた方が可からう。則ち一轉すれば冒險心となり、再轉すれば山氣となるのである。現に彼の父は山氣のために失敗し、彼の兄は冒險の爲に死んだ。けれども正作は西國立志編のお蔭で、此氣象に訓練を加へ、堅實なる有爲の精神としたのである。

兎も角、彼の父は尋常の人ではなかつた。やはり昔の武士で、維新の戦争にも一かどの功をも立てたのである。體格は骨太の頑丈な作、其顔は眼ヅリ長く切れ、鼻高く一見して堂々たる容貌、氣象も武人氣質で、容易に物に屈しない。であるから若し武人のまゝで押通したならば、少なくとも藩閥の力で今日には人にも知られた將軍になつて居たかも知れない。が、彼は維新の戦争から歸ると直ぐ『農』の一字に隠れて了つた。隠れたといふよりか出直したのである。そして『殖産』といふ流行語にかぶれて遂に破産してしまつた。

桂家の屋敷は元來、町に在つたのを、家運の傾くと共に之を小松山の下に運んで建て直したので、其時も僕の父などは斯う言つて居た、あれほどの立派な屋敷を打壊さないうで其まゝ人に譲り、其金で別建てたら可からうと。けれども、桂正作の父の氣象は此一事でも解つて居る。小松山の麓に移つてこの方は、純粹の百姓になつて正作の父は働いて居るのを僕は屢々見た。

であるから正作が西國立志編を読み初めた頃は、其家政は餘程困難であつたに違ひない。けれども其家庭には何時も多少の山氣が浮動して居たといふ證據には、正作が或日僕に向つて、宅には田中鶴吉の手紙があると得意らしく語つたことがある。其理由は、桂の父が、當時世間の大評判であつた田中鶴吉の小笠原拓殖事業にひどく感服して、わざ／＼書面を送つて田中に敬意を表した處、田中が又た直ぐ禮状を出して其が桂の父に届いたといふ一件。又或日正作が僕に向ひ、今から何ヶ月とかすると蛤を澤山御馳走するといふから、何故だと聞くと、父が蛤の繁殖事業を初め、種を取寄せて濱に下したから遠からず、此附近は蛤が非常に採れるやうになると答へた。先づ此等の事で家庭の様子も想像することが出来るのである。

父の山氣を露骨に受けついで、正作の兄は十六の歳に家を飛び出し音信不通、行方知れずになつて了つた。布哇に行つたとも言ひ、南米に行つたとも噂させられたが、實際のことは誰も知らなかつた。

小學校を卒業するや、僕は縣下の中學校に入つて了ひ、暫時故郷を離れたが、正作は家政の都合で、さういふわけにゆかず、周旋する人があつて某銀行に出ることになり、給料四圓か五圓かて某町まで二里の道程を朝夕往復することになつた。

間もなく冬期休暇になり、僕は歸省の途に就いて故郷近く車で來ると、小さな坂がある、其麓で車を下り手荷物を車夫に託し、自分はステッキ一本で坂を登りかけると、僕の五六間さきを行く少年がある。身に古ぼけたトンビを着て、手に古ぼけた手提カバンを持つて、靜に坂を登りつゝある。其姿が如何も

桂正作に似て居るので、

『桂君ぢやアないか』と聲を掛けた。後を振り向いて破顔一笑したのはまさしく正作。立ち止つて僕を

まち、

『冬期休暇になつたのか。』

『どうだ君は未だ銀行に通つてるか。』

『ウン、通つてるけれども少しも面白くない。』

『どうしてや?』と僕は驚いて聞いた。

『どうしてと言ふ譯もないが、君なら三日と辛棒が出来ないだらうと思ふ。第一僕は銀行業からして僕の目的ぢやないのだから。』

二人は話しながら歩いた、車夫のみ先へやり。

『何が君の目的だ。』

『工業で身を立つる決心だ。』と言つて正作は微笑し、『僕は毎日此道を往復しながら色々考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ。』

ワットやステブソンやエヂソンは彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼の聖書である。

僕の黙言つて頷くを見て、正作は更に言葉をつぎ、

『だから僕は來春は東京へ出ようかと思つて居る。』

『東京へ?』と驚いて問ひ返した。

『さうサ東京へ。旅費は最早出來たが、彼地へ行つて三月ばかりを食べるだけの金を持つて居なければ困るだらうと思ふ。だから僕は父に頼んで來年の三月までの給料は全部僕が貰ふことにした。だから四月早々は出立るだらうと思ふ。』

桂正作の計畫は總て此筆法である。彼は随分少年に有勝な空想を描くけれども、計畫を立て、これを實行する上に就いては少年の時から今日に至るまで、少しも變らず、一定の順序を立て、一歩々々と着々實行して遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でも有らう、けれども一つには彼の性情が祖父に似て居るからだと思はれる。彼の祖父の非凡な人であつたことを今こゝで詳しく話すことは出來ないが、其一を言へば眞書太閤記三百卷を寫すに十年計畫を立て、遂に見事寫し終つたことがある。僕も桂の家でこれを實見したが、今でも其氣根の大なるに驚いて居る。正作は確に此祖父の血を受けたに違ひない。若くは此祖父の感化を受けただらうと思ふ。

途上種々の話で吾々二人は夕暮に歸宅し、其後僕は毎日のやうに桂に遇つて互に將來の大望を語り合つた。冬期休暇が終り愈々僕は中學校の寄宿舎に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて來た。そして言ふには今度會ふのは東京だらう。三四年は歸郷しない積りだからと。僕も其積りで正作に離別を告げた。

明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二度手紙を寄したけれど、何時も無事を知らず

ばかりで別に着京後の様子を告げない。又た故郷の者誰も如何して正作が暮して居るか知らない、父母すら知らない、唯だ何人も疑はないことが一つあつた、曰く桂正作は何等かの計畫を立て、其目的に向つて着々歩を進めて居るだらうといふ事實である。

僕は三十年の春上京した。そして宿所が定まるや、早速築地何町何番地、何の某方といふ桂の住所を訪ねた。此時二人は既に十九歳。

下

午後三時頃であつた。僕は築地何町を隅から隅まで探して、漸くのこと桂の住家を探し當てた。容易に分らぬも道理、某方といふ其某は車屋の主人ならんとは。兎ある横町の貧しげな家ばかり並んで居る中に挾つて九尺間口の二階屋、其二階が、『活ける西國立志編』君の集である。

『桂君といふ人が貴様の處に居ますか。』

『へい居らつしやいます、あの書生さんでせう』との山の神の挨拶。聲を聞きつけてミシ／＼と二階を下りて来て『ヤア』と現はれたのが、一別以來三年會はなんだ、桂正作である。

足も立てられないやうな汚ない畳を二三枚歩いて、狭い急な階子段を登り、通された座敷は六疊敷、

煤けた天井低く頭を壓し、畳も黒く壁も黒い。

けれども黒くないものがある。それは書籍。

桂ほど書籍を大切にすることは少ない。彼は如何なる書物でも決して机の上や、座敷の眞中に放擲す

るやうなことなどは爲ない。斯う言ふと桂は書籍ばかりを大切にするやうなれど必ずしもさうでない。彼は身の周圍のもの總てを大事にする。

見ると机も可なり立派。書籍箱も左まで黒くない。彼は其の必需品を粗略にするほど、東洋豪傑風的美感も悪癖も受けて居ない。今の流行語で言ふと、彼は西國立志編の感化を受けただけに頗るハイカラ的である。今にして思ふ、僕はハイカラの精神の我が桂正作を支配したことを皇天に感謝する。

机の上を見ると、教科書用の書籍その他が、例の如く整然として重ねてある。其他周圍の物總てが皆な其處を得て、キチンとして居る。

室の下部にして黒く暗澹なるを憂ふる勿れ、桂正作は其主義と、其性情に依つて、總て此等の黒くして暗澹たるものをば化して純潔にして高貴、感嘆すべく畏敬すべきものと爲して居るのである。

彼は例の如く最も快活に胸臆を開いて語つた。僕の問ふがまに／＼上京後の彼の生活をば、恥ぢもせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かした。

彼ほど虚榮心の少ない男は珍らしい。其の境遇に處し、其の信ずる處を行つて、それで満足し安心しそして勉勵して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを爲して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

一別以來、正作の爲したことを聞くと實に此通りである。僕は聞いて居る中にも益々彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。

彼は計畫通り三ヶ月の糧を蓄へて上京したけれども、坐してこれを食べる男ではなかつた。

何かな面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任して遍巡り歩いた。そして思ひついたのは新聞賣と砂書き。九段の公園で砂書きの爺を見て、彼は直ちにこれと物語り、事情を明して弟子入を頼み、それより二三日の間稽古をして、間もなく大道の傍に坐り、一錢、五厘、時には二錢を投げて貰つて出鱈目を書き、幾錢かづみの収入を得た。

或日、彼は客のなき儘に、自分で勝手なことを書いては消し、ワット、ステアンソン、などいふ名を書いて居ると、八歳ばかりの男兒を連れた衣装の善い婦人が前に立つた。『ワット』と子供が讀んで、『母上、ワットとは何のこと？』と聞いた。桂は顔を上げて子供に解り易いやうに此大發明家のことを話して聞かし、『坊様も大きくなつたら斯んな豪い人におなりなさいよ。』と言つた。さうすると婦人が『失禮ですけれど』と言ひつゝ、貳拾錢銀貨を手渡し、立ち去つた。

『僕は其銀貨を費はないで未だ持つて居る』と正作は言つて罪のない微笑をもらした。彼は斯く勞働して居る間、其宿所は木賃宿、夜は神田の夜學校に行つて、専ら數學を學んで居たのである。

日清の間が切迫して来るや、彼は直ぐと新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。

斯くて其歳も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

且つ問ひ且つ聞いて居る中に夕暮近くなつた。

『飯を食ひに行かう！』と桂は突然言つて、机の抽斗から手早く暮口を取出して懐へ入れた。

『何處へ？』と僕は驚いて訊ねた。

『飯屋へサ』と言つて正作は立ちかけたので、

『イヤ飯なら僕は宿屋へ歸つて食ふから心配しないはうが可いよ。』

『まあそんなことを言はないで一緒に食ひ給へな。そして今夜は此處へ泊り給へ。未だ話が澤山残つて居る。』

僕も其意に従ひ、二人して車屋を出た。道の二三丁も歩いたが、桂は其間も愉快に話しながら、國元のことなどを聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいなど言つて居た。けれども僕は桂の生活の様から察して、三百里外の故郷へ往復することの到底、言ふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず歸れたら一度歸つて父母を見舞ひ給へ位の軽い挨拶を爲て置いた。

『此處だ！』と言つて桂は先に立つて、繩暖簾を潜つた。僕は喫驚して、暫時ためらつて居ると中から『オイ君！』と呼んだ。爲かたが無いから入ると、桂は程よき場處に陣取つて笑味を含んで此方を見て居る。見廻はすと、桂の外に四五名の勞働者らしい男が居て、長い食卓に着いて、飯を食ふ者、酒を呑むもの、殊の外靜肅である。二人差向ひて卓に倚るや、

『僕は三度々々此處で飯を食ふのだ。』と桂は平氣で言つて、『君は何を食ふか。何でも出来るよ。』

『何でも可い、僕は。』

『さうか、それでは』と桂は女中に向つて二三品命じたが、其名は符牒のやうで、僕には解らなかつた。暫時すると、刺身、煮肴、煮メ、汁などが出て飯を盛つた茶碗に香の物。

桂は美味さうに食ひ初めたが、僕は何となく汚らしい氣がして食ふ氣にならなかつたのを無理に食ひ初めて居ると、思はず涙が逆上げて來た。桂正作は武士の子、今や彼が一家は悲運の底にあれど、要するに、彼は紳士の子、それが下等社會と一緒に一膳めしに舌打ち鳴らすか、と思つて涙含んだのではない。決してさうではない。いや／＼乍ら箸を取つて二口三口食ふや、卒然、僕は思つた、あゝ此飯は此有爲なる、勤勉なる、獨立自活して自ら教育しつゝある少年が、勞働して儲け得た金で、心ばかりの馳走をして呉れる好意だ、それを何ぞや不味さうに食ふとは！ 桂は此處で三度の食事をするではないか、これを嫌々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友と言はれうかと、さう思ふと僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすが／＼して、桂と共に美味しく食事をして、繩暖簾を出た。

其夜二人で薄い布団と一緒に寝て、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや他の友の上のことや、將來の望を語り合つたことは僕今でも思ひ起すと、楽しい懐しい其夜の様が眼の先に浮んで來る。

其後、僕と桂は互に往來して居たが早くも其年の夏期休暇が來た。すると一日、桂が僕の下宿屋へ來て、

『僕は故郷へ歸つて來うかと思ふ。實は最早決定めて居るのだ。』といふ意外な言葉。

『それは可いけれども君……』と僕は直ぐ旅費等のことを心配して口を開くと、

『實は金も出來て居るのだ。參拾圓ばかり貯蓄して居るから、往復の旅費と土産物とで貳拾圓有つたら可からうと思ふ。參拾圓悉皆費つて了ふと後で困るからね。』といふのを聞いて僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると二年前から既に歸省の計畫を立て、其積で貯金したとのこと。

どうだ諸君！ 斯ういふことは出來易い様で、なか／＼出來ないことだよ。桂は凡人だらう。けれども其爲すことは非凡ではないか。

其處で僕も大に歡んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を出立つた。

翌年三十一年に目出度學校を卒業し、電氣部の技手として横濱の會社に給料拾貳圓で雇はれた。

其後今日まで五年になる。其間彼は何をしたか。たゞ其職分を忠實に勤めただけか。さうでない！ 彼は大いなる事を爲して居る。彼の弟が二人あつて、二人とも彼の兄、逃亡した兄に似て手に合はない突飛物、一人を五郎と云ひ、一人を荒雄といふ、五郎は正作が横濱の會社に出たと聞くと、國元を飛び出して、東京に來た。正作は五郎の爲めに、所々奔走して或は商店に入れ、或は學僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を逃出して了ふ。

然れども正作は根氣よく世話をして居たが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀まし、そして工手學校に入れて了つた。僅の給料で桂から食ひ、弟を養ひ、三年の間、

辛苦しんくに辛苦くさくを重ねた結果は三十四年に至つて現はれ、五郎は技手と成つて、今は東京芝區の某會社に雇はれ、眞面目まじめに勤勞して居るのである。

荒雄も亦た國を飛び出した。今は正作と五郎と二人で此の弟の處置に苦心して居る。今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町のげまちに桂を訪ねると、宿やどの者が『桂さんは未だ會社です』と言ふから、會社の様子も見たく、其足で會社を訪うた。

桂の仕事を爲て居る場處に行つて見ると、僕は電氣の事を詳しく知らないから十分の説明は出来ないが一本の太い鐵柱を擁して數人の人が立つて居て、正作は一人其鐵柱の周圍を幾度となく廻つて熱心に何事か爲て居る。最早電燈が點いて白晝まひるの如く此こゝ一群の人を照して居る。人々は黙して正作の爲る處を見て居る。器械くわいに狂くるの生じたのを正作が檢分し、修繕して居るのらしい。

桂の顔、様子！ 彼は無人の地に居て、我を忘れ世界を忘れ、身も魂たましひも、今其の爲しつゝある仕事に打込んで居る。僕は桂の容貌の斯くまでに眞面目なるを見たことがない。見て居る中に、僕は一種の莊嚴じやうげんに打たれた。

諸君！ 何卒どぞか僕の友のために、杯さかづきをあげて呉れ給へ、彼の將來を祝福して！

This sunrise is my
出の日

日の出

某法學士洋行の送別會が芝山内の紅葉館に開かれ、會の散じたのは夜の八時頃でもあらうか。其崩そのくづが七八名、京橋區彌左衛門町の同好俱樂部に落合おちあつたことがある。

小介こすけ川文學士が伴ともうて來た一人の男を除いては皆な此俱樂部の會員で、其の一人はオックスホード大學の出身、其一人はハーバード大學の出身など、皆なそれ々の肩書かたがらを持つて居る年少氣鋭、前途有望といふ連中ばかり。卓たを圍かこんで、んでに吐き出す氣焔きえんの猛烈なるは言ふまでもないことで、政論あり、人物評あり、經濟策あり、時に神學の議論まで現はれて一しきりはシガーの煙の燐々濛々たる中に六七の面おもてが隠見出沒して、甲走かほしつた肉聲にくこゑの幾種が一高一低、縱横に入り亂れ、これに伴ふ音楽はドスンと卓たを打つ音、ゴトととと床ゆかを蹴る音、そして折り／＼冬の街まちを吹き荒す北風の窓ガラスを掠める響こゑである。時々使童ポイイが出入して淡泊たんぱくの食品くひもの、勁烈きんれつの飲料いんりやうを持運もちりんんで居た。ストーヴは熾まに燃えて居る——
『貴殿あなたは何處どこの御出身ごしゆしんですか』と突然高等商等出身の某、今は或會社に出で重役じゆうやくの覺おぼえ目出度いどき一人の男おとこが小介こすけ川文學士の隣となりに坐つて居る新來の客きやくに問ひかけた。勝手勝手な氣焔きえんもやゝ吐き疲つかれた頃で、蓋し話頭かたごしらを轉じて少し舌の爛たれを癒いさうといふ積つもりらしい。人々も同意どういと見えて一時に口を閉しぢたけれど、其中の二三人は別に此問このとに氣を止めず、ソファソファに身を埋めてダラリと手を兩脇りょうわきに垂れ、天井てんじやうを眺めて眼を

細くして居る者もあれば、シガーをバク／＼ふかして居る者もある。一人は毒瓦斯を抜くべく起つて窓を少し開けた。餘の人々は新來の客に目を注いだ。

『僕ですか、僕は』と言ひ澀んだ男は年の頃二十七八、面長な顔は淺黒く、鼻下に濃き八字髭あり、人の洋服なるに引違へて羽織袴といふ扮装、今は都下で最も有力なる某新聞の經濟部主任記者たり、次の總選舉には某黨より推されて議員候補者たるべき人物、兒玉進五とて小介川文學士は既に人々に紹介したのである。

兒玉は先程來、多く口を開かず、微笑して人々の氣焔を聽いて居たが、今突然出身の學校を問はれたので、一寸口を開き得なかつたのである。

『僕の出した學校をお尋ねになるのですか。』と兒玉は語を續うとして、更に斯う問うた。

『さうです。君の出られた學校です。三田ですか、早稻田ですか。』と高等商業の紳士は此二者を出てじといふ面持で問うた。

『違ひます。』と兒玉は微笑した。

『オオさうですか。何處です。』

『大島學校です。』

『大島學校？ 聞いたことのない學校ですな、お國の學校ですか。』

『さうです、故郷の小學校です、私立小學です。』と言つた時の兒玉の顔は眞面目であつたけれど、人々

は笑ひ出した。

『戯談を言つては困ります。だから新聞記者は人が悪い。人が眞面目で聞くのに。』と高商紳士は短くなつたシガーをストーヴに投げ込んだ。

『僕も眞面目で答へたのです。全く僕は小島小學校の出身です。故意と奇妙な答をして諸君を驚かす積は決して持たないので。これまでも僕は出身の學校を聞かれましたが、初から答へない時もあり、答へる時は毎も此の答をするのです。』

『さうすると貴殿は小學校以外の教育はお受けにならんかつたのですか、と申すと失敬ですが其以外の學校にはお入りにならなかつたのですか。』とソファに掛けて居たオックスフォード出身の紳士が身を起して聞いた。其口元には何となく嘲笑の色を浮べて居る。

『さうです、僕はオックスフォードにもハーバードにも帝國大學にも早稲田にも三田にも高等商業學校にも居たことは無いのです。たゞ故郷の大島小學校を出たばかりです。斯う申すと、諸君は妙にお取りになるかも知れませんが、僕はこれでも竊かに大島小學校出身といふことを誇つて居るのです。又た心から感謝して居るので御座います。僕は不幸にして外國に留學することも出來ず、大學に入ることも出來ず、ですから僕の教育、所謂教育なるものは不完全なものでせう。

けれども尙ほ僕は小島小學校の出身なることを、諸君の如き立派な肩書を持つて居らるゝ中で公言して少しも恥ぢず、寧ろ誇つて吹聴したくなるのです。

問はれなければ黙つて居ます。問はれても言うて益なき仲間に向つては黙つて居ます。けれども諸君の如き教育高き紳士に問はれては、實に眞面目に僕は大島小學校の出身といふことを公言するのです。早稻田を出たものは早稻田を愛し、大學を出たものは大學を愛するのは當然で、諸君も必ず其出身の學校を愛し且つ誇らるゝでせう。其如く僕は故郷の大島小學校を愛し且つ其出身たることを誇るのです。』

『さうです、僕も故郷の小學校を愛します。』と言つたのはハーバード出身の紳士。

『そして誇りますか。そして其出身たることを感謝しますか。』と問ひ返へした兒玉の口調はやゝ激して居た。

『さうです。』

『何故ですか』と問うた兒玉の眼は輝いた。

『イヤさう眞面目に問はれては困る。僕は小兒の時を回想して當時の學校を懐しく思ふだけの意味で言つたのです。』とハーバードは罪のない微笑を浮べて言譯した。

『解りました。それだけの意味なら解りました。けれども貴殿がさういふことを申されるのも要之、僕が一の小さな小學校の出身であることを誇るとか、感謝するとか言ふのは、矯激の言を弄して自ら欺き又自ら快とする者のやうに取つて居らるゝからだらうと思ひます。しかし、僕は決してさういふ輕薄な心を以て言ふのではないのです。若し諸君の中、僕と同じく大島小學校に居られた方が有つたなら、矢張僕と同じやうな情を持たれるだらうと信じます。』

大島小學校に居たものが、今東京に三人居ます。これが僕の同窓です。此三人が集まる會が僕等の同窓會です。其一人は三田を卒業して今は郵船會社に出て居ます。其一人は法學士となつて今は東京地方裁判所の判事をして居ます。けれども彼等二人は僕と同じく大島小學校出身なることを今でも僕と同じやうに誇り且つ感謝して居るのです。そして僕等は月に一度同窓會を開いて一夕を最も清く、最も楽しく語り且つ遊ぶのです。』

兒玉の言々句々、肺腑より出て、其顔には熱誠の色動いて居るのを見て、人々は流石に耳を傾けて謹聽するやうになつた。

オックスホード出身の紳士は年長者だげに分けても兒玉の言ふ處に感じた體で、

『それほどに言はれますからには、其大島小學校とやらいふ學校には何か特殊の事があつて、貴殿の心をそれほどまでに動かして居るのだらうと思はれます。それをお話し下さいませんか。ね、諸君、それを聞かして戴かうではないか。』

『さうとも、兒玉さん僕の言つたことはお氣に觸らんように願ひます。何卒その大島小學校のことを話して貰ひたいものです。』とハーバードは前言のお謝罪にオックスホードに賛成した。

『諸君がお聴き下さるなら申します、強ひては申しません。餘り面白い話ではないですから。眞面目な事實は流行の小説とは少し趣を異にしますから』と兒玉は微笑を洩して、『小説も面白い御座います。けれども共事實は更に面白い御座います。』

『是非お話を願ひたいものです』とハーバードは乗氣のりまになった。

『宜しう御座います、それではお話しませう。』
 僕の十二の年です。僕は父母に従つて暫く他國に出て居ましたが、父が官を辭すると共に、故郷こくにに歸りまして、僕は大島小學校といふに入りました。

海岸から三四丁離れた山の麓に立つて居る此小學校は見た所決して立派なものではありません。特に僕の入つた頃は粗末な平屋で、教室の數も四五しか無かつたのです。それで他國の立派な堂々たる小學校に居て急に其様見すばらしい學校に來た僕は子供心にも決して愉快な心地は爲なかつたのです。

けれども僕の故郷は二萬石の大名の城下で、縣下では殆んど言ふに足らぬ小な町、特に海陸共に交通の便を最も缺いて居ますから、純然たる片田舎で、日本全國津々浦々までも行きわたつて居る筈の文明の恩澤も僕の故郷には其微光すら認め得なかつたのです。學校といふのは此大島小學校ばかり、其以外にはいろはのいの字も學ぶ場所はなかつたので御座います。僕も初は不精々々に通つて居りました。

校長の名は大島伸一、其頃僅に二十七八でしたらう。脊は左まで高くはないが、骨太の肉附の良、丸顔の頭の大きな人で眦が長く切れ、鼻高く口締り、柔和の中に威嚴のある容貌で。生徒は皆な能く馴れ親しんで居りました。僕が此校長の下に大島小學校に居たのは二年半で、月日にすれば言ふに足らず、十二歳より十五歳まで、人の年齢にすれば腕白盛でありましたけれど、僕が眞の教育を受けたのは此時、僕の一生の羅針盤を置かれたのは實に此時です。

僕が大島學校に上つてから四五日目で御座いました、四十を越えた位の一人の男が學校の運動場に來て、校長と頻りに何事か話して居ましたが、其周圍に七八名の生徒が立つて居て、顔を上げて二人の物語を聞いて居りました。暫くして其男は丁寧にお辭儀を爲て、校長も至極丁寧な禮をして、そして二人は別れました。

僕は子供心にも此様子を見て不審に思つたといふは、其男の衣服から風采から舉動までが、一見百姓です、純然たる水呑百姓といふ體裁です、けれども校長の之に對する様子は郡長様に對する程の丁寧なことなので、既に浮世の虛榮心に心の幾分を染められて居た僕の目には全く怪しく映つたのです。

けれども家に歸つて別に此事を父にも問はず、學校朋輩にも聞きませんでした。
 一月經たぬ内に自然と此不審が晴れて來ました。四十男の水呑百姓と思つたのは、學校より十町ばかり隔だつて居る松林の奥に一構の宅地を擁し、米倉の三棟を並べて居る百姓、池上權藏といふ男で、大島小學校の創立者、恩人、保護者であつたのです。それならば何故、池上小學校と名稱ずして大島小學校といふ校長と同姓の名稱を附けたか、諸君も必ず不審に思はれるでせう。これには又意味の深い理由が有るのです。

僕が此小學校に入る僅か四年前に此學校は創立されたので、其より更に十年前のこと、正月元日の朝でした、新年の曙光は今將に青海原の果より其第一線を投げ、東雲の横雲は黄金色に染り、沖なる島山の頂は紫嵐に包まれ、天地見るとして清新の氣に充たされて居る時、濱は寂寞として一の人影なく、霞

かに寄せては返へず浪を弄し、又弄されて千鳥の群は岩より岩へと飛びかうて居ましたが、斯かる際にも絶望の底に沈んだ人の心は益々闇を求めて迷ふものと見え、一人の若者ありて、蒼ざめた顔を襟に埋め、一の岩角に蹲踞つて頻りと吐息を洩して居ました。彼は其覺悟を決めながらなほ、躊躇うて居たのです。

人の足音に驚いて後を振返へると一人の老人が近づいて來る處です。老人が傍に來て、

『日が今昇るのを見なさい、何と神々しい景色ではないか。』と優しく言葉をかけるまで、若者は何を思ふ暇もなく、たゞ茫然と老人の顔を見て居たのです。

『見なさい今だ、今が初日の出だ』と老人は言ひつゝ海原遠く眺めて居るので、若者も連れられて沖を眺めました。眞紅の底に黄金色を含んだ一團球は今しも半天際を躍出て、暫したゆたうて居る様です。

『神々しいぢやアないか、人間といふものは何時でも此初日の出の光を忘れさへ爲なければ可いのぢや』と老人は感に堪へぬやうに言つて手を合して靜かに禮拜しました。若者も思はず手を合はしました。見ながら中に日は波間を離れ、大空も海原も妙なる光に満ち、老人と若者は恍惚として此景色に打たれて居ました。

『私は六十になるが斯んな立派な日の出を見たことはない。來年はこれよりも美しくい初日の出を拜みたいものだ。あゝ佳い心持ちや』と老人は言つて更に若者に向ひ、『お前さんは何處の者ぢや』と問ひました。

『村の者で御座います。』と若者は僅に答へました。老人は其柔和な顔に微笑を浮べて、

『毎年初日の出を拜みに出るのか。』

『さうでは御座いません。』

『さうか、それでは今年が初めてだの、昔からも一年の計は元旦にありといふから、お前さんも、今日の日の出を忘れないで居なさい。如何ぢや大變顔の色が悪いやうぢやが、そんな元氣のない顔色をして居ては世の中を渡れるものではない、一緒に日の出を拜んだも目出度い縁ぢや、これから私の宅へ來るが可い、雑煮でも祝はう。』

老人は先に立つて行くのだ、若者も其儘後に従き、遂に老人の宅に行つたのです、砂山を越え、竹藪の間の薄暗き路を通ると士族屋敷に出る、老人は其屋敷の一に入りました。

老人の名は大島仁藏、若者の名は池上權藏であるといふことを言へば、諸君は、既に大概の想像はつくだらうと思ひます。

老人は若者の自殺の覺悟を最初から見て取つて居たのです、けれども最後まで直接にさうとは一言も言ひませんでした。

屠蘇を飲ましながら、言葉靜かに言つて聞かした教訓は、決して珍らしい説ではなかつたのです。少し理窟を並べる男なら誰でも言ひ得ることなりました。

朝日が波を躍出でるやうな元氣を人は何時も持つて居なければならぬ。

だから人は何時も暗い中から起きて日の出を拜むように心掛けなければならぬ。そして日の入るまで、手あたり次第、何でも御座れ、其日に爲るだけの事を一心不亂に爲なければならぬ。

日は毎日出る、人は毎日働け。さうすれば毎晩安らかに眠られる、さうすれば、其翌日は又新しい日の出を拜むことが出来る。

一日働いて一日送れば、それが人の一生涯である、日の出る時に人は生れて、眠る時に人は死ぬるのである。

老人の言ひ聞かした言葉は先づ斯んなものでありました。そして権藏は奮ひ起つて老人の許を去つたのです。

池上権藏は此日から生れ更りました、元より強健な體軀を持つて居て元氣も盛な男ではありましたが、放蕩に放蕩を重ねて親譲の田地は殆んど消えて無くなり、家、屋敷まで人手に渡りかけたので、遂に失望落膽し、今更ら世間へも面目なく、果は思ひ迫つて大いに決心して居たのです。けれども彼は此日から生れ更りました。

一日又一日、彼は稼ぎに稼ぎ、百姓は勿論、炭も焼けば、材木も切り出す、養蠶もやり、地木綿も織るし、凡そ農家の力で出来ることなら、何でも手當次第、そして一生懸命にやりました。五年目には田地も取返し、畑は以前より殖え、山懐の荒地は見事な桑園と變じ、村内でも指屈の有富な百姓と成り終

つたのです。しかも彼の勞働辛苦は初と少しも變らないのです。

大島老人の病床に侍して、最後の教訓を彼が求めた時、老人は靜かに、

『お前さんは日の出を覚えて居なさるか。』

『毎朝拜んで居ります。』

『お前さんは日の出の盛な處を見て、元氣よく働いたのは宜しい、これからは、其美しくい處を見て、美しい働をも爲るが可からう。美しい事を。』

権藏は暫く考へて居たが、

『それでは先づ如何な事を爲せば可しう御座いませう。』と問ひました。老人は目を閉ぢたまゝ、

『それはお前さんが考へなければならん、お前さんの心で、これは美しいことだと思ふこと、日の出を見てあゝ美しいと思ふと同じやうな事ならば、何でも宜しい。お前さんは日の出を拜むだらう。』

『ハイ拜みます。』

『それなら拜まれるほどのことをなさい。』

『及びもつかん事で御座ります、勿體ないことで御座ります。』と権藏は平伏しました。

『イヤさうでない、お前さんは日の出の元氣を忘れましたか。』

と言はれて権藏は、『解りました、難有う存じます。』と言つたきり、感泣して暫くは頭を得上げませんでした。

大島仁藏翁の死後、權藏は一時、守本尊を失つた體で、頗る鬱いて居ましたが、それも少時で、忽ち元の元氣を恢復し、のみならず、以前に増して働き出しました。

鬱いて居たのは考へて居たのです、彼は老人の最後の教訓を暫時も忘れることが出来ないもので、拜まれる程の美くしい事を爲るには何を爲たら可からうと一心に考へたのです。神々しき朝日に向つて祈念を凝したこともあつたのです。ふと、思ひ當つた時には彼は思はず躍り上つて喜んださうです。『自分は

大島先生を拜んでも尙ほ足りない程に思ふ、それならば大島先生のやうなことを爲ればよい。』

其處で學校を建てる決心が彼の心に湧いたので、諸君は彼の決心の餘り露骨で、單純なことを笑はれるかも知れませんが、しかし元來教育のない一個の百姓です、寧ろ其心ばせの眞率で無邪氣な處を思へば實に美しさを感じるのです、僕は。

兎も角も此決心が定まるや、彼は更に五年の間眞黒になつて働き、そして遂に一の小學校を創立して、これを大島仁藏の一子大島伸一に獻じ、大島小學校と命名して老先生の記念となし、一切のことを若先生伸一に任して了つたのです。

以上は大島小學校の由來で御座います。けれども果して池上權藏の志は學校を建てたばかりで、成就しましたらうか。

若し大島伸一先生を得なかつたなら、此小學校も亦た、世間に有りふれた者と大差なく終つたかも知れません。

然し伸一先生は老先生の麗はしき性情を享けて更にこれを新しく磨き上げた人物として此小學校を監督し、我々は第二の權藏となつて教導されたのです、權藏の志は最も完全に成就されました。

忘れもしません、僕が病氣で學校を休んで居ると、先生が訪ねて来て、

『貴様は豪い人になるのだから、決して病氣位に負けてはならん、病氣を負かしてやらなければ』と言つて僕を勵ましたことがあります。伸一先生は決して此意味を舊式に言つたものではありません。

『爲す有る人となれ』とは先生の訓言でした。人は碌々として死ぬべきでない、力の限を盡して、英雄豪傑の士となるを本懐とせよとは其倫理でした。

人は人以上の者になることは出来ない、然し人は人の能力の全部を盡すべき義務を持つて居る。此義務を盡せば則ち英雄である、これが先生の英雄經です。

そして老先生が權藏に告げた言葉、あれが其註解です、そして權藏其人を以て先生は實物教育の標本としたのです。

日の出を見るとは、大島小學校の神聖なる警語で、其堂々たる冲天の勢と、其飽くまで氣高い精神とこれが此警語の意味です。

一日又一日と、全力を盡くして働く、これが其實行なのです。

伸一先生の柔和にして毅然たる人物は、これ等の教訓を兒童の心に吹き込むに適して居たのです。

そして、先生も亦た、一心不亂に此精神を以て兒童を導き、何時も樂しげに見え、何時も其顔は希望

に輝いて居ました。

小學校生活の詳しい事、別に申しますまい。去年の夏でした、僕は久しぶりで故郷に歸つて見ましたが、伸一先生は年を取つたばかり、其精神と其生活は少しも變りません。年を取つたと言つた處で四十二三ですもの、人間の働き盛です。精神意氣に變のある筈もないのです。

たゞ老いて益々其教育事業を楽しみ、其單純な質素な生活を楽しんで居らるゝのを見ては僕も今更、崇高の念に打たれたのです。

昔のまゝ練壁は處々崩れ落ちて、瓦も完全なのは見當らぬ位、それに葛蔓が這ひ上つて居ますから、一見廢寺の壁を見るやうです。

其壁を越して、桑樹の老木が繁り、壁の折り曲つた角には幾百年経つか、鬱として日影を遮つて居る桤樹が盤居つて居ます。

昔風の門を入ると桑園の間を野路のやうにして玄關に達する。家は僅に四間。以前の家を壊して其古材木で建てたものらしく家の形を作して居るだけで、風致も何も無いのです。

先生は其一間を書齋として居られましたが、書籍は學校用の外、新刊物が二三種床の上に置いてあるばかりでした。

縁邊には豆が古ぼけた細籠に入れて干してある、其横に怪しげな盆栽が二鉢並べてありました。

口を開きました。

『イヤ如何も愚論ばかりで恥かしう御座います。然しあれでも私の力一杯なのです。』

『それで十分です、力の限り書いて其れで愚論なら別に仕方無いからな。けれども楽しみは有ります。私はこの頃になつて益々感ずることは、人は何んな場合に居ても常に楽しい心を持つて其仕事をする事が出来れば、則ち其人は眞の幸福な人といひ得ることだ。不精々々にやつた仕事に立派な仕事はない、そして一生懸命に仕事する時ほど楽しいものはないやうだ。』

先生の此等の言葉は其實平凡な説ですけれど、僕は先生の生活を見て此等の説を聞くと、平凡な言葉に清新な力の含んで居ることを感じました。

伸一先生は給料を月十八圓しか受取りません、それで老母と妻子、一家六人の家族を養うて居るので、家産といふは家屋敷ばかり、これを池上權藏の資産と比べて見ると百分一にも當らないのです。

けれども先生は其家を圍む幾畝かの空地を自ら耕して菜園とし、種々の野菜を植ゑて居ます。又五六羽の鶏を飼うて、一家で用ゐるだけの卵を採つて居ます。

書齋の前の小庭は綺麗に掃除がして有つて、其處へは鶏も入れないようにしてあります。

先生の生活は決して英雄豪傑の風では有りません、けれども先生は眞の生活をして居るのです、先生は決して村學究らしい窮屈な生活、ケチ／＼した生活はして居ません、けれど先生の自分の虚榮心の穢粧になるやうな生活は爲て居ません。

僕は先生と對座して四方山の物語をして居ながら、熟々思ひました、世に美はしき生活があるならば、先生の生活の如きは實にそれであると。先生の言論には英雄の意氣の充ちて居ながら、先生の生活は一見平凡極まるものでした。

先生を訪うた翌日でした、使者が手紙を持って来て今から生徒十數名を連れて遠足にゆくが君も仲間に加はらんかといふ誘引です。僕は直ぐ支度して先生の宅に駆けつけました。それが朝の六時、山野を歩き散らして歸つて來たのが夕の六時でした。先生は夏期休業と雖も常に生徒に近づき、生徒の爲めに時間を送つて居らるゝのです。

諸君の中、若し僕の故郷に旅行せられるやうなことが有つたならば、是非一度大島小學校を訪はれたいものです。海岸に近き山、山には松柏茂り、其頂には古城の石垣を残したる、其麓の小高き處に立つて居るのが大島小學校であります。それが僕の出身の學校なのです。四十幾歳の屈強な體軀をした校長大島氏は、四五人の教員を對手に二百餘人の生徒の教鞭を採つて居られます。

『日の出を見よ』といふ警語は今も昔に變りなく、恰も日の出の力と美とが今も昔も變りのないやうに全校の題目となり、目標となり、唱歌となり居るのを御覽になりませう。

語り終つて兒玉は一呼吸吐くやオックスホードの紳士は、

『なるほど能く解りました、日の出は力です、美です、そして實は又希望です、僕は貴殿が大島小學校の出身であることを感謝し、誇らるゝことを、當然と思ひます。僕も一度是非お國に參つて大島伸一先

生にもお目にかゝりたる御座います。』

『そして、僕は池上權藏に會つて見たい。』など高等商業の紳士は大眞面目で言つた。

『權藏は今如何して居ますか。』と問うたのはハーバードである。

『さうでした、權藏のことを言ふのは忘れて居ました、益々達者に暮して居ます。大島小學校も今は村の經濟で維持して居ます。が、しかし村の經濟の主腦は池上權藏ですから、學校の保護者は依然として其の昔覺悟まできめた百姓權藏であります。』

權藏の富は今や一郡第一となり、彼の手に依つて色々の公共事業が行はれて居るのです。けれど諸君が若し彼に會つたら恐らく意外に思はるゝだらうと思ひます。

權藏は最早彼は六十です。けれども日の出づる前に起きて日の没するまで働くことは今も昔も變りません。そして大島老人が彼を救うた時、岩の上に立つて、

『來年はこれよりも美しく美しい初日の出を拜みたいものだ。』と言つた言葉、其言葉を堅く覺えて居て、其精神を能く味はうて、年と共に希望を新たに、一日又一日と働らいて老の至るのを少しも感じない様子です。

『老を知らなければ老いず、僕は池上權藏は死ぬるまで老いなければと思ひます。死ぬる今は際にも、彼は更に一段の光明なる生命を望んで居るだらうと思ひます。不死不朽とはこのことでは御座いますまいか。』

權藏は其居間の床に大鳥老先生の肖像をかゝげ、其横に日の出の圖が下つて居ます。これは伸一先生に求めて畫いて貰つたのださうです。そして大鳥小學校の一室には池上權藏の肖像が掛けてあります。

それより一週間ばかり経つて、兒玉進五の宅で彼の所謂同窓會が開かれた。

兒玉は此席で同好俱樂部の一條を話した、他の二人は唯だ微笑したばかり、別に何とも評しなかつた。會毎に三人は相談して必ず月に一度の贈品を大鳥小學校に送る、それが必ずしも立派な物ばかりではない、筆墨の類、書籍圖畫の類なので、オルガン一臺を寄送したのが一番金目であつた。

『今度は何を送らう。』と兒玉は二人に問うた。

『矢張書籍が可からうぢやないか。』と判事が答へた。

『本なら僕が考へがある。今度會社で世界航海圖の新しいのが出來たから、あれを貰つて送らう、如何だね。』と郵船會社員が一案を出した。

『それも至極妙だ。けれども其他何にしよう。』

『畫は如何だらう。』と判事が一案を出した。

『畫も可いが最早有ふれたものばかりだからなア。』

『實は先日、倫敦の友人から「世界の名畫」と題して、随分巧妙に刷つてあるのを二十枚ばかり贈つて呉れたがね、それは如何だらうかと思ふのだ。』

『可からう!』と他の二人は賛成した。

『其所で例の唱歌の一件だがね、僕は色々考へたが今更唱歌にも及ぶまいと思ふのだ、如何だらう。』日の出を見る」で澤山ぢやアないか。それをなまじつか今の歌人に頼んで作らした所で、ありふれた初日の出の歌などは感心しないぜ。若し作るなら、學校から出た者が作つたのでなければ、とても「日の出を見る」の一語で我等が感ずるやうな物は出來ないぞ、如何だらう」と兒玉の説いたのに二人は異議なく賛成し、兒玉は二人の前で大鳥校長宛にすらくと次の手紙を書いた。

『御依頼の唱歌の件は我等三人とも同意致し兼ね候。東京にも歌人の大家先生は澤山あれど我等のやうに先生の薰陶を受け大鳥小學校の門に學び候ものならで、能く我等の精神感情を日の出の唱歌に歌ひ出し得るもの有るべきや、甚だ覺束なく存候。我等の學校も何時かは眞の詩人出づることあらん。その時までは矢張り「日の出を見る」で十分かと存候。日の出の唱歌を歌うて朝寢坊する人物が學校から出るやうになりては何の益にも立つまじく、其邊御賢慮願上候。』

三人は連名で此手紙を出した、大鳥先生から直ぐ返事が來て、
『御主意御尤に候。日の出の唱歌は思ひ止まり候。淺ましい哉、教室に慣れ候に従つて、心よりも形を教へたく相成る傾き有之、以後も御注意願上候。』



◀命 運▶

大正六年八月十五日印刷
大正六年八月二十日發行
大正八年五月十日十版

(定價金六拾錢)

著者

國木田獨步

發行者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地
新潮社
電話番町(八)八九〇九番

印刷所

東京市神田區宮本町五丁目下谷四〇六七番

印刷者 新潮社印刷部

高橋治一

若うして逝ける天才石川啄木の全集新に出づ

啄木全集

全三冊 總洋布製一冊七百頁
定價一冊壹圓七拾錢
郵送料一冊八錢づゝ

天折せる天才石川啄木の全集出づ。啄木は其時代の先驅者たるに於て、その妥協し難き性格者たるに於て、其悲劇的なりし短かき生涯に於て、其業績の時代區劃的なる點に於て、其作品の斑々たる心血に彩られ、痛刻骨を刺すが如き點に於て、彼の透谷を偲ばしめ、彼の獨歩を思はしむるもの無くんばあらず。殊に、彼が先天の稟質として之を有せる社會的感情と、彼が熱情の限りを盡して之を謳へる民主的思想とは、これを透谷に見ず獨歩に得ざるところにして、ひとりよく我が啄木が現下の思想界に痛切なる共鳴を呼ぶ所以のものにあらずや。彼逝いて七年、即ちその七回忌に際し、小社は、生前の知己與謝野、金田一、土岐三氏に囑してその作品の全部を集め、こゝに啄木全集を刊することとなれり。近時最も意味深き出版たることを自信す。

- 第一小説集 (再版) 處女作『雲は天才である』以下深く篋底に藏して公にせざりし作品に加ふるに、長編『鳥影』『我等の一團と彼』等其の一切の作を集む。密字版七百頁の大巻也。
- 第二詩歌集 (七月上旬發行)
- 第三感想書簡集 (九月中旬發行)

世界第一の戀愛詩集、始めて口語の新體に譯せらる

ハイネ詩集

生田春月氏譯 (第六版) 定價八拾五錢 郵送料六錢

「古今を通じ、世界に亘りて、ハイネに匹敵すべき、甘き情熱の音楽はあらず」とはハイネの語也、ハイネの名は、青春子女の憧憬措く能はざるもの、其の詩殆ど皆戀のなやみを歌ひて、濃艶薔薇の如く、可憐童に似たり。生田春月氏、今、獨の原語に就き之を流麗雅馴なる口語體に譯す。收むるところすべて三百有一篇、ハイネの各方面を盡くして遺憾なく、殆ど其の全詩集と稱するに足るものあり。

ホイットマン詩集

白鳥省吾氏譯 (新刊) 定價八拾五錢 郵送料六錢

近代民主詩人の代表者たるホイットマンの全作に亘り、其の精神を譯出す。白鳥氏は、此の詩人に傾倒すること久しく、大なる憧憬と興味とを以て、反譯の事に従へり。

ゲエテ詩集

生田春月氏譯 (近刊) 定價八拾五錢 郵送料六錢

ゲエテは世界的大詩人、その詩悉く「大いなる懺悔録の一節」也。寔に人を動かすこと斯くの如きは稀也。生田氏今慘愴の苦心を重ね努力半歳にして漸く本譯を全うせり。

■エルテル叢書■

綿洋布天金極美本
定價一冊六拾五錢
郵送料六錢づゝ

題意は、『エルテル』の如きと云ふ意也。即ち『若きエルテルの悲み』と同じく泰西に於ける高名の戀愛文學の傑作を集めたる叢書にして、譯者は皆文壇の新進、多大の苦心を費して成せるもの。装幀亦内容にふさはしき美本也。

キヨオテ作 秦 豊吉氏譯 (十一版)

(1) 若きエルテルの悲み

若きエルテルが、美しき、されど既に人妻なるロツテを戀ひて、悲みに胸破れ、自ら殺して果つるまでの、なやみとわづらひとを、書簡體に直叙せる、世界最高名の作。

サンビエル作 生田春月氏譯 (第六版)

(2) 海の嘆き (原)ポオルと (名)ギルジニイ

南の海の小さき島なる椰子の葉蔭に幼なき戀をはぐんだ少年と少女とが、浮世の運命に弄ばれて生別に哭し、死別に哭するに至る、あはれ限りなき戀物語である。

ベチ 工作 後藤末雄氏譯 (第四版)

(3) 戀と死 (原)トリスタン (名)とイゾルデ

王女イゾルデは悲しき戀に悶えつゝ、海を越えて嫁ぎゆかうとする、それを送る勇士トリスタンは媚薬の惑はしに心を奪はれ、遂に死にまで戀に殉ずるに至つた。

ツルゲーネフ作 衛藤利夫氏譯 (四版)

(4) 薄倖の少女 (附)馬車を待つ間 (録)

切なる戀にやぶれ、若うして死せる薄倖の少女を描くに、其の獨特の靈筆を以てせるもの。言々咽ぶが如く、句々の間に熱涙あり、眞に哀切限りなき物語である。

シヤトウブリアン作 生田春月氏譯 (三版)

(5) 少女の誓 (原)アタラ (名)とルネ

アタラは新大陸の原始の自然を背景として、神に誓はるゝ人の戀の烈しきなやみを描き、ルネは姉と弟とのあやしくも、うつつなき戀心を描く、共に世界高名の傑作。

ピヨルンソン作 三上於菟吉氏譯 (再版)

(6) 森の處女 (原)ソルバッケン (名)ゾルバッケン

山の彼方と山の此方とに生ひたつた少年と少女との初戀のあこがれとなやみとを、峰高く霧深き那威山郷の自然を背景として、作者一流の筆に描ける清純の物語。

ギヨオテ作 久保正夫氏譯 (新刊)

(7) ヘルマンとドロテア

ライン河畔の一貴公子と革命の難を逃れ來れる美しき佛蘭西娘との戀を描く、華麗にして優雅、熱切にして而も哀婉の思ひほのかなる名高き傑作である。

遣る方なき青春の悩みを描ける世界最高名の戀愛文學を集めたる新叢書

異常の歡迎、各編悉く増版又増版——第七編以下續々刊行

□ 集 說 小 □

■ 子をつれて	葛西善藏著	定價壹圓 拾錢 郵送料八錢
■ 世の中へ	加能作次郎著	定價壹圓五拾錢 郵送料八錢
■ 痴人の愛	久米正雄著	定價壹圓四拾錢 郵送料八錢
■ 戀の日	久保田万太郎著	定價九拾五錢 郵送料八錢
■ 傀儡師	芥川龍之介著	定價壹圓四拾錢 郵送料八錢
■ 心の王國	菊池寛著	定價壹圓參拾錢 郵送料八錢
■ 血で描いた畫	小川未明著	定價壹圓貳拾錢 郵送料八錢
■ 學生時代	久米正雄著	定價壹圓貳拾錢 郵送料八錢

□ 集 說 小 □

■ 白樺の森	白樺同人著	定價壹圓五拾錢 郵送料八錢
■ 夜の光	志賀直哉著	定價壹圓四拾錢 郵送料八錢
■ 死	有島武郎著	定價五拾五錢 郵送料六錢
■ カインの末裔	有島武郎著	定價五拾五錢 郵送料六錢
■ 生活の花	長與善郎著	定價壹圓四拾錢 郵送料八錢
■ 青白き夢	素木しづ子著	定價九拾錢 郵送料八錢
■ 寂しき道	江馬修著	定價九拾五錢 郵送料八錢
■ 彼女の生活	佐藤俊子著	定價九拾五錢 郵送料八錢

□ 長 篇 小 說 □

■ 受 難 者	江 馬 修 著	定價壹圓六拾錢 郵送料八錢
■ 暗 礁	江 馬 修 著	定價壹圓六拾錢 郵送料八錢
■ 不 滅 の 像	江 馬 修 著	定價八拾五錢 郵送料六錢
■ 二 人 の 不 幸 者	廣 津 和 郎 著	定價九拾六錢 郵送料六錢
■ 荊 棘 の 路	相 馬 泰 三 著	定價壹圓四拾錢 郵送料八錢
■ 煉 獄 <small>(蛇酒合煉獄卷)</small>	上 山 草 人 著	定價壹圓五拾錢 郵送料八錢
■ 宣 言	有 島 武 郎 著	定價五拾五錢 郵送料六錢
■ 迷 路	有 島 武 郎 著	定價八拾六錢 郵送料六錢

